
幸せの天使タイガー伝説

一匹野良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの天使タイガー伝説

【Nコード】

N4200P

【作者名】

一匹野良

【あらすじ】

アニメ「とらドラ！」の1話から大河の視点で描いています。オリジナルキャラを参戦させて内容にアレンジを加えました。

とらの道の上のケモノたち

「ぶぎゅんっ！！」

少女はくしゃみと共に目覚めた。

外でスズメたちが『チュンチュン』と鳴いている。しかしそれも、機密性の高い壁や窓に遮られて、少女の耳には届かない。その窓はカーテンで締め切られ、少女の寝ている部屋は薄暗くなっているが、隙間に見える光は朝を迎えたことを告げていた。

「う〜〜、はなみずう……。ティッシュ……。どこお？」

少女は重たい瞼を閉じたまま、手探りでティッシュ箱を探す。標的を捉えた手が一瞬動きを止め、ターゲットを認識するや否や再び動きだす。そして、ティッシュを一枚抜き出し、炎症を起こして赤くなっている鼻へ二つ折にして当てた。

「ふん、ずすすうっ……。あうっ」

鼻をかむ少女の瞳は薄く開かれ、天井をぼんやり見ていた。視線を動かさず使用済みのティッシュを丸めて、ゴミ箱があるであろう方向へ投げた。どうにもだらしの無い少女である。

投げられたティッシュがゴミ箱の中にちゃんと入ったか不明だ。何故ならゴミ箱の周りにティッシュがいくつも散乱しているからである。きつと、昨夜から嫌になるほど鼻をかんでいたであろう。

この部屋の中心には圧倒的な存在感を放つベッドがある。けして部屋が小さい訳ではない。だが、クイーンサイズのベッドが部屋の広さを実際の半分に錯覚させる。

そのベッドの上で、ちょこんと寝そべる少女の体はとても小柄だった。アンバランスな組み合わせの所為で、まるで『お伽の国で小人を目の前にしている』そんな感覚にさえ陥らせる。お人形さんにも見えてこないでもない。

少女はその小さな体を起こして、虚ろな目で辺りを見回した。目覚めたばかりの意識はまだぼんやりとしていて、今日が何月何日で

何をやる日かも分かってはいない。眠たい目を擦りながら少しずつ記憶を辿っていく。次第に昨夜からの記憶がゆっくりと戻ってきた。

「あ　眠む……。昨日買った薬ぜんぜん効いて無いじゃない……」

少女は一日中とまらないくしゃみと鼻水を解決すべく、薬局で鼻風邪に効く市販の薬を買って飲んでみた。それでも鼻水は止まらず、症状は改善されなかったようだ。

それに寝起きで頭が少し重く感じる。目覚めの良い健やかな朝とは程遠かった。

「ぶぎゅんっ！ぶぎゅしゅっ！！」

くしゃみも全然とまらない。

「やっぱり医者行かないと駄目ね……。始業式めんどーだし、学校の前に行つてこよ」

くしゃみに鼻水、それと微熱で頭が少しぼーっとしているものの、少女の意識は大分はつきりとしてきた。

今日は新学年を迎える始業式の日。だというのに、少女の体調はご覧の有様だ。それにくしゃみ鼻水だけではない。寝つきの悪い夜も続いていた。やっと眠れたと思っても、喉の渇きで目が覚めてしまい熟睡できない。睡眠不足で疲労も溜まっていた。

「はっ…ぶしゅっ！うっ…っ、そろそろ仕度しなきゃ」

少女は気だるそうに起き上がり、ぺたぺた歩いて寝室を出ていった。

寝室を出るとそこは広いリビング。奥には大きな液晶テレビがあり、その両脇にトルボーイ型スピーカーが二台そびえ立っていた。テレビの前にお洒落で高級そうなテーブルが置かれている。その横にあるのは、これまた高級そうなハイバックのフロアチェア。高級感溢れる黒革で出来きており、座り心地がとても良さそうだ。背もたれの高さは座ったら頭の上までくるだろう。

壁際に置かれた大きなラックには、いくつもの小物のインテリアが並べられていた。それぞれセンスが光り、とても庶民の行くお店に置いてなさそうな物ばかりが飾られている。

大きな窓からは、十分な光が差し込み部屋を明るく照らしていた。朝日を浴びつて、逸そうと白く輝く真つ白なダイニングテーブルとセットのチェア。隣接するキッチンはいランド型になっており、最新式のスタイルはこの建物の新しさを感じさせる。

部屋はまるでドラマのワンシーンを撮るために用意されたセットにも見えた。しかし、そこには朝食の用意する母親の姿も、コーヒ―を飲みながら新聞を読む父親の姿も無い。ただっ広いリビングに少女は一人だった。

静かな朝だった。但し、部屋の有様がこのようになっていなければ……。

コンビニのビニール袋や、スナックの空袋、その他、雑誌や脱ぎ捨てた服などが床一面に散乱している。アイランド型キッチンの方からは表現のしようもない、おぞましい臭いが漂ってくる。その上、埃は宙を舞い、窓から差し込む朝日に無数の埃が目に見える。空気はかなり汚れていた。

「まったく、最新式の高級マンションだったら、自動で掃除する機能でもつけろってーの」

二十一世紀初頭の現代で流石にそこまで科学技術が発達しているはずもなく、無茶な注文でしかなかった。

「さて、顔洗うか」

少女は洗面所に行き、いつものように顔を洗って、シャカシャカと歯を磨いた。そして、髪を梳かし始める。

洗面化粧台の鏡に映る少女の顔はとても可愛かった。未だ眠たそうにしているが、小さな顔の割りに大きな瞳をしている。眉は細く整えられ、顔の輪郭は少し丸みがあり幼さをまだ残していた。そして、何より全体的に整った顔立ちをしていた。

前髪は前に下ろしてあり、少し目に掛かるくらいの長さだ。側面は余裕で耳が隠れるほど髪が伸びている。腰の下までくるほど長い後ろ髪は、きつと長年大事に伸ばしてきたのだろう。毛質はふんわりとした猫毛で、少女は寝癖を直すのに吝かでなかった。

朝の一連の作業を済ませると、洗面所を出て寝室に戻り着替えを取り出す。クローゼットに掛けてある制服、クリーニングからおろしたままで、ビニールも取っていない白いブラウス。それに、クローゼットのバーに無造作に掛けてあった紺色の紐ネクタイ。引き出しからは黒のオーバーニーソックスを取り出し、それらをベッドの上に放り投げた。

少女は部屋着をパパッと脱いで、ベッドに座った。

投げ出したオーバーニーソックスを手に取り、つま先から膝上までたくしあげる。ブラウスを包んでいたビニールを剥ぎ取って、ボタンを外し袖を通す。

「あ、痛てっ」

首元がチクツとした。

一度ブラウスを脱いでよく見てみると、襟の辺りにクリーニング屋が取り付けたタグがついていた。タグを取り付けるホチキスの針が首に刺さったのだ。

「何よっ、めんどくさいったら……」

タグをプチッと切り取って、その辺に捨てた。気を取り直して、ブラウスを着なおす。今度はちゃんと首元も無事だ。ブラウスのボタンを上の方から留めて、首元を紐ネクタイで締める。

学校指定の紺色のプリーツスカート履いて、中にブラウスの裾を押し込む。スカートの丈はオーバーニーソックスとの間に肌が見えるほど短かった。

最後に赤のカラーレスジャケットを羽織ってボタンを留めると、着替えは完了した。

「鞆、鞆っと。あれっ、どこに置いてあったっけ……？あー、あったあつたあ」

少女の顔はとてにこやかだった。

見つけた鞆を手に取り、いそいそと中身を確認する。教科書やノートを掻き分け、大事そうに『それ』を手にとった。

少女は『それ』を愛しそうに見つめる。差し出す相手を想うよう

に…。

「きた…むらくん…。」

もし部屋に他に誰か居たとしても、誰にも聞こえないくらい小さな声で、少女は呟いていた。

学校へ向かう仕度を済ませた少女は、朝食も食べずに部屋を出ていった。

玄関の扉はオートロックになっている為、扉が完全に閉まるのも確認せずにエレベータへ向う。エレベータの下降ボタンを押して暫くすると、少女のいる二階フロアに停まり扉が開いた。この朝の間帯にしては、珍しく誰も乗っていない。ご近所付き合いの無い少女にとっては、誰とも会わない方が気が楽である。

少女はエレベータに乗り込み一階ボタンを押した。時間が経ち扉が自動で閉まり、エレベータは動き出した。

一階に着いてエレベータを降りると、少女は自動ドアを抜けてマンションを出て行った。

「逢坂さーん、逢坂大河さーん。診察室へお入りくださーい」

「あ、私の番」

少女は遅刻上等で耳鼻科のある病院へ来ていた。お年寄りや子供を連れた母親など、多くの人達でこった返す待合室で、少女は何度も鼻をかみながら、自分の名前が呼ばれるのを待っていた。そして、やっと自分の順番が回ってきて診察室へ入っていった。

耳鼻科の先生に診察を受ける少女。逢坂大河。

「逢坂さん。恐らく、ハウスダストアレルギーですねえ。抗アレルギー剤出しておきますので、それでしばらく様子をみてください」

「はあ…」

「部屋はちゃんと綺麗にしていますか？特に機密性の高い住宅などで起こりやすい症状で、カビやダニ、埃が原因になっていますので掃除や換気を怠らないでくださいね。空気清浄機なんかを取り付けるのも効果的ですよ」

「はあ…そうですね。それでは、ども」

大河は受け答えを一応はしているものの、話をちゃんと聞いている様子はない。

診察を終えると、薬を貰ってようやく学校へ向かった。

大河は大橋高校に通う高校二年生である。大橋高校は長い坂の上にある。一年前は『何でこんな坂の上になぜわざわざ建てるのよ!』と、文句を言いながら歩いてきたものだ。一年通い続けた今は慣れたもので、無駄な体力を使わず効率よく坂を登れるようになっていた。

高校へ続く上り坂で大橋高校の制服を着ているのは大河だけだった。始業時間はとくに過ぎていた。もし他にも同じ制服を着て坂を上る者が居れば、大河と同じく遅刻の生徒という事になる。

大河は遅刻だろうがゆっくり歩いていた。焦らずゆっくり、というよりダラダラと坂を登って学校に着くと、玄関には新学年のクラス割りが張り出されていた。周りに大河以外の生徒の姿はない。今のこのクラス割りを見ているのは大河ひとりである。

大河は自分の名前を探した。自分の名前を探すのは得意だった。何故なら五十音順で並べられると、大概は一番目か二番目に名前があるからだ。

A組から順に目を走らせる。A組……B組……そして……。

「あ、あった、C組かあ。みのりんはどこだろ」

再び目を走らせる。

「……っ……!?!」

自分と同じクラスで予想外の名前を見つけ、驚きでハッと口を押さえた。

大河は顔を赤らめ、うるうるとした目でその名前に見入っている。

「同じ……クラスなんだ……」

自宅を出る前に『それ』を手にした時の様な眩きを漏らしていた。その名前を惜しみつつ目を進めると、直ぐに探していた名前を見つける。

「やったあ、みのりんも同じクラスっ」

弾んだ声で親友の愛称を口にした。

大河がクラス割りに一通り目を通した頃、校舎の奥の方から人のざわめく声が聞こえてきた。体育館の方からであろうか、大勢の人が歩き、階段を上る足音が聞こえる。時間帯からして、始業式を終えた生徒たちが、体育館から教室に戻っている最中なのだろう。

大河はそんな校内の様子などに気に留めることもなく、靴を内履きに履き替えて、新しい自分の教室へと向かった。

「ぶぎゅしゅっ！……う……、ずずずうっ」

始業式を終え、生徒が行き交う廊下を大河は俯き加減で歩く。くしゃみと鼻水、それに睡眠不足で頭がぼーっとしていたからだ。

他に廊下を歩く女子生徒たちに比べ、大河の身長は一回り小さく見えた。それというのも身長が145cm（公称）しかないのである。その145cm程の小さな女の子が、ほとんど前を見ずに廊下のだと真ん中を歩いて、誰ともぶつからなかった。

何故なら大河の姿を見た生徒たちは、二回り以上は背の高い男子でさえ慄き、自ら大河に道を譲っていたからであった。しかし、中には気の抜けた不注意な奴もいるものである。

「どうした、高須？」

「あ、ああ。ちよつとトイレに」

トイレに向かう気の抜けた男子生徒は、『先行ってるぞ』と言って教室に入った友人を見たまま歩き出した。その時、前を全く見ていなかった。

『ドンツッ！』

「えっ……？」

余所見しながら歩き出した気の抜けた男子生徒が、何かと衝突したのに気づいた瞬間、周りの生徒たちが一斉にざわめき出した。

「うそっ……あれっ……」

「うわっ！マジッ！？」

「ついに、最強カードの実現かあ！？」

「新学期早々、いきなりの頂上決戦！？」

当の本人が状況を把握するよりも先に、野次馬たちのテンションは上がっていく。

「ん、何がっ」

男子生徒は周囲の様子に困惑する。

「ねえ…あれって高須くんでしょ？ヤンキーの……」

「そうそう、ヤンキー高須竜児」

「しーっ！聞こえたらヤバいつて」

もちろん、その声は渦中のだ真ん中にいる男子生徒、高須竜児に聞こえていた。竜児は父親ゆずりの三白眼で目つきが悪かった。本来は穏やかな性格であるにも関わらず、周りからはヤンキーと誤解されている。

しかし、良く見てみると竜児の身だしなみは他の生徒よりも良い。髪の毛は真っ黒で一切染めておらず、前髪の長さは眉に掛かる程度。横は耳がハッキリ見えるほど短い。襟足もだらしなく伸ばしておらず、短くスッキリとしていた。学ランの下にきているYシャツは、見えてはいないがしっかりとアイロン掛けされていて、襟はしっかりと立っていた。爪も短く適度に切られていて、小まめさを感じる。竜児はヤンキーと言われ慣れていたが、それでもあんまり気分が良いものではない。ただ、今はそんな事を気にするよりも、自分が置かれている状況を把握するのでもいいと思った。

正面から何かにつつかった感触は確かにあった。しかし、前方を見渡しても目の前に誰もいない。

「……フンツ！……」

その声は誰も居ないはずの正面の方から聞こえてきた。それも、かなりの下の方から。

竜児が下を覗くとそこには女の子がいた…極小の。

女の子は竜児を見上げていた。　というより、むしろ恐ろしいほど鋭い目つきで睨みつけている。しかも、拳を握り締めて…。

竜児はなんとか眼光を逸らしたいが、一度合わせたその獰猛な目は、背けた瞬間に襲い掛かってくる猛獣のモノのようだ。

この小さな女の子は、こんな敵つい感じのしかめっ面をしていなければ、きつと可愛いに違いない。しかし、その下を向かなければ見えないほど小さい女の子から、容姿に似つかわしくない威圧感が放たれている。なんとというか、凶暴そうな……。

「ねえ、あれって手乗りタイガーでしょ？高須くん自分からぶつかりに行つてなかった？」

「だよねえ？それに今すつこい目つきでタイガーのこと睨んでない？どうしよ、先生たち呼んできた方がいいのかなあ？」

竜児は周りで噂する女子たちの話を聞いて納得した。

「おお、なるほど！ちつこいわりに凶暴そうだから、手乗りタイ……」
口に出した言葉を言い切る前に、竜児の視界が一瞬だけ暗転した。それと同時に強烈な衝撃が顎に走っていた。

竜児が後方へ倒れ込みながら目にしたのは、アッパーを極める大河の姿だった。

（だ　れが、手乗りタイガーよっ）

竜児がそのまま倒れ込むと周りに激しい歓声が上がった。

大河は豪快に振り上げたその拳を降ろし。

「ちつこい言うなっ！」

と言い放つて、教室へ入っていった。

「……手乗りタイガー、ぴったしじゃねえか……」

天井を正面に見上げ、呟く竜児の声を掻き消すように、周りの野次馬たちは更に盛り上がっていった。

新学年を迎えて初めての休み時間、二年C組の教室は友達とお喋りをする生徒達の声でざわついていた。一年生の頃からの友達と話をする者。席が隣になったクラスメイトと話をする者。自分の席で次の授業の準備をしている者。それぞれ思い思いの場所で休み時間を過ごしている。

大河と竜児のバトルを観戦していたクラスメイト達は、未だ興奮が治まらず特に賑わっていた。

「すごかったよね、最強カードの対決」

「やっぱり手乗りタイガー、つえーなあ」

「っていうか、高須って見た目がヤンキーなだけで全然怖くねえし」
「え、そうなの？でも、みんな高須くんのことヤンキーだって噂してるよ」

「噂は噂だろ。一年の時、高須とおんなしクラスだったけど普通に話してたぜ」

「へえ〜そうなの？ホント意外っ」

当の本人たちが同じ教室にいるにも関わらず、クラスメイト達は大きな声で喋っていた。

「大丈夫、大河？来るのも遅かったみたいだし」

大河の隣の席に座り、心配した様子で話し掛けるのは、櫛枝実乃梨。大河の親友でクラスメイト。髪は赤みがかった色をしていて、肩に掛かるかどうかの長さのセミロングだ。

今は心配そうな表情で大河を見ているが、いつもは元気ハツラツとした明るい少女である。目はパツチリとしていて、とても可愛らしい顔立ちをしている。

女子ソフトボール部キャプテンを務めるだけあって、その引き締まった体はどちらかと言うとスマートな体型に見えるが、本人はそれでもダイエットを心がけていた。

大河からは『みのりん』と愛称で呼ばれ親しまれている。

「うん、平気。医者よってきたの、ハウスタストがどうかみたい」
大河はチーンと鼻をかみながら答えた。

「おお、現代病。そりゃあ大変だねえ」
心配してくれる親友を余所に、大河の視線はその向こう側に行っている。

（ふひひっ、北村くん……、今年と同じクラス。　　って言うか、何？あの北村くんの隣にいる目つきの変な男。なんか友達みたいだけど……。さっきどこかで見たような……。）

意識がどこかに飛んでいる大河を、櫛枝は訝しげに見ている。

「大河、どした？」

「うっん、別に…」

大河は視線を親友に戻し、誤魔化した。

「ほら、鼻でてるよ」

櫛枝は自分のポケットティッシュを取り出し、子供の鼻をかんてあげる母親のように、大河の鼻にティッシュを当ててあげた。

「あ、うん…。ふん、すすすうっ……」

大河と櫛枝は春休みぶりの再会を果たし、仲良く一緒に休み時間を過ごしている。そんな女子二人の向こう、先ほど大河が視線を向けていた先で、竜児とその親友の男子二人も、先ほどの一件もあつて話が絶えない。

「大丈夫か、高須？」

親友は大河に殴られた竜児の顎を心配した。

竜児はそこを撫でながら答える。

「おう、まあな」

「でもまあ、おかげでお前がヤンキーだっていう誤解は早く解けそうじゃないか」

当事者に聞こえるくらい大声で噂している、クラスメイト達の声を聞くとそう思えた。

「うーん、だと良いけどな」

クラスが変わる度に、いつも誤解され続けた竜児は悲観的だった。「でも、なんなんだあいつ。間髪いれず殴ってくるし…」

「あいつは逢坂大河。今日からお前のクラスメイトだ」

「そのクラスメイトにいきなり拳かよっ」

毎度の事より『手乗りタイガー』と呼ばれる、凶暴なちっこい女子の方が気になった。しかし、異性としてという意味ではない。ただ衝撃的だったのだ。精神的にも。物理的にも…。

「まあまあ、あいつは自分の感情を何でもストレートに表現する奴なんだ。悪気は無かったと思う。許してやってくれ」

竜児に拳を浴びせた女子でさえ、フオローする親友の名前は、北

村祐作。生徒会の副会長を務めており、クラス委員も過去に何度も引き受けていた。見るからに真面目で、眼鏡をかけ揃えられた髪はまさに委員長キャラそのものである。竜児とは一年の時から付き合いで、竜児の事を良く理解してくれている数少ない存在だ。

「別にいいけどよお。それより北村、あいつとなんか知り合いなのか？」

「いや、そんな大そうなもんじゃない。まあ、よく目立つ女の子ではあると思う」

「それもそうか、周りの連中もなんか良く知ってるみたいだしな」

竜児は北村と話をしつつも、時々その視線は仲良くお喋りしている二人の女子に向けられていた。大河と櫛枝の二人である。

竜児の視線は特に櫛枝へ注がれていた。大河をかまっている櫛枝の顔は、やさしい母親のような笑顔をしていた。その笑顔が竜児には堪らなく眩しかった。

ある意味、大河と竜児は似たもの同士だった。二人とも自分の親友と喋りながら、気になる異性を見ていた。二人の視線は交差してすれ違い、目が合う事は無かった。

だらしのない顔で櫛枝を見ていた竜児の視界に、フランクな感じで櫛枝に話し掛ける一人の男子生徒が映った。

「よっ、みのみのみりん。久しぶり」

「やあ、柚うち。久しぶりー、今年は同じクラスだねっ」

「クラスメイトとして、これからも宜しく頼むぜ、みのりん」

「…お、おうよっ。宜しく頼むぜ！！ミスター・クラスメイツ・ユズッキー。あ　っはっは　っ」

愛称で呼び合う櫛枝と男子生徒を見て、竜児は動揺を隠せなかった。なぜなら櫛枝は竜児の憧れの女子だからである。

「なんだ、あいつ。今、櫛枝の事を『みのりん』って呼んでなかったか？それに『柚うち』って…」

竜児から無意識に出たその言葉は、北村に質問したつもりで言っただけでは無かったが、北村の耳に十分届いていた。

「ああ、あいつは確か、櫛枝から中学の時から知り合いつて聞いたことがあるな」

「へえ〜」

無意識の言葉に答えた北村に、竜児は気の抜けた返事をしたが、直ぐにハツとした。

「って、北村っ、聞こえてたのか」

驚く竜児を気にも留めず、北村は補足を付け足す。

「一年の時は櫛枝と別のクラスだったんだが、たまに櫛枝のクラスに遊びに行ってたらしいぞ」

「わざわざ別のクラスに……って、なんで北村そんな事まで知ってたんだ？」

「神田柚樹。我がソフトボール部に在籍してた男だ。元ではあるがな」

「つまり、櫛枝と同じ部活なのか。ん？今、元って言わなかったか？」

「ああ、言ったぞ。神田は一年生ながらにして、秋の大会からはスタメン確実とまで言われたんだが、どういうわけか二学期に入って急に退部を申し出てな。みんな引き止めたんだが、そのまま辞めてしまった。まあ、その後のことまでは知らん」

「同じ中学出身で、元部活メンバーか……」

「平たく言つと、そういう事になる」

「へ、へえ〜」

次々に質問をよこす竜児に、北村は坦々と答えた。

憧れの女子と親しげな男子。自分よりも接点が多く、自分の知らない櫛枝もきつと知っている。見ていてそうそう気持ちの良いものではないが、余計に目が離せなくなった。

竜児は自分から櫛枝に話しかけるなんて事はできない、遠くから見ているしかない。それなのに、たった今、自分の視線の先に現れた『神田柚樹』という人物はごく自然に、そして、とても親しげに櫛枝と会話していた。

胸が少し痛い。

そんな当の柚樹は、鼻炎とくしゃみに苦しむ大河に関心を向けていた。

「逢坂も久しぶり。なんだ、花粉症か？」

「へっ　ぶしゅっ!!へぶしゅっ!!ぶぎゅしゅっ!!あ　、
しんど。……ん、何？」

「何って逢坂、俺のこと覚えてる？」

「　誰？」

大河はチラッと柚樹を見たが、特に興味が無いようだ。

お惚けな大河に櫛枝がフォローを入れる。

「やだなあ、大河ったら。神田くん、覚えてない？去年たまに私と一緒に喋りしてたじゃない」

（そういえば、見たことあるかも……。でも、だいぶ前だし、全然覚えてない……）

「そうだっけ、みのりん？そっかじゃあ、久しぶり久し……っ……ぶぎゅんっ！」

適当そうに答える大河の口をくしゃみが遮った。

その天然的な大河の愛嬌が場を和ませる。

「あはははっ、こりゃあ重症だねえ」

「花粉症、大変そうだな」

「大河、ハウスタストなんだって」

「へ、そうなのかあ」

柚樹は大河を向いて言っているのに、答えが返ってくるのはその横の親友からだ。

「ぶぎゅしゅっ!!へっ　ぶぎっ!!ぶぎゅん!!」

こんな状況だから、しょうがないかもしれないが……。

大河のダイナミックなくしゃみに、柚樹はちよつと心配になってきた。

「あらら……。かなり悪そうだな」

「もつずつとこんな調子だよ」

「そっか、なんか悪そうだし席もどるわ」

「うん、「めんね」

何故か謝るのは櫛枝だ。

「んじゃ、またな、みのりん。 と、逢坂も…お大事に」

「あはは…、またね柚くん」

相変わらず反応の無い大河に、櫛枝は苦笑いしつつ柚樹に軽く手を振った。

そうして柚樹は自分の席に戻っていった。

「ふ んっ！ふ んっ！！ふ んっ！！」

帰っていく柚樹などおかまい無しに、大河は鼻をかんでいた。

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』
休み時間が終わり、授業の始まりを知らせる鐘の音が響いた。

ラヴ・レター

始業式の日からきつちり授業を行う大橋高校も放課後を迎え、大河たちのクラス二年C組の担任である恋ヶ窪ゆり先生の行うホームルームも、終盤に差し掛かっていた。

「はい、それじゃあ、休みの前に前の先生から進路調査票をもらっていたと思いますが、今日が提出期限ですので、後ろから前に送って集めてきてください」

各列の一番後ろの生徒から順に進路調査票を前に送り、一番前の席の生徒がゆりちゃん先生のもとへ持っていった。

「はい、それじゃあ、集まりましたね。誰か忘れた人いませんか？」

「あ、はい……」

竜児が気まずそうに手を上げた。

「……………!?!?」

唯一手を上げたのが噂の不良Aだったので、ゆりちゃん先生は動揺した。しかし、先生である義務は果たさなければならぬ。

「た、た、高須くん？そ、それじゃあ後で職員室に来てくれるかなあ？」

「はい、分かりました」

竜児は素直に返事をして、ぽりぽりと頭を掻いた。体勢を変える時にちよつと椅子を動かしてしまつて『ガタツ』と音を立てた。

「……………ひっ……………!?!?」

その音に過剰に反応するゆりちゃん先生。その表情は明らかに脅えていた。

恋ヶ窪ゆり、独身で二十九歳。一端の社会人と言えども一人の弱い女性である。高校生ともなれば男子生徒の方が腕力は強い。しかも、見るからにヤンキーで生徒からも噂されている竜児が相手であれば、しょうがないとも言える。

その上、今日は担任になって一日目で生徒それぞれの個性もまだわからない。見た目以外に判断する材料はないのだ。

「…コホンッ、え、えっ　と。はい、じゃあ今日はここまで。委員長さん、号令よろしくっ」

ゆりちゃん先生は平静を装いつつ、なんとかホームルームを締め
る。

「起立、礼」

そして、北村の号令でホームルームは終了した。

「い…いいわね高須くん。後で職員室に来てくださいね。はい、それじゃ、みなさんさようなら　」

ゆりちゃん先生は竜児にどきまぎと声を掛けて、そそくさと職員室へ帰っていった。

帰りのホームルームを終えた教室はざわめいていた。すぐに鞆を持って教室を出る生徒、教室に残って友達と話す生徒と人それぞれである。

その中で竜児は帰りの仕度をしていた。

進路調査票を書き忘れた竜児は、これから職員室へ行かなければならなくなった。ゆりちゃん先生があつた調子では強く叱られることもないだろうが、早く提出せよと発破を掛けられるのだろう。

竜児は教科書やノートを鞆に詰め終わると、鞆を机の上に置いて立ち上がった。

「しゃーない、行ってくるか」

竜児は鞆をそのままに、職員室へ向かった。

「お　い、大河」

櫛枝は教室の出入口のところから、まだ席に座っている大河に声を掛けた。

「みのりん」

大河は声を掛けてくれた親友の方を向いた。

「おいら今日も部活あるから先いくね　」

「うん、バイバイ」

楽しげに話す女子生徒たちには笑いが絶えなかった。

『ドゴンツツツ!!』

予想外の方向から不意に聞こえた、けたたましい物音に今まで和やかに会話していた女子生徒達が一瞬凍りついた。そして、物音のした方向にいる人物を見ると動揺が広がった。自分たちの居る方向を見てはいなかったが、明らかに威圧的なオーラが自分たちに向けられているのが分かる。

「ねえ、あれっ、逢坂さんじゃない?」

「うん……、なんか機嫌ななめっぽくない?」

「私たち、別に変なこと言っていないよね……?」

「ど、どうしよっか、とりあえず場所うつす?」

「そうだね……、駅前のカフェ寄ってかない?」

「うん、そうしよ……」

威圧的オーラを放つ大河に気圧されて、女子生徒たちは教室を出ていった。

(……ふんっ!……)

既に日は暮れ始め、夕日で教室の中は赤く染め上がる。

教室に残っているのは大河ひとりになった。

静寂につままれた教室。この中で聞こえてくる音と言えば、極度の緊張で少し荒くなっている大河の息遣いと、いつもより大きく早い旋律で奏でる心臓の鼓動くらいだ。

教室が静かになり暫くして、大河は起き上り、教室をきよろきよろと見渡した。

「誰も……居ないわよね……」

更に教室の出入口から顔を出し、廊下も確認する。廊下にも残っている生徒の姿は無かった。

大河は教室に頭を引っ込め、入口の戸を締め切った。

自分の席へ戻り、机の脇に掛けてあった鞆を机の上に置いた。鞆の口を開いて何やら探すと、中から今朝の『それ』を取り出した。

『それ』は薄いピンクの封筒で、女の子が好きそうな可愛い感

じの手紙だった。

『ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！
！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！
！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！ドクンッ！！
！ドクンッ！！ドクンッ！！』

手紙を手にした瞬間、今まで以上に鼓動が鳴り響き、大河にはうるさいくらいに心臓の音が聞こえていた。いつまで経っても治まる気配はなかった。

大河の緊張はどんどん高まる。顔は真っ赤に紅潮し、手も僅かに震えてきた。

(どっ……………どうしよう……………、心臓が……………破裂……………しそっ……………)
手にしている手紙の表には『北村 祐作 様へ』と書かれていて、切手は貼られていない。裏には『逢坂 大河より(迷惑だったら読まずに捨ててください)』とある。春らしく桜の花びらの形をしたシールで封筒は閉じられていた。

その可愛い手紙には、彼女の思いが何かしら詰め込まれてるはずだ。それにも関わらず、やけに薄くぺらぺらとしていた。

それに彼女が気づけるほど、余裕はありもしなかった。

大河は緊張を抑えながら恐る恐る北村の席(と大河が思っている)へ近寄った。それから再び周囲を見渡し、誰もいないことを確認して、この手紙をどこにしまうか考えた。

机の中に手紙を入れても気づいて貰えないかもしれない。ましてや、引き出しから手紙が落ちてしまい、誰かが拾ってしまったら、知らぬ誰かに自分の気持ちバレしてしまう。それだけは、けっっとして耐えられない。

机の上に鞆が置いてある。鞆の中なら家に持ち帰って、一人で部屋に居る時にきつと手紙を見つけてくれる。場合によっては、友達が家に遊びに来てたり、周りに家族がいる可能性もあるが、どうしても都合のいい事しか考えられない。どちらにしても、机の中に手紙をしまうよりは確実な手段だった。

大河は震える手を伸ばし、机の上にある鞆のジツパーに手を当てた。

緊張は絶頂を迎えている。自分で自分がちゃんと、正常に呼吸できているのかすら分からない。

手の震えを抑えながら、ゆっくりとジツパーを引いて鞆の口を開けた。

後は手に持つ手紙を鞆の中にしまっただけ……。だが、その決心がまだつかない。

今まだ何もしなければ、自分の気持ちは北村に知られる事はない。しかし、この手紙を鞆しまい、帰ってしまえばもう後戻りする事が出来ない……。

少し気持ちが揺れる。でも、このまま帰ってしまったら、ずっと何も変わらない。胸を締め付けるような北村への想いは、きつと治まらないだろう。大河にとってそれは、とても切なく、そして苦しい事だった。

大河は春休みの間も、気がつくとな北村の事を考えていた。想えば想うほど気持ちは膨らみ、想像しているだけで恥ずかしさがこみ上げ、時にはあの大きなベッドでひとり悶えることもあった。

いつまでもこの想いを隠し持ったままでいたら、胸が苦しくなり過ぎて耐え切れそうにない。早く自分の気持ちを北村に伝えなくては、いずれ胸が張り裂けてしまう。そう思えるほど苦しかった。

そうして北村へ想いを伝えることを決心し、鼻をぐしゃぐしゃにしつつも、春休みの間に何度も書き直しては手紙を認めてきた。後はその手紙を目の前にある鞆にしまっただけ。それだけで全てが終わる。

でもまだ覚悟が決まらず、逃げ出したくなる衝動に襲われる。それと闘いながら大河はそこに立っていた。

（何よ……、ただこの手紙を鞆の中にしまっただけじゃない……。ただだ……だいじょうぶ、きつと、北村君は私の気持ちに伝えてくれる……。怖がる必要なんてないわ。だいじょうぶよ……。きつと……だ

いじょうぶ……)

きつと上手くいく、そう信じ勇気を振り絞る。

手紙を持つ手をゆっくりと伸ばす。

丁寧にその手紙を鞆にしまい込むと、そつと鞆の口を閉めた。

「はあ　　っ」

思わず深く長いため息が出た。　と、同時だった。

『ガラッ！！』

(……………　　つつつつつつつつ　　……………　　！？)

大河は張り詰めた緊張が緩みかけていた、その不意に教室の入り口の方から突然物音が聞こえ、激しく動揺してしまった。

誰かが教室に入ってきた。入口の方を背にしたままでもそれは分かる。

恐らく、鞆に手紙を入れた瞬間は見られていないはず。しかし、自分が今たっている場所は、自分が想いを寄せる男子の机(と大河が思っている)の前だ。自分と関係ない席にこんな時間に一人であれば、何か怪しまれるに違いない。

大河の頭の中ではコンマ一秒も経たない間に、色々な思いが駆け巡った。そして、後先を考えるより先に、体は動いていた。

『ドタンツツ！！バタバタバタツツ！！ガラガラガラガラ、ガツシャ　　ン！！ズガガガツツ！！ズドドツツ！！ドン

！！ボタン！！ガリガリッ！！ズダンツツ！！……………　　キィ、ボタン　　！！』

雷鳴のような音が教室に鳴り響き、宙に舞って見えた机や椅子が床に転げ落ち、教室は何かの惨劇が起きた後のような状況になっていた。

「……………　　なっ……………　　！？」

教室の入口で男子生徒が、呆然とした顔のまま立ち尽くしている。

この一瞬で一体何が起きたのか？全く事態が把握できない。だが教室の中を何かの影が駆け抜けるのを、ほんの僅かだが見えた気がする。

一瞬の記憶をどうにか掘り起こしながら、考え込む顔はどこか鋭い目つきをしていた。その男子生徒は三白眼を持つ、高須竜児だった。彼の三白眼は睨んだだけで、相手に財布を差し出させる瞳術を扱える。という忍者とかではありません。

とまあ、竜児は進路調査票を書いて持つてくるのを忘れ、さきほどまで職員室で担任のゆりちゃん先生に注意を受けていた。竜児の事をヤンキーだと勘違いしているゆりちゃん先生は、なるべく竜児を怒らせないようにと回りくどく注意していた。その所為でなかなか話が進まず、遅い時間まで残らされていたのだった。

用具入れが揺れている。そういえば、さっきの影が用具入れに飛び込んだ気がする。そう思い返しながら見ていた用具入れが、大きく揺れ『バタンツツ!!』とでかい音を鳴らして倒れてしまった。

倒れた勢いで用具入れの扉が開き、小さな女の子が中から放り出され、膝を抱え丸まったままカランコロンと転がってきた。

その小さな女の子は、今朝ぶつかってきた竜児に、間髪いれず思いつきりアツパーを喰らわせ、竜児をノックアウトした張本人だった。

「だっ、だいじょうぶか…?」

竜児はつい声をかけてしまったが、これは関わらない方がいい。直感的にそう感じて、そ知らぬフリをすることにした。

「え、え　　と、鞆、鞆……………」

竜児は転がっている大河の存在に気づかないフリをして、自分の席にある鞆を取りに行く。そして、竜児が手に取った鞆は、さっき大河が北村の鞆だと思って手紙を忍ばせた鞆だった。

(……………つつつ……………!?)

それを見た大河の血の気が一瞬にして引いた。

「だあ　　っ!？」

今まで大河は自分の存在を消すように静かに固まっていた。しかし、今度はうるさいほどの大声を上げて飛び上がった。

「あ、あんた……………、なに……………、なに……………、なに……………、なに……………」

「何ってほら、鞆とりを取りに来ただけ」

竜児は取り乱した様子で声を掛けてきた大河に、ただ自分の用事で教室に戻ってきたことを説明する。大河に対して特別関心が無い事を示して、これ以上、絡まれないようにするのに必死だった。

「ああああ…あんたの鞆だって…の？あんたの席はその隣の」と、言いかける大河の頭に、北村の居た昼間の教室の映像がフラッシュバックしてきた。鮮明に思い出した記憶に映る北村の席と、竜児がいま立っている席は確かに違う…。

「もしかして、れっ、れっ、列、れっ…」

自分が北村に宛てた手紙を忍ばせた鞆が置かれていた席が、一列間違いで北村の席ではない事に確かに気づいた瞬間、大河の頭の中は真っ白になった。

このままでは、あの手紙の存在が目の前にいる目つきの悪い、訳の分からない男子生徒に知られてしまう。そう思うと、顔から火がでそうな程の恥ずかしさが、全身に込み上げてきた。

「ああああああああ　　お！！！」

とにかく手紙を取り返す。よもや何も考えてはいない。雄叫びを上げ、大河は竜児に飛び掛っていた。

迫り来るその形相は猛獣そのもの。背景イメージに咆哮する虎の姿が見えてもおおかしくはない。驚異的な大河の脚力で二人の距離は刹那にして無くなった。

大河は竜児の持つ鞆に激しい勢いで掴み掛る。

竜児は何故か鞆を必死に奪い取ろうとする女子生徒に、戸惑いながらも抵抗した。

「ん　　ぐ、ぐぐ…、ぬっ…あ…」

「なんで俺の鞆を　、お…おい、逢坂、いい加減に」

二人は全力で鞆を引っ張り合っていた、が。

「ふっ…っ…ぶぎゅんっ！！」

まさに不運。今朝から続いていたくしゃみが、よりによってこのタイミングで出てしまった。

大河はくしゃみで体が硬直して、手の力が一瞬緩み、鞆は解き放たれてしまった。

「うわぁっ」

引き合っていた片方の力を突然失い、竜児は悲鳴を上げると同時に『ドタンツッ！ゴロゴロツッ！バタンツッ！』と勢いよく後ろへ転がって、机に頭をぶつけていた。

「いつつぁ、あのなっ！」

竜児はぶつけた頭を擦りながら大河を見た。

そこには鞆を放してしまった自分の手を、呆然と見ている少女の姿があつた。そして、少し悲しげな顔をしているようにも見える。その顔を見ていると、なんだが良くは分からないが、自分が何か悪いことをした。そういう風に思えてきた。

「あ、逢坂……さん？」

大河は声を掛けられてハツとした。すると黙って教室の中を移動し始めた。

転がる机を掻き分け自分の席に行く。そして、鞆を掴み教室の入口へスタスタと歩いた。

「ん、あ、お、おいっ」

教室を出ようとする大河を、竜児は引きとめようと声を掛けたが。

「バカッツッ！！」

と大声で怒鳴って、力いっぱい教室の戸を閉めると、そのまま大河は行ってしまった。

竜児は教室に一人取り残された。

「滅茶苦茶だ」

呆然とする竜児から自然とこぼれた、当然の感想である。

少し冷静になり辺りを見渡すと、教室中の机がひっくり返えり、一人残された竜児がまるで教室で暴れまくったような状況になっていた。

「滅茶苦茶だ……」

それ以外の言葉は出てこなかった。
やれやれと、転倒している机を起こそうと机に手に掛けた時だった。

『ガラララッ』

教室の入口の戸が開く音がした。今さっき大河が閉めた戸だった。
「わ・わ・わ・忘れもの……」

何処かで聞いたようなフレーズを口にしながら、一人の男子生徒が入口に手を掛け、教室へ入ろうとしていた。

竜児は焦った。教室は滅茶苦茶。そして、自分はクラスメイトからヤンキーと誤解されている。今朝の大河との一件はあったが、完全に誤解が解けている訳ではない。理解してくれている北村ならまだしも、今日クラスメイトになったばかりの初めて会ったような奴が、この状況を見れば十中八九で誤解されることは分かりきっていた。

相手の反応を待つように竜児は固まった。

まるでのんきに教室にやってきた男子生徒が、教室を見渡し中の惨状に気づく。そして、机に手を掛ける竜児の姿に目がついた。

「……………!？」

男子生徒は一瞬固まった。そして、少し考え込むような表情を見せる。

何か頷いたかと思うと、その顔は冷静さを取り戻していた。

一旦、宙を見てから何事も無かったような顔をして、教室に入らずに帰ろうとしていた。

「ちよっ……………まっ……………」

恐らく誤解したままで帰ろうとする男子生徒を、竜児は引きとめようと声を上げた。

それに反応したのか、男子生徒は足を止めた。

竜児はその男子生徒に見覚えがあった。

「えっ……と、確か……………神田……………?」

そう、その男子生徒は、今日の休み時間に竜児が憧れている櫛枝

実乃利と、親しげに話していた神田柚樹であった。

「ヤン…、あ、えっと、高須…くん、だっけ？人生…、色々あるよね……」

柚樹はそう言っつて、さっさと立ち去ろうとした。

「ちよっ…おまつ…、なんか勘違いしてるだろ。ちよっ…、話を聞いてくれっ　…！」

竜児はなんとか誤解を解こうと、柚樹を引き止めた。

「分かつてる、分かつてる、みなまで言うな。自分の中のどうしようもなくなった憤りを、ちよつと机にぶつけてただけだよね…：青春をぶつけてただけなんだよね…：」

全く分かつてない…、竜児は思った。それにまだ何も言っつてねえし、と心の中でツッコミを入れた。

「心配しなくても、誰にも言わないから……」

「だからっ、違っつ…！これは、逢坂が　」

大河が教室の机を吹き飛ばしながら、用具入れに飛び込んだのを、ハッキリと見てはいなかったが、確かに教室を荒らしたのは大河だ。それを正直に竜児は説明しようとするが……。

「ちよつと、高須くん、それは酷いんじゃない？逢坂さんってあのちっこくて可愛いらしい娘だよ？あんな可愛い子が教室をこんな滅茶苦茶にできる訳ないだろ。何か嫌な事があって、その気持ちをどこかにぶつけたかったのは理解する。けど、あんな小さな女の子のせいにするのは、いくら何でも男として間違っつてない……？」

柚樹の言っつ事も分からない事もないが、竜児は嘘は言っつていない。それにしても、あの狂暴な大河を捕まえて『ちっこくて可愛いらしい娘』という表現に竜児は少し引っ掛かった。

「今朝の俺と逢坂の一件知らないのか？ちよつとぶっつかっただけでグーだぞグー。グーで思っつきり殴られたんだぞ俺。どうみても噂通りの猛獣だったぞ。あいつが『ちっこくて可愛いらしい娘』なんと言っつたタマか？」

「知っつてるよ、朝の。始めから観てた、一部始終」

柚樹はサラッと答えた。

「……って、見てたのかよ！！見てて良くそんな事いえるな……」
「あれは見事な拳だった……。えっと、お前の名前って『竜児』って言うんだっけ？竜めがけ昇る拳……、まさに、昇竜めちよめちよ……んぐつ。本来はリュウが繰り出す技をリュウに極めるとは、さすが逢坂だ……」

「お前なに言ってるんだ……」
妙に関心しながら語る柚樹に、竜児は呆れ返った。

「……まあ、それは置いておいて……」
「置いておくつもりなら、始めから言うなよ……」
「こんな状況にあっても、竜児のツツコミのキレは鈍らない。」

「今朝の件はお前が悪い。いきなり殴った逢坂もやりすぎだと思うが、余所見して歩いてたお前に非がある。それに、逢坂がなんの理由も無しに教室をこんなにするとは思えない。しかも、あんな小さな体で、だ……」

確かに、客観的に見ればそうなのかもしれない。しかし、竜児はやっていない。

なかなか理解してくれないクラスメイトに、竜児は焦りを感じた。
「だから……ほんとなんだって！俺が教室に戻ってきたらもうこの状況になってたんだ。そしたら、用具入れの中に逢坂がいて……」

「なんで用具入れに逢坂が入ってる必要があるんだ……？やっぱ、嘘ついてるだろ？」

「嘘じゃないツ！！ほんとなんだって……なっ、信じてくれよ……」
竜児はさらに必死になって弁明する。

竜児が必死になればなるほど、柚樹の様子がおかしくなってきた。

「……………くっ……………」
「ん……？どうした、神田？」

柚樹は腹を抱えて、小刻みに震えていた。

「なんだ……？体調でも悪くなったか」
竜児は心配して声を掛けたが……。

竜児は少し頭の中を整理した。そして、何かに気づいた。

「もしかして、お前……最初から分かってたんじゃ!？」

「分かってた」

「またも、サラツと答える柚樹。」

「竜児は段々と理解してきた。」

「まさか、ずっとからかってたんじゃ……」

「柚樹は首を縦に振った。」

「……………」

「一体、今までのやり取りはなんだつたんだろうか。」

「竜児に疲労がどつと押し寄せてきた。」

「必死に説明して、爆笑までされて。これ以上考えても無駄にしか
思えなくなってきた。もう考えるのは止めよう、竜児は呆れた顔を
しながらそう思った。」

「それでお前、逢坂に何したんだ?」

「完全に素の顔に戻った柚樹が竜児に訊ねた。」

「いや、俺も良く分からないんだが、職員室から戻って鞆を取りに
きたら、教室がこんな状況になって。用具入れから逢坂が出てき
たと思つたら、急に飛び掛って俺の鞆をなんでか奪おうとしてきた
んだ」

「へえ、それで……?」

「説明される内容が少し現実味に欠ける気がするが、柚樹はとりあ
えず相槌を入れて話の続きを聞いた。」

「で、鞆を引つ張り合いましたんだが、逢坂がくしゃみをして急
に手を離れたんだ。それで、俺は後ろに転がり頭をぶつけたんだが
……。逢坂はなんかポーツとしてて、そしたら急に怒って教室を出て
いった。それ以外の事は分からん……」

「ふん」

「柚樹は少し考え込んだ。正直いってデタラメのような話である。」

「とはいえ大河を相手に常識は通用しない。柚樹もそれは分かっ
ていた。」

柚樹は竜児の話をとりあえず信用することにした。

「まあ、よく分からんが、逢坂がお前の鞆を取ろうとしてたんだよな？」

「ああ……」

「って事は普通に考えて、お前の鞆に何か原因があるんじゃないかな？」

「俺の鞆に……？」

竜児の鞆に何かある。そう思った柚樹は鞆を取り上げられそうな理由を考えた。

「例えば、高須が逢坂の物を何か盗ったとか……」

「なんも盗ってねえし……。それに、何か盗ったらその場で殴られそうだな」

「じゃあ、誰かが悪戯で逢坂の物をその鞆に隠したとか……」

「悪戯で……？ いや、でも、好き好んで逢坂にちょっかい出す奴がいるとは思えん……」

「なら、高須に宛てたラブレターをその鞆に入れたとか。でも、やっぱり恥ずかしくなって取り返そうとしたっていう線は？」

「それは無いっ！ 逢坂とはほとんど面識ないし。それに、好きな女の顎を思いつきり殴る女がどこにいる！ 絶対にありえん」

今朝のイメージが強く残る竜児には、どれも在り得なく感じる。

しかし、何かしら逢坂が必死になるような理由がこの鞆にあるような気がしてきた。

「まあ、なんにしても、鞆の中を見てみたらどうだ？」

「そうだな。確かに、職員室行ってる間ずっとここに置きっ放しだったし……」

竜児は鞆を開け中身を確認する。

教科書にノート、それに筆入れ。どれも自分の物で今日持って帰ろうとしていたものだ。

更に鞆の中を探る。

一枚のプリント。これはさっき、職員室でゆりちゃん先生に早め

に出すようにと、注意された進路調査票だ。中身は未記入。それと。

「ん？何だ、これ」

竜児の見覚えの無い物が、鞆の中で見つかった。

それを取り出してみる。

竜児が手にしたものは、薄いピンク色した可愛らしい封筒だった。

「もしかして……」

竜児は驚いた。まさか本当にラブレター？しかも、俺に？自分でもさっき言ったが、好きな奴に拳を浴びせる女がどこにいる？いや、しかし……。

在り得ないと思っていた、ラブレターらしきものが自分の鞆の中に入っていた。まさかとは思うものの、『もしかしたら』と思うのが男の性であった。

竜児はなんだか心臓がドキドキしてきた。それに顔も少し赤くなってくる。確かに乱暴な少女ではあったが、見た目はかなり可愛い。少し期待が膨らんだ。

「おい、高須。それ、なんか書いてあるぞ」

「えっ？あ、ああ……」

意識半分、妄想に深けていた竜児だったが、柚樹の声にハツとして、手紙をよく見てみると、確かに何か書いてある。

竜児はそれを読み上げた。

表には。

「北村 祐作 様へ」

手紙を裏返す。

「逢坂 大河より。迷惑だったら読まずに捨てて下さい」

それは、北村へ宛てた手紙だった。間違いなくラブレターだと思われる。

一瞬、期待してしまった自分が恥ずかしくなって、竜児は一段と顔が赤くなった。

「残念だったな、高須。お前宛てじゃなくて」

柚樹が茶化する。

「残念つて…、なんも期待してねーよ」

竜児は一瞬でも期待してしまった自分を、見透かされているようでギクツとしていた。

「逢坂が北村にねえ〜」

神妙な面持ちで柚樹は呟いていた。

「確かに、北村に言うといつも否定されるんだが、あいつつて結構女子から人気あつて、よく女子と話してるとこ見かけるんだよな。北村ならこういうことも在り得るのかも」

竜児が手に持つ手紙を見て、柚樹が何かに気がついた。

「なあそれ、なんか薄くないか？」

「確かに、なんか柔らかい気がするし。少し軽いような……」

竜児は教室に差し込む夕日に手紙をかざした。

太陽の光に封筒の中が透ける。しかし、中には何も影が映っていない。

表から裏が少し透けて、ぼんやり裏側の文字がみえる。

空っぽ……だ。

「ふふふふつ……くくくつ……ははははっ……。流石、逢坂だ、やってくれる。ほんと、あいつつて面白い奴だな……」

柚樹は堪らず笑いだした。

「つたく、何なんだよあいつ。こんなもん、俺の鞆に入れやがつて……」

朝の一件といい、この手紙の件といい、竜児は呆れるしかなかった。

「しかし、どうすっかなコレ。その辺に置いて帰るわけにもいかなしいし……」

「そうだな、とりあえず今日は持って帰るしかないんじゃないか。明日、直接返すしかないだろ。机の中に入れて、明日知らない間に誰かに見られたりなんかしたら、お前殺されたりしてな」

「殺されるとか、笑いながら言うな、洒落にならんぞ……」

柚樹はまるで他人事のように笑いながら話していた。いや、他人事か。

「まあ、とりあえず手伝ってやるから。机なおして帰ろうぜ」

柚樹に言われて、改めて教室の惨状に気づく竜児。

「はあ　　っ」

自然と深いため息がもれる。

二人は手分けをして、机や椅子を直した。

直し終える頃には、外は少し暗くなっていた。

「ふう……、まあ、こんなもんか」

「だな……」

教室は元の秩序を取り戻し、いつも通りの景色が復元された。

「んじゃ、俺は忘れ物も回収したし、先帰るな」

そういえば、柚樹は妙なメロディで忘れ物と口にしながら教室へ来ていた。

「わかった。んでも、ありがとな。一緒に机直してくれて」

「ああ、でもお前がやったわけじゃないし、気にすんな」

竜児はふと思い立ち、帰ろうとする神田に声を掛ける。

「神田！この手紙は見なかった事にしてくれ。俺ちゃんと明日、逢坂に返すから。逢坂も他の誰かに見られたって知ったら、きつと恥ずかしいだろうし」

「オーキードーキー」

柚樹はそう返事すると、竜児に軽く手を振って教室を出て帰っていった。

「さて……、俺も帰るとするか」

竜児は教室を出て、廊下から静寂と秩序を取り戻した教室を振り返り眺める。そして、今日あった出来事を思い出していた。

大河にぶつかったこと。いきなり殴られたこと。職員室から戻ってきたら教室が滅茶苦茶になっていたこと。鞆を持って帰ろうとしたら大河が掴み掛かってきたこと。

この静かな教室で一人立ち尽くしていると、それらが全て嘘だった。

たようにも思えてくる。

竜児は少し感傷に浸り、教室を後にした。

こちら『とら』、犬小屋に潜入した

「ぶぎゅんっ！！」

自宅のマンションの寝室。そのベッドの上で毛布を被り、膝を抱え込んで丸くなっている大河がいた。未だハウスタストに苦しんでいるようである。

既に夜になっていたが、部屋は明かりも点けずに真っ暗だ。

大河は部屋に制服を脱ぎ散らかし、部屋着に着替えていた。

大河の部屋着は上下セットの裾フリルチュニツクに裾フリルパンツで、僅かに紫がかかった色をしている。チェニツクの方は袖と胴の辺りにもフリルがついている。

大河は放課後の教室での事を思い出していた。

（つたく、なんだつてのよ、あいつ。素直に鞆渡しなさいよねっ！おかげで、ラ、ラブ、ラブ、ラブレーター……。きつとあいつ、鞆に入れたまま家に持って帰ったわよね。もしかして、もう、気づいて中の手紙見ちゃったかなあ……………）

その様子を少し思い浮かべてみる。

「……………んんっつつつ……………！」

恥ずかしさが込み上げ、ベッドの上で悶え、毛布に包まれたままゴロゴロと転がった。

（どうしよ……………、確かあいつ、北村さんと仲良さそうに話してたわよね。明日、北村さんにバラしたりしないかな……………。そんな事されたら……………もう……………恥ずかしくて死んじやいそう……………）

恥ずかしさと悔しさで目頭が熱くなってきた。

ラブレーターが存在を竜児だけでなく、柚樹にまで知られている事は知る由もない。

ラブレーターが入っているから鞆をよこせとは言えなかったが、諦めてそのまま帰ったことは後悔していた。

「やだよお〜、やだよお〜。あんな変な奴にラブレーター見られ

るなんて……やだよ〜」

めそめそした声が毛布の中から漏れ出てくる。

（ほんと、死にたい……。もう、こんな恥ずかしいこと……。死ぬ
しかないんだわ……）

暗がりか余計にネガティブな思考を引き込んでくる。

（やだもう……。やだやだ、死にたい……。死のう……。私……。死ぬんだ……
……。でも……。でも……。やっぱり死にたくないよあ……。北村……。くん
……）

考えれば考えるほど、気が滅入る方にしか思考が回らなくなってきた。

「うっ……。ええ　ん……。うっ……。うっ……。うえ　ん……」

涙を堪えられなくなり、ついに泣き出してしまった。

一頻り泣いて涙が治まると、今度は悲しみより怒りがなんだか込み上げてきた。

（屈辱だわ……。これ以上ない屈辱よっ！何もかもあいつの所為なの。
絶対あいつが悪いのよっ！）

どちらと言わなくても、入れ間違えた方に責任があると思います
が……。

（それになんて私がこんなに悩まなくちゃいけないのっ？殺す。あ
いつ殺す。そうよ、私が死ぬ必要なんて無いわ。あのバカが死ぬば
いいのよ、殺すしかないのっ！）

なにやら物騒なことを考え始めてます。どなたか110番の準備
を……。

（でも、どうすれば……。あいつの家なんて知らないし、学校で待ち
伏せしても人がいるだろうし……）

竜児を殺すことを前提に思考が動いています。

もはや竜児の人生もこれまでか！？

「へっ　ぶしゅっ！ー！へぶしゅっ！ーぶぎゅしゅっ！ー」

危ない思考を断ち切るようにくしゃみが出た。竜児セーフ？

大河は毛布を剥ぎ捨てベッドから出た。

ティッシュ箱に手を伸ばし、一枚抜き取って鼻に当てる。

「ふん、ずすすうっ……」

どうにも鼻水が止まらない。

「そっいえば……」

何かを思い出した様に、部屋の中をとことこ歩いて学校の鞆を手にした。

鞆を開けて中から取り出したのは、学校行く前に病院で貰ってきた薬だ。

薬を手にしたら医者からのアドバイスが頭を過ぎってきた。

「換気がどうか言ってたっけ……。とりあえず、窓あければ良いのかな？」

大河はカーテンも閉め切ったままの寝室の窓へ行き、カーテンを全開に開いた。そして、窓の鍵を開けようとしたところで手が止まった。

窓の向こうには古びたアパートがある。そのアパートの二階のベランダに、見覚えのある顔の少年が洗濯物を取り込んでいた。

「あいつ……こんなところに……」

その少年は高須竜児だった。

竜児の家庭は片親で母親しかない。母親は毎晩スナックバーで働いて、不規則な生活をしている。そんな母親の負担を軽くする為、竜児は炊事や洗濯、掃除など家事全般を手伝っていた。

普段ならこんな暮れた時間に洗濯物を取り込んだりしないのだから。しかし、学校で遭遇した一連の出来事で帰るのが遅くなった竜児は、他の家事より優先して食事を先に済ませていた。それで洗濯物の取り込みも後回しになっていた。

大河は一度開けたカーテンをシャツと閉め、少しだけ空いた隙間から向かいのアパートを観察する。

「結構近いわよね……。何よこのマンション。セキュリティ万全？笑

わせてくれるわ。そのボロに変態が住んでたら、か弱い私はどうなっちゃうのよっ!？」

か弱い？

ボロ呼ばわりされた竜児のアパートのベランダから、大河のマンションの窓まで二メートルも無かった。多少危険はあるが、卓越した大河の運動神経であれば、問題なくベランダに飛び移ることができるだろう。そうすればあの男のいる部屋に忍び込めるかもしれない。

「これは……やるしかないわね……」

何やら危ない事を『か弱い私』が考えているようです。

「……っ……ぶぎゅっ!ぶぎゅしゅっ!」

学校から帰ってきて、少し症状が悪化しているようだ。

大河は一先ずさっきの薬を飲むことにした。

寝室からリビングに出て照明を付ける。

冷蔵庫へ行き、中からお茶のペットボトルを取り出して紙コップに注いだ。

薬が入っている袋の用法を見ると、食後三十分以内に飲むようにと書いてあった。

「食後……」

大河は夕食を済ませていなかった。それ以前になんの用意もしていない。朝食も食べずに学校へ出かけていた。昼は一応コンビニで買ったパンを食べていたが、それ以来何も食べていない。何か口にしようにも、これといった食べ物を探してもない。

「ま、いつか」

素直に諦め、袋から薬を取り出す。プラスチックの包装の中にカプセル型の薬が入っていた。それをプチプチと取り出して口へ放り込んだ。

「んぐっんぐっ……はふう〜」

お茶を飲み干して空になった紙コップを、くしゃっと潰してゴミ箱に捨てた。

昨日、薬局で適当に買った薬とは違い、今度はちゃんと医者に診察を受けて貰った薬だ。きっと、少しは症状を抑えてくれるだろう。そう思うとなんだか少し楽になった様な気がした。

薬を飲んで落ち着いてきたところで、今後の対策を練る。

「やっぱり、奇襲と言えば寝静まった頃よねえ……」

竜児が何時まで起きているかは分からない。しかし、ここ暫く眠れない夜が続く大河にとって、夜更かしくらいなんて事ないと思っていた。

ふと、窓に映る自分の姿が目についた。自分が今の格好が部屋着なのに気がつく。流石に相手がどんなやつであっても、男の部屋にこんな部屋着で乗り込むわけにはいかない。大河は寝室に戻って普段着に着替えた。

チヨイスした服は、ふりふりレースのついた白いワンピースだった。その上にカーディガンを羽織っている。そんな格好で二階の窓から向かいのベランダへ飛び込もうというのか……。確かに可愛らしいが、討ち入りに選ぶ服ではなさそうだ。

「後は、これを……」

そう言っ手にしたのは、木刀だった。

刀身90センチはあろうか。

可愛いらしいレースワンピースに物騒な木刀。どこまでもアンバランスである。

「これで思いつきり脳天ぶっ叩けば、記憶くらいはぶっ飛ぶわよね」木刀に負けず物騒極まりない発言だが、これで乗り込む準備はできた。後は竜児が寝るのを待つだけ。

寝室の窓から向かいのアパートを覗き、明かりが消えるのを待った。

しかし、一向に明かりが消える気配はない。

「いつまで起きてるのよ、さっさと寝なさいよね！」

真に自分勝手な意見である。高校生の男子ならそれなりに夜更かしもする。

大河は明かりが消えるのをじつと待ち、向かいの様子を眺めた。するとなんだか瞼が重くなってきた。

大河の意識は、ぼんやりと薄れていった。

「くしゅくしゅく……くしゅくしゅく……くしゅくしゅく……」

大河は寝息を立てて寝ていた。

「……ひっく……」

突然、体がびくつと痙攣した。

「はぐう……ん……ん……」

大河の目が薄く開いた。今の刺激で目が覚めたようだ。

口からはよだれを垂らしていた。

大河は寝ぼけたまま、よだれを手で拭う。

「じゅるっ……んぐんぐ……。あれ……私……何でここに……」

大河は竜児のアパートを見張って窓際に居たのだが、いつの間にか壁に寄り掛かるようにして寝ていた。寝起きで記憶が少し混乱していて、その状況が分かっていないようだ。

ハウスダスト症候群の所為だろうか、何だか喉が渴く。

大河は起きてリビングへ出ると、水分を求め冷蔵庫の前に行った。冷蔵庫からオレンジジュースを取り出し、ぐびぐびと飲む。

「ぶは……っ」

喉が潤い、気分も少し落ち着いてきた。それに寝る前の記憶もかなり戻ってきた。

「そついえば私、あいつの部屋に……」

今からでも作戦の決行は可能であろうか。

外の様子を窺ってみるとまだ暗かった。

時計を確認する……、午前二時ちょっと過ぎ。

「これならいけそうね」

高須家潜入を再び決意した。

大河は寝室へ戻り、窓から向かいのアパートを確認する。

二階の部屋に明かりは点いていない。

うつかり眠りこけてしまったが、まさに頃合いになっていた。
早速、作戦を決行する。

大河は寝てる間に手放していた木刀を拾い、カーテンと窓を全開に開けた。

窓枠に足をかけ身を乗り出し、向かいのベランダとの間合いを慎重に計る。

「よしっ！」

気合を入れ、向かいのアパートのベランダへ思いつきり飛び込んだ。

空気抵抗で服をバサバサとなびかせながら、大河の体は華麗に宙を舞った。

『ドタンツツッ！』

見事なジャンプだったが、着地で大きな音を出してしまった。

例えば体が小さくて軽そうな大河であっても、建物の間を飛び移れば大きな物音の一つや二つ出してしまう。しかも、着地した先はボロアパートだ。

(起きたかしら……まあ、どっちでもいいわ……)

竜児が起きてくることを一応は心配する大河であったが、どの道もう後戻りはできない。高さに大河の住む部屋の窓の方がベランダより高い。逆にベランダから大河の部屋に戻るには少し無理があった。先へ突き進むしかない。

大河は部屋の窓に手をかけた。

ここで鍵が閉まっていたら、もともこうもないが。

『ガラガラガラッ』

窓の鍵は掛かっていなかった。二階に住んでいるため、わざわざ壁をよじ登ってまで入ってくる泥棒など、いないと思っているのだろうか。しかし、侵入者が実際ここにいる。二階であっても気を抜いて、鍵を開けっぱなしにしてはいけない、という教訓である。特に一人暮らしの女性には注意して戴きたい。

(何よこれ……物騒な家)

物騒なのは、そこにいる侵入者ではないか…。

大河は部屋に足を踏み入れた。

電気が点いていないので辺りは真っ暗だ。

(あいつ……どこに……)

初めて入る部屋で、勝手が全く分からない。

大河は辺りの様子を探るため耳を澄ませると、隣の部屋から物音が聞こえた。

(まさか、あいつ起きてここに？どうしよ……、とりあえず隠れな
いと……)

この部屋の暗闇にも目が慣れてきた。周囲を見渡して隠れそうなところを探す。

部屋の中心にはテーブルの様な台があり、隅にはテレビだろうか、黒くて大きな四角い物体があった。どうやらここは居間だと思われる。

窓から入ってきた向きで、左右は部屋が襖で仕切れていた。音がしたのは左側の方からだ。正面にはキッチンらしきスペースがある。障子で仕切れているが開かれた状態だった。

きつとここは間取りが3Kで風呂トイレが別のアパートに違いな
い。大河の野生の勘がそう告げていたかどうかは不明であるが、
もかく、この部屋とキッチンを仕切る障子に隠れられそうだ。

(とりあえず、そこに……)

大河はそつと身を隠した。と、同時に襖を開ける音がする。

「おーい？」

今まで大河の居た部屋に人影が入ってきて、誰か人が居るか声を
掛けている。

(来たわね……覚悟しなさいよ……)

最たる確証は無いが、男の低い声からして、部屋に入ってきた人
影が童児であると決め付けた。

大河が侵入してきた窓からそよぐ風に、人影が気づいた。

「ん、窓が……」

大河は木刀を構え、注意が窓に向いた人影へ一気に迫った。自分に接近する足の擦り音に、人影は気づいて振り向く。
(死にさらせつ、このおつ！)

木刀を振り上げる大河。

「……うあつ……」

人影は声にならない声を上げ、ただならぬ状況に身構える。

「……つでえあああああ！！」

大河は大声を上げ、力の限り木刀を振り下ろした。

人影は大河の声に反応し、振り下ろされる木刀の影をなんとかとらえ、手で受け止める事ができた、が。

「いっつっつっつっつてえ

っ！！」

受け止めた手は相当痛かった。本気で振り下ろされた木刀だ、下手すれば骨にヒビが入ってもおかしくはない。でも、日頃から家事で鍛えている竜児くんであれば平気です。

(チツ、しくじったか。もう一発……)

人影は痛みを我慢し、必死に木刀を掴んで次なる攻撃を防ぐ。

(こいつ、離せつての……)

狩る者と狩られる者が、木刀を挟んでせめぎ合つ。暗闇に力み合う声が響いた。

「……んん……ぐくつ……くつ……」

「……くつ……あつ……たあ……つつ……」

木刀を引つ張り合う二人の力は拮抗していた。

どちらも全く譲らない。竜虎相搏つ鬼気迫る争いだ。

「……ん……がっ……こ、この……」

「……だっ……なっ……なんなんだ……？」

引つ張り合いが続くかと思われたが、そこに大河の持病が。

「……ふあつ……っ……ぶぎゅんっ！！」

思いつきりくしゃみが出て体勢を崩した大河は、相手に引つ張られる木刀の勢いで前のめりに倒れこんだ。

大河が倒れこんだ隙に、人影はすかさず部屋の明かりを点けた。

照明がついて部屋は明るくなり、お互いの姿があらわになる。

大河の狙った人影は間違いなく竜児だった。

その竜児も自分の身に襲い掛かってきていた人物を肉眼で確認した。

「あ、逢坂！」

竜児は自分の部屋に忍び込んできた、意外な人物に驚きの声を上げた。

大河はくしゃみと一緒に垂れてきた鼻水を、倒れ込んだそこにあつたシャツで拭った。

「ずずずっ…ふんっ！」

「ティツシュを使えっ！！！」

勝手に人の服で鼻をかまれば普通そう言う。

シャツで鼻をかんで、コンディションがバツチリになった大河は、再び木刀で竜児に襲い掛かる。

「どおおおおおりゃああああああああっ」

「何をっ」

紙一重で竜児は大河の攻撃をかわす。

次々に繰り出される大河の木刀。

「おりゃあああっ！せいやあああっ！こんのおおおおおお！」

「っ、何を…すっ…るっ…んっ…だっ！！！」

執拗に繰り出される木刀をギリギリでかわす竜児であったが、狭い六畳間ではそう逃げ続けられるものではない。そして、ついに襖を背に追い込まれてしまった。

竜児に木刀を突きつけた大河が呟く。

「忘れる……」

「忘れるって……。ああ、あの手が…み……」

(……うっ……、こいつ、やっぱり見たんだ……)

竜児が全ての言葉を発しきる前に、目の前に突きつけられていた木刀が、容赦なく竜児目がけて襲い掛かる。

「……っ……たあっ……」

「ガスツッ！」

竜児は首を反らし、なんとか木刀をかわした。

その代わり目標を外した木刀は、竜児が背にしていた襖に突き刺さっていた。

「あれを知られてしまったからには、私はもう生きていけない……死ぬしかないっ！」

恥ずかしさと悔しさで大河の体が震えている。目に涙が溜まっていた。

「だったら俺を殺そうとするなっ！」

行動と言動があべこべな事を言われ、竜児はツツコミを入れる。

更に、理不尽な言葉が続く。

「死にたくないから殺すしかないのっ！！さもなくば……記憶を全部なくせええっ！！！」

「無理だあっっ！」

「ごもつとも。」

大河は襖に刺さった木刀を引き抜いた。

「大丈夫、こいつで脳天ぶっ叩けば、息の根とめるのは無理でも、記憶くらいはぶっ飛ぶだろうよ……」

「飛ばすなっっ！」

もちろん、全然大丈夫ではない……。

「いいか、聞けっ！あの手紙っ……」

手紙の内容を読まれたと勘違いしている大河に、手紙の中身が空だったと説明しようとするが。

「うるさい」

「えっ……？」

「うるさいっ！うるさいっ！見たんでしょ、読んだんでしょ……」
全く聞く耳をもたない大河。そして、木刀を大きく振りかぶる。

竜児はそれでもなんとか必死に説明を続ける。

「だ、だからあれは」

「聞かない、だから……あの……ラ、ラブ、ラブラブレターの事、忘

れるお　　っ！！」

大河が叫ぶと同時に、全力で振り下ろされる木刀。猛烈な勢いで振り下ろされる木刀に、竜児は反射的に目をつぶり、無我夢中で叫んだ。

「　空っぽだったんだあああああ！！」

一瞬、時間が止まったかと思った。

「……………」

しかし、時間が止まった訳ではない。竜児の脳天に木刀は叩き下ろされなかった。

竜児が恐る恐る目を開けると、木刀が寸での所で止まっている。

「からっ……………ぽ……………？」

目の前の大河は呆気に取られた顔をしていた。

「そっだよ。だから、内容なんて。むしろ、北村に渡せなくてラッキーだったんだぞ、こんな失態を晒さずに済んで」

気がつくとも目の前の木刀がゆらゆら揺れている　　と思ったら、

その木刀を持っていた大河が倒れてしまった。

「　って、お、おい、大丈夫かっ」

倒れた大河を竜児は心配するが　　。

『ぐ~~~~~ぎゆる~~~~~う~~~~~』

全然平気、と言わんばかりに大河の腹の虫が返事をした。

「むしゅっ、むしゃっ……………んぐんぐ……………はむはむっ……………かぶっ……………もぐもぐっ……………」

大河が炒飯を猛烈に掻き込んで食べているこの部屋は、さっき大河が竜児に木刀を振り回していた部屋である。木刀を突き刺した襖には思いつきり穴が空いている。

ここは高須家の居間である。真ん中には四畳程度の大きさだろうか、カーペットが敷いてあり、その中心に木製のテーブルが置かれている。部屋の隅にある未だにブラウン管なテレビと、壁際にある

木製のダンスが狭い部屋を更に狭めていた。テレビの上にはちょうど小さな目覚まし時計が乗っていた。

先ほどお腹を空かせて倒れた大河に、竜児はものの十五分で炒飯を作ったあげた。

大河は炒飯が出来るまでの間、貧乏くさいテーブルにだらんとへたっていた。暫くするとキッチンから食欲を誘うニンニクの香りが漂い、その匂いに鼻くんくんとさせ、更にテーブルによだれのプールを作っては、今か今かと出来上がりを待っていた。

そして、竜児が出来上がった炒飯を皿に盛って、大河の目の前に置いた途端に、大河は一週間ぶりに獲物にありついた猛獣のように、炒飯を喰らい始めたわけである。

大河のテーブルの向かい側に座った竜児は、テーブルについた手に顎を乗せて、その食べっぷりに呆れ返っていた。

「お前…… どれだけ腹へってんだよ……」

「…… んむんむ……、コンビニ、飽きちゃったのよ」

（何よこれ……。この炒飯、美味しいじゃないのよ……。こんなツラして生意気な……）

久しぶりに食べた手料理という事もあったが、炒飯は本当に美味しかった。レンジで温めたコンビニ弁当とはまるで違う。それになんだけ……。

「コンビニ？ だって、親が飯を……」

竜児は言いかけた言葉を呑んだ。

竜児自身、片親で飯の用意も家事も自分がほとんどやっている。

自分自身そんな身の上で、大河にだってそれなりの家庭の事情があると、自分で納得した。

それにしても、大河は自分の作ったご飯を本当に美味しそうに食べてくれている。料理を作る人間にとって一番うれしいことだ。そんな顔をつい眺め見入ってしまう。

こうしてじっくり見てみると、大河はとても可愛いのだが、竜児はこの二十四時間足らずで、狂暴な大河を何度見たことか。しかし、

ちよつとだけヤンチャな妹にも見えてこないでもない。そのヤンチャな妹は口の周りに、大量のごはん粒をヤンチャにつけていた。

「ほれっ」

竜児はハンカチを大河に差し出した。

一瞬なんの事か分からなかったが、手で自分の顔を触れるとごはん粒がついていた。

「……………あつ……………!!」

一応は、異性の前である。死ぬほどお腹が空いてたとはいえ、子供の様に顔にご飯粒をつけているのは流石に恥ずかしい。それも顔中にだ。

大河はハンカチで口を拭いながら、恥ずかしさを誤魔化すように文句をたれる。

「あんたが、あの時大人しく鞆を渡せばこんな事にはならなかったのよ……………。どう落とし前つけてくれるわけっ!？」

「まあだ、ついてるぞ」

顔にご飯粒をつけている相手に凄まれても迫力に欠ける。

竜児はサラツと流した。

「んぐっ……………んぐっ……………」

ごはん粒を拭っている大河の顔が、なんだか暗い表情になってきた。

「こんな、炒飯の油にニンニクの香りをつけるために生まれたような奴に……………」

「あのなあ……………飯作ってもらって、それは……………」

「ラブレタの事……………、知られるなんて……………うっ……………ぐずっ……………ぐずっ……………」

お腹が満たされ緊張が緩んできたのか、思い詰める大河の瞳に涙が滲んできた。

小さくて可愛い女の子が、こんな自分の家でぐずって泣き出してしまった。しおしおと涙を浮かべている少女は、今までの狂暴な印象とは全く正反対の、とてもか弱い少女に映った。そして、誰かが

ついでいてあげなくちゃいけない子供の様にも見える。

この子を励ましてやりたい、竜児は無意識に思った。

「ラブレターのどこが恥だ」

「えっ……」

竜児はすくつと立ち上がり、腹を決めたような顔をした。

「いいか、そんなもの恥でもなんでもない。ちよつとそこで待つてる！」

竜児は隣の部屋へ行き、なにやらガサガサとダンボール箱を取り出して戻ってきた。

「見よつ、これをつ！」

そういつて、取り出してきた箱を大河の前に『ドンッ』と置いた。

「何よこれ……」

その箱には大量のノートやMDが詰め込まれている。

大河は箱の中の物をあれこれ手に取って見出した。

「それが何だかわかるか、わかんねえだろうな。それは俺が『好きな女子のためにコンサートを開くとしたら』というテーマのもとに作成したりリスト。それは彼女の為にうっかり作った詩。彼女とのドライブで掛けるMD。当然免許はない。春夏秋冬全てのパターンを揃えた。どうだ気持ち悪いだろ。告白する勇気がなければ、こうして妄想するしかない。確かに情けないけど、それでも恥だなんて思わねえ。お前は自信を持つていいんだぞ。妄想だけじゃなく、行動にまで起こそうとしたんだからな。前向きに考えろつて、さわやかに、朗らかに」

「榊実乃梨 嬢に捧ぐ」

大河が手にしているノートにそう書かれていた。

「そう、榊実乃梨のように つて、なにっ!？」

「あんたがみのりんを?げ つ、生意気。げ つ、身のほど知

らず。げ つ、気持ち悪い……」

「……っ……さい!お前だつて人の事いえないだろっ!」

「何よあんた!忘れろつて!読むわよつ!」

「ちよっ……やめろっ、それだけはっ！」

「え　　っ……」君は天使です。僕にとつての天使です。君の笑顔はいつでも眩しく輝き、僕を明るく照らしてくれます。だけど、君は雲の上の手の届かない存在。でも、それでも僕は……」

竜児は恥ずかしがって大河からノートを取り上げようとする。

「おいっ……マジ、やめろって！」

「邪魔しないで、読んでる途中でしょっ！」

大河はノートを体でガードしながら、続きを読もうとしたが、揉み合う二人に割り込んで、不気味な声が聞こえてきた。

『くわあっ……くっ……くわあっ……。くさっ……さっさっ……さぶ

いぼーっ……ぼーっぼ　　』

声に気づいた竜児が壁に掛かっている籠のもとへ行き、掛けてあったカバーを外すとその中から鳥らしきものが……。いや、鳥だったものか……。？が、姿を現した。

「ごめんなインコちゃん、起こしちゃったか」

「ひっ……。なんてもの見せるのよ、気持ち悪い！」

鳥らしきものを見た、大河の正直な感想だった。

「なんだとっ、うちの大事な家族をっ！」

『いっ……いっ……いん……いっ……いん……』

その大事な家族が何かを言わんとしてる。

「おおっ、いいぞインコちゃん。お客さんに自己紹介だ！今日こそ自分の名前を言ってごらん」

『いっ……いっ……いっ……。いん……ぽっ　　』

冷たい空気が流れる。

『ゴスツッ！』

その空気が吹き去った後には、竜児の頭に新しいこぶができていた。

『……ぽっしぶる……。いん……。ぽっっしぶる……。ぶーっ……。ぶーっ

……。いぼーっ……。いぬいぼーっ……。』

気まずい雰囲気を感じとったのか、先ほどの発言を誤魔化すかの

様なインコちゃん。

「ほら、聞いたか？インコちゃん、いま、インポッシブルって言ったぞ！全然いやらしいことは言っていない！なっ、そうだろ？」

「はぁ　ん？一体、自分の鳥に何教えてんのよっ、このエロ目玉っ！」

「エロ目玉って……」

竜児がふと時計をみると、午前四時過ぎを指していた。

「げっ！もうこんな時間。とにかく、俺たちは同じ穴の貉だ。あの件は誰にも言わない。納得してくれ！」

「やっ！」

「なんでだよっ！っっていうか飯も食ったし帰ってくれ」

「絶対に、いやっ！」

「どうかお願いします、帰ってください。ある意味、病気の母が帰ってくるんで」

竜児はダダコネ大明神様に必死で頼み込む。こんな娘とこんな時間こんな部屋と一緒に居るのを母親に見られたら面倒だ。

「いつ！やっ！だっ！あんたの事信用できないし……。それに、ねえ、ラブレターっでどうなのかな……。？いまどき……。じゃないわよね？」

「こんな時にモジモジされてもーっ！恋愛相談ならいくらでもものってやる。でも、遅いから明日……。なっ……」

問題を棚上げしようとする竜児から迂闊な言葉が漏れた。

その言葉で大河はすっかり大人しそうな顔になって、無垢な瞳で竜児を見ていた。

「ほんとぁ……。？協力してくれる？」

「する……。するするする、なんでもするっ！」

「何でもね。犬のようにしてくれる？私のためになんでも従順に？」

「するっ、誓っ！だから、もう良しってことにしようぜ……。なぁっ？なぁっ？」

竜児はもうなんでもいいから、早く帰って欲しかった。そして、

どんどん自分の首を絞めてゆく。

大河は竜児の顔をじっと見つめた。

「けいたい……」

「はっ？」

「いいから、携帯もってきて」

「つたく、何でだよ……」

竜児は文句をたれながら、やれやれと携帯を取ってきた。

「貸して」

「はいよっ、何するつもりだ？」

大河は黙って携帯を操作する。

どこかへ発信すると、すぐに切って携帯を竜児に返した。

「私の番号、履歴に入れといたから登録しといて」

「ああ……、でも、なんで……」

「あんた何でもするって言ったでしょ！電話したら一秒以内に出なさいよねっ！」

「わかったよ……、だから、もういいだろ。なっ、帰ってくれ」

「わかったわよ……、しょうがないわね……」

しょうがないのはどっちだろう。そう思うのは竜児だけでは無いはずだ。

竜児はやっと納得した大河を玄関に送った。

「靴……」

大河は窓からベランダ飛び移るとき、靴を履いていなかった。しかし、ベランダからまた飛んで、自分の部屋へ戻るのは危な過ぎる。

「靴って……、ってかどうやって入ってきたんだよ……。まあ、そのサンダルでよかったら使ってくれ」

「ありがとう、借りるね。そのうち返すから、それじゃあ……」

大河は下駄箱に入っているサンダルを『バタツ』と狭い玄関に投げ、大きな男性用のサンダルにその小さな足をちよんと乗せた。

「あっ、送るぞ」

「いい、近いし、木刀あるし」

木刀を肩に担いで持っている大河の右手に力が入る。

「いや、それが危ない」

大河は木刀を強く握った事で、何かを思い出した。

「ねえ、あの穴」

「えっ、ああ、あれか…、まっ、あれくらい適当に紙でも貼ってごまかすよ」

竜児に木刀で襲い掛かって、木刀を襖に突き刺して空けた穴の事だった。

「これ、良かったら使って。お金かかるなら、後でちゃんと払うから」

そうやって手渡したのは、さっき返してもらっていたラブレターの封筒だった。

大河は玄関のドアノブに手を掛け、竜児に背を向けて一言。

「じゃあね、竜児」

「お、おおう」

今度は正しい玄関から出て、大河は帰っていった。

「ん、今、呼び捨てにされたか…:…?」

さりげに呼び捨てにして去っていった少女を竜児は見送り、過ぎ去った嵐の後を少し呆然としていた。

お手っ、おかわりっっ！

『ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ』
大河の寝室に携帯のアラームが鳴り響く。

「んんん、ねむい……」

大河は重たい瞼を閉じたまま、手探りで携帯を探す。

携帯を手に取ると液晶画面も見ずに、手先の操作だけでアラームを止めた。

数分後。

『ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ……ピッピッピッ』
再び携帯のアラームが鳴りだした。スヌーズ機能ON。

「うるさい……もう……、わかったわよ……ふああ……あ」

今度は一発で携帯に手が届く。

まずはアラームを止めた。

大河の驚異的な身体能力で、四トントラック並みの重さの瞼を持ち上げる。

『ピッ……ピッ……ピッピッ……ピッピッ……ピッピッ……』
薄く開いた目で液晶画面を見ながら携帯を操作して、スヌーズ機能をOFFに設定した。

これで寝たら、もう確実に起きられなくなる。

まどろみを惜しみながら、しぶしぶ体を起こす。

「……んんっ……むにゃむにゃ……ふあ……あ、ねむう……」

もともと朝は苦手な大河だったが、いつも以上に寝起きが悪かった。

「なんでこんなに……頭が……。そっか、昨夜……」

そう、つい数時間前まで窓越しに隣のアパートに忍び込んで、隣の住人に殴り込みをかけていた。

眠りの周期は九十分前後と聞いたことがある。その周期の切れ目

で目を覚ませば短時間でもスッキリした目覚めになるらしい。その九十分サイクルで、一時間半もしくは三時間の睡眠だったら、もう少し目覚めが良かったかもしれないが、高須家から帰宅して、とれた睡眠時間は二時間ちよつとだった。

「これも、あのバカのせいよ……」

そもそも、ラブレターを入れる鞆を間違えた大河が悪いのだが、怒りの矛先は竜児に向いていた。

「なんか、段々腹が立ってきた」

はい、逆恨みだと思えます。

「そういえばあいつ、なんでもしてくるって言うってたけど、ちゃんと協力してくれるかなあ」

昨晚、無理やり結んだ約束だったので少し不安になった。

「ぶぎゅんっ……ぶぎゅっ……」

くしゃみと鼻水が両方でできた。ティッシュ一枚とって鼻をかみながら、昨日の事を思い出していた。

「そういえば、着信いれてたんだっけ」

再び携帯を取り出し、午前四時過ぎに入っている着信の履歴を表示する。

アドレス帳に登録。登録名は

「あ……ほ……い……ぬ……っつと、これでよし。そういえば、あいつもう起きてるかしら？」

大河の寝室の窓からは、高須家が覗ける。大河の部屋の方が少し高くなっているため、少し奥の方まで覗けそうだ。

大河は窓際に寄ると、締め切ったカーテンと窓を全開にして高須家を覗き見た。しかし、高須家の窓にも当然カーテンが添えつけてある。今は締め切ったままになっていて中が覗けない。

「犬ならご主人さまから、いつでも見えるように生活しなさいよね！」

きつとそれは、ただのプライバシー侵害かと……。

「ったく、一秒以内に出るのよ」

「ちょっと待て、昨日のあれは、北村の件に協力するって意味で……」
「来なかったらわかってるの……？なんなら、これから分かせても……」

大河は拳を光らせた。

「あつ……、いや……」

「あつ……、いや……」

竜児は無用となった携帯を切つて、床に置いてから言った。

「あと十分待つてくれ。あと十分で炊き込みご飯が炊けるんだ！」

「ぐう

っ」

食べ物の名前を聞いた直後、大河の腹の音が正直に鳴いた。

恥ずかしさで大河の頬が少しピンクに染る。

「お前も食べるか？」

大河はこくりと頷いた。

「すぐ出来るから、ちょっと待つてろ」

「ぶぎゅしゅっ……はっぶぎゅっ……くしゅんっ」

続いて、くしゃみで返事をした。

「ったく……」

竜児は呆れた顔をして、くるりと振り返ってキッチンに戻った。

そして、朝食の準備を再開した。

大河はそのまま窓から向かいの部屋の様子を少し眺めていたが、

一通り言いたい事を言い切つて、満足して気が緩んできたのか、だんだん眠くなつてきた。

「ちょっと横になるだけなら平気よね」

大河はベッドで横になり、目を閉じた。そして、そのまま意識はまどろみの中に消えていった。

竜児は朝食の用意を済ませ、大河の分を弁当に詰めるとアパートを出た。

今まで見上げているだけだったマンションの入口へ向かう。

大河の住むマンションはセキュリティ完備の高級マンションだ。エントランスには不審者の侵入を防ぐセキュリティが備わっている。部外者は勝手に入る事が出来ない。

竜児はエントランスの前まで来たものの、どうしたもんかと考えてると、ちょうどそこにスーツを着たサラリーマン風の男が、ロツクの掛かる自動ドアの奥から出てきた。

「あつ…お、おはようございます」

竜児は反射的に挨拶をしてしまったが、大河を呼び出すのも面倒くさそうなので、そのまま平静を装い、マンションの住人のフリをして入ることに決めた。

サラリーマン風の男は竜児の顔を軽く見たが、すぐに顔を逸らして、何も言わず少し急ぎ足風に行ってしまった。

「ん？急いでるのかな…って、ああつ！」

竜児は自分の顔を事を正確に認識していない節がある。自覚が足りないから誤解もされ易いのかも知れない。

少し様子がおかしくなったサラリーマン風の男に気をとられたが、オートロック式の自動ドアが閉まるのに気づいて、慌てて手を挟みドアが閉まるのを止めた。間に挟まった異物に反応して再び自動ドアが開く。そして、竜児はマンションの中へ闖入していった。

「確か、あそこは二階だったよな」

竜児は自分の住んでいる部屋の正面にあるマンションの部屋が、何階だったかを思い出してエレベーターのボタンを押した。

エレベーターが二階に到着してドアが開く。

大河の棲む部屋を探して廊下を歩くが、それらしい部屋はすぐに見つかった。

入口の表札に『逢坂』と書いてある。

「ここでいいんだよな……」

同姓の人間が同じ階に住んでいるかもしれないが、外から見た大体の部屋の位置と、そうそう近くに同姓の人間は住んでいないだろうという楽観で、ここが大河の部屋だと思うことにした。

インターホンを何度か鳴らしたが全く反応がない。

竜児はドアを叩いて呼んでみようと思ったが、良く見るとドアは少し開いていた。

「あれっ、このサンダル……」

竜児がドアの下の方を見ると、見覚えのあるサンダルがドアの間に挟まっていた。そのサンダルは昨夜、大河が帰るときに貸したサンダルだった。オートロック式のドアだったが、間に物が挟まって完全に閉まらなかったため鍵は閉まらなかった。

「まったく、無用心な……、それに人んちのサンダル脱ぎ捨てやがって」

竜児は少し開いていたドアを開き、玄関の中へ入った。

そこにはもう片方のサンダルが、明後日の方を向いて転がっていた。

「こつちもかよ……、って……んんっ!？」

竜児がもう片方のサンダルに気づくや否や、部屋に充満する異臭に鼻をかじられ、鼻を摘んだ。そして、玄関から覗く先のリビングを目にして竜児の顔つきが変わった。

竜児の体が疼き始めた、そして……。

「あ、あ、逢坂

あ!！」

大河は寝ていた。

「ドタドタドタッ……坂……俺に……チン……させて……れ

……」

しかし、眠りは浅く、夢を見ていた。その夢の外が何やら騒がしい。

「バタンッ……あ、逢……?……んだ二度……よ……十五……

……か……」

大河は夢の中で人の声が聞こえたような気がした。だが、まだ眠りは覚めない。

「ジャ……キュッ……ゴシゴシ……バタンッ……

……ガツ……ゴソゴソ……ふうっ……ドタドタツ……
……ウイ……ン……バサツバサツ……ガツ……
……ジャ……カチャカチャツ……
何やら音が聞こえる。それも一向に止む気配がない。いい加減、騒がしい物音に起こされて大河が目覚めます。

「んんん、うるさい……」

ベッドから起きて、寝ぼけたまま枕を抱いてリビングへ向かった。
「何……これ……」

大河は目を疑った。

目の前に広がる光景は、ほんの十分ちよつと前までの景色と似ても似つかないほど綺麗になっていた。部屋中に散らかっていた袋やゴミは大きな袋に分別してまとめられ、部屋の片隅にワタになるほど溜まっていた埃も、フローリング一面きれいに拭き取られている。窓が開いていて、そよ風がたまに吹いて、レースのカーテンをなびかせてはいるが、埃は舞い飛んではない。脱ぎ捨ててあった服も、カゴに入れられてまとまっている。それに、鼻づまりしてたとはいえ、キッチンから漂っていた悪臭もなくなっている。

ふと寝室を振り返ってみると、ゴミ箱の周りに散乱していたティッシュはゴミ箱の中に収められ、リビング同様に床がきれいになっている。

「ふあっ……」

大河は不思議の国に迷い込んだ時の様な声を漏らしていた。

(すごい……綺麗……)

寝ぼけていた意識も、すっかり目が覚めた。

大河が寝室を向いて、背にしているリビングのキッチンからは、ちよろちよると水が出ている音と、陶器の食器が擦れ合う『カチャカチャ』という音が聞こえる。そして、水が止められたかと思うと、そこに居た男が声を掛けてきた。

「よっ、まだ途中だけだな。だいぶ綺麗になつたろ？すごかったぜえ、シンクに溜まった水が腐つてて、もう排水溝の中は又メリと

腐った生ゴミで地獄絵図……、部屋も埃だらけでさあ。」

大河は得意気に話す竜児に向かって、持っていた枕を投げつけその口を止めた。

得意気に話すだけあって、竜児の立つキッチンは酸鼻を極めた状態から一変してキラキラに光っていた。

「不法侵入、しっかも押し付け掃除！マーキングしてないでしょうね？この犬っ！」

「犬っ！？」

大河はダイニングテーブルの方へ歩きながら言う。

「あー、それじゃ犬に失礼か。同じ犬でもあんたは駄犬ね。だ・け・ん！」

「なんて恩知らずな女なんだ、人が折角……」

確かに部屋は綺麗になった、リビングも寝室も……。だけど、大河は何故かそれが頭に引つ掛かっていた。

大河はハツとして足を止めた。

「そついえば、私の寝た部屋まで勝手に掃除してあんた……、もしかして変なことしてないでしょうね！！エロ犬っ！！変態犬っ！！スケベ犬っ！！」

「するかよっ！！綺麗にしてもらっておいて言うことか？ それに結局、なに犬なんだよ、好き勝手いいやがって、って……ん？」

さっきまであれこれ喚いていた大河が、いつの間にかにそつと、竜児が用意した朝食が置かれたテーブルの椅子に座っていた。きれいな宝石を眺めるような眼差しで、その朝食を目にしていた。そして、置かれた箸をとって食べようとしていた。

「おい、『戴きます』は？」

竜児は少し意地悪そうに言った。

「ふんっ……」

大河は少しバツの悪そうな顔をしていた。

「お米の神様！生産者の皆さん！戴きますっ！」

大河はあくまでも捻くれて言った。

「はぐはぐっ……かぶっ……むしゃむしゃ……」
もはや遠慮なく朝食をガツつき始めた。
「お前なあ……。ん、そういえば鼻水とまったなあ」
「それは綺麗になったからじゃない……」
「そう思ってるんなら、ありがとくらい言えよ」
「うるさい黙れっ！そして腐れっ！！」
大河はそう言って、照れ隠しするかの様に、再びご飯を掻きこみだした。

(……しょうがないから、感謝してあげるわよ)

竜児はキツチンの掃除をようやく終え、大河に声を掛ける。

「お前、弁当どうする？」

「いるに決まってるでしょっ！」

「『作って下さい』だろ」

「あんたは私の犬なんだから、作って当たり前。『作らせて戴きますご主人様』じゃない」

竜児は『この女は……』という顔をした。しかし、竜児はこのツンデレ少女と二回の戦闘経験を積んで、ツンデレ耐性レベルが上がっていた。そして、パッシブスキル『受け流す』を習得していた。

「ったく、わかったよ。俺もご飯食べるから帰るけど、お前の方も弁当詰めてやるから取りにこいよ」

「しょうがないわね。行けばいいんでしょ、行けば」

「それじゃこの弁当箱セット借りていくぞ」

「はいはい」

大河はそっぽを向きながら答えた。

竜児は一応返事を聞いて、弁当箱セットを持ち玄関に向かった。そして、昨夜大河に貸したサンダルもついでに持って、自分のアパートへ帰っていった。

竜児が自分の家に着いた頃には、大河はすっかり朝食を食べ終え、朝の仕度を始めていた。顔を洗い、歯を磨き、髪型のセットを済ま

せ、制服に着替えた。

学校へ向かう準備が出来ると、マンションを出て竜児の住むアパートへ向かった。

高須家はアパートの二階にある。

大河が二階へ上る階段を登っていると、アパートの中から竜児が出てきた。

「おっ、丁度いいところに」

「……ったく、出てくるんだったら登る前に出てきなさいよね、ぐず犬！」

「また犬って……。わかんないんだから、しょうがないだろ。それよ、ほれ、弁当」

「あり……がと……」

大河は少し照れを隠しながら、黙って弁当を受け取ると、さっさと階段を下りていった。

学校へ向かう道、二人は肩を並べていた。

女子と肩を並べて登校する。男子にとっては願ってもないことだが、竜児にはそんな浮かれた気分は無かった。

確かに大河は可愛い。同じ学年の女子と比べても、大河より可愛いと思える女子はなかなかいない。黙って大人しくさえしてくれていれば、きつと竜児も胸をときめかせながら登校していただろう。

しかし、竜児はそんなときめきなど無縁になるくらい、昨日から、そして、今日の朝も既に色々な事に巻き込まれていた。

「いい竜児。ちゃんと分かっているんでしょね。犬のように私の為に何でもするって約束したんだからねっ！」

「わかってるよ。朝からこれだけやってんのに、まだ言うのかよ」

「そうじゃなくてっ。あの、その……、北村……くん……のこと……くしゅっ」

大河は顔を赤らめて俯いてしまった。

「わかってるって、……って、おい、そっち違っぞ」

大河は真っ直ぐ学校へ向かう道を外れ、別の道を歩いていた。

「いいのよ、こっちで」

「おい、待ってれば、ちよい待てよっ！」

どこかの人気グループのイケ面さんが、ドラマで言ったようなセリフを軽く混ぜて、竜児は大河を追いかけた。

大河の行く道は確かに通りを外れて少し遠回りになるが、車も少なく落ち着いて歩ける道で、学校へちゃんと向かう通りだった。

竜児は先に行く大河に追いついて、再び肩を並べて歩きだした。

「学校へ着いたら、ちゃんとしてよね。私と…北村くんとの事…、ちゃんと、その…、仲とりもってよね!!」

恥ずかしそうに言ってた大河の顔が、悪巧みをするような顔へ変わる。

「もし、うまく行かない様なら……」

途中まで言いかけて、大河は走りだした。

すると竜児はその大河の先に居る、明るく眩しく光る少女の姿に気づいた。

少女は駆け寄る大河に手を振っている。

「みのり〜んっ」

「遅いよ、大河」

大河は櫛枝に駆け寄って、その胸に抱きついた。

「あっつ。よしよしっ、今日も元気だね」

櫛枝は突進してきた大河を受け止め、その頭を猛獣をなだめるように撫でた。

「あうあう、おっはよ、みのりん」

大河は親友の胸に、顔をぐりぐり押し当てながら言った。

「あ…、櫛枝……おはよ……」

大河とじゃれ合う憧れの女子の前で、竜児は緊張していた。一応、挨拶はしたものの、その声がちゃんと櫛枝に届いているか微妙だった。

櫛枝はそのぼそつとする声の主に気がついてと、頭を抱えて驚きだした。

「えっ？うそっ、何？ごご、ごめん…私知らなかった。大河と高須くんがツーショット登校を極めちゃうような仲だったなんて!!」

「違っつ」

「みのりん、今どきツーショットなんて誰も言わないよ」

「そこじゃねえっ」

「ああ、そっか…、じゃあ今どきの言い方は…って、動転して今どきの言い方がわからない〜」。あ、わかった、アベックだ」

「だから、そこじゃねえっ」

竜児はプロ芸人も顔負けの鋭さで、的確にツッコミを入れていた。「違っよ、みのりん。偶然そこで会ったの」

「なんだ、偶然なんだ」

「なんか、家が近いみたい」

二人の女子の間だけで会話が始まった。竜児の方へは一切視線は無い。こうなつてくると男子はなかなか割って間に入れない。竜児は取り残された気がした。

櫛枝の誤解も解け、そろそろ学校へ向かおうとする二人。そして、大河は意地悪そうな顔をして竜児に声を掛けた。

「じゃあね、高須くん」

櫛枝も大河に続いて言う。

「また後でね、高須くん」

そして、二人は竜児を置いて先に行った。

その去り際に、大河は無言で竜児に視線を送った。

（私はその気になれば、みのりんの印象悪くするのなんて、かーんたん。それに、みのりんと喋れるかどうかも私次第。もし、私が上手くないかないうのなら…：あんたも道連れだからね）

大河の思いがどこまで竜児に通じたかはわからないが、大河の視線を受けて、竜児はなにやら理解したような顔をしていた。

こうして大河と竜児の間に、それぞれの想いを賭けた協力関係が

成立した。いや、主従関係というべきだろうか？

そして、数日後の朝、高須家の居間に朝食を囲む一つの家族がいた。

「おかわりっつ！」

大河は空になった茶碗を元気よく竜児に差し出す。

「おうっ」

竜児は茶碗を受け取り、ご飯を盛ろうとするが……。

「って、そうじゃねえだろ！なんでお前は俺んちで朝飯食うようになってんだよっ！」

大河はここ数日、竜児の家で朝食を食べるようになっていた。お弁当も作ってもらっている。学校から帰ってきては高須家に入りこみ、竜児が夕食を用意するのをただらと待っていた。自分は一切何もしない。

朝食を囲む高須の居間の襖。あの大河が殴り込みを掛けた日に空けられた穴は、大河が竜児に渡したあの手紙を、桜の花びらの形に切り取り、それを貼り付け塞がれていた。

不要になった手紙で修復されたあの日の出来事。それは何を意味しているのだろうか。

あの一件以来、竜児と大河はまるで兄弟のように一緒に居ることが多くなった。だが、お互いがお互いの胸の中に、未熟な己では気づけない、新たな気持ちが生えていることに、二人は気づくことは出来なかった。

虎の傷（きず）な

「もしかして、私ってドジなのかな……」

四月のある日の夕方、大橋高校二年C組の教室。

教室の窓際でしゃがみこみ、膝に手をあて、今にも泣き出しそうな顔で床を見つめる大河がそこにいた。同教室の自分の席から、雛鳥を見つめる親鳥のような眼差しで、大河に目を注ぐ竜児もいる。

「ラブレター書けば入れる鞆、間違えるし。殴り込みかければお腹空いて倒れるし。バスケットすれば顔面にボール喰らうし。クッキー渡そうとすれば、転ぶし、落ちるし、落とすし」

ラブレターと殴り込みの件は分かるが、他にも何か仕出かしたよ
うだ。

「ほらほら、まだあるだろ。ラブレターの中身の入れ忘れとか」

「そう……だった……」

竜児は落ち込んでいる大河にとどめを刺しにいった。傷口に塩を塗るといふヤツか。意外と竜児は「S」の字なのであろうか。普段であれば、「うるさいっ！くずバカ駄犬あほ竜児！」とか「だまれっ！地獄に落とす！」とか言いそうな大河が、今はその竜児の言葉を真摯に受け止め、更に落ち込んでいた。

大河がいつもこれだけイジらしければ、きっと、かなりモテているに違いない。

大河が自分でも口にしていたが、これほど落ち込んでいる理由。

それを知るには、数時間前に遡ることになる。

今日の体育の時間はバスケットだった。学期の始まりという事もあり、基礎練習をすることになっていた。二人一組でペアを組みパス練習をする事が、前回の授業の終わりに周知されていた。前回はドリブル練習が中心であった。

大河と竜児。それぞれの親友に想いを寄せる二人の間に協定が結ばれている。どちらかというと一方的とも言えるが、まずは大河と

北村が上手くいくようにと、二人は事前に作戦を練っていた。

その一つが、パス練習で大河と北村がペアを組み、練習をしながら楽しく会話をして、二人の距離を縮める、という作戦。

具体的な内容はこうだった。

まずは大河と竜児がペアを組んで、普通にパス練習をする。そして、竜児がパスをミスったフリをして、北村とペアを組んだ相手にボールをぶつける。竜児がそれを大げさに騒ぎたて、ボールをぶつけた相手を保険室に連れて行く。その後、残った大河と北村でペアを組んで、練習を再開するというもの。

しかし、その目論見は脆くも崩れることになる。

まず最初に二人を動揺させる出来事があった。

北村はギャル系女子の木原麻耶とペアを組み、櫛枝は竜児の一年の時からのカラスメイトである能登久光とペアを組んでいた。自分の想いを寄せる相手が異性とペアを組んでいる事に、二人とも気が気でなかった。自分達も異性でペアを組んでいるのだが……。というか、それがキツカケだったのだが。

その上、ボールを当てる相手が女子になってしまった事もあり、竜児は作戦決行を躊躇していた。

そんな竜児を見かねて、大河は男女平等を謳って。

『へい、パス！へいへいへい、パスパスパス。へい！パス！パス！』

と、竜児を嚇けてパスを出させようとする。ようやく腹を決めた竜児がパスを出した瞬間、北村が発した声に大河は気をとられて余所見をしてしまった。それで結局、竜児が投げたパスは大河の顔面に命中し、作戦はあっけなく失敗に終わった。

これで大河のドジ変数が一つインクリメントされた。

失敗した作戦はもう一つある。

大河と竜児は選択授業で家庭科を選んでいて、家庭科実習の授業では、生徒達の授業への関心を甘いもので惹き付ける、という事で最初の実習はクッキー作りをする事になっていた。

手作りお菓子を好きな男子に渡す。まさに鉄板とも言える作戦、女の魅力番外地である。

家事全般を日常的にこなす竜児にとって家庭科は自然の選択だったが、大河は『他の授業がいい!』と家庭科の授業を拒んでいた。だが、竜児はこういうチャンスを予め予期していた。嫌がる大河を説得し、なんとか納得した大河はしぶしぶと家庭科を選択したのだ。

そして早速、千載一遇のチャンスは到来した。

本日最後の授業でクッキー作りが行われた。大河はひたむきにクッキー作りに励み、見た目はそこそこ美味しそうなクッキーを焼き上げていた。トレーに乗せた焼き立てクッキーを持ち歩く大河が転びそうになり、それを竜児がギリギリの所で体を支えて何とか事なきを得た。

そんなハプニングを起こしつつも、この日の為に用意していたラッピング材でクッキーを包み、リボンを可愛らしくかけて、北村へプレゼントする用意はどうか出来ていた。

そこまでは良かった。いや、良くない事も既に起きていたが……。家庭科の授業が終わり、教室に戻って出来立てクッキーを北村へ渡そうと、教室の入口まで来て『軽々しく、軽率に、お手軽に、気軽に』クッキーを渡す心の準備を済ませ、教室に入ったが北村は不在。クラスメイトに聞くと、北村はたった今、教室を出たところだと言っ。

二人はすぐに教室を出て北村を探すと、向こうの階段を登っている北村の姿を発見した。大河が猛然と駆け出し、竜児はそれに必死についていく。大河は『どけどけどけ い!』と声を上げ、廊下で憚る人海を掻き分けながら、猛烈なスピードで北村に追いかけた。ずば抜けた大河の足の早さで追いつけるかと思っただが、階段を登る途中で足を踏み外し、大河は階段から落ちてしまった。

竜児が後から追いつき偶然受け止めることが出来たので、大事には至らなかったが、階段から落ちた弾みで持っていたクッキーは窓

の外へ放り出されていた。

大河は落ちたクツキーを探しに行つて見つけたものの、クツキーは粉々。クツキーを可愛らしく包んでいた包装も土ぼこりで汚れていて、もうプレゼントするどころの状態では無くなってしまった。

そして、大河は見る影もなくなったそのクツキーを手に、教室へ戻つてきて今に至るのだった。

そんなこんなで大河のドジ変数が更にインクリメントされて、その他、ラブレターの件、殴り込みの時に空腹でぶっ倒れた事もコミコミで、ようやく大河の『ドジ自覚フラグ』がONになったという訳である。

大河と竜児の二人しかない放課後の教室。

その教室には赤い夕日が、黄昏る大河を包み込むかの様に差し込んでいた。

竜児は膝を抱え落ち込んでいる大河をしばらく静観していたが、なんとか励ませないものかと席を立てて大河に近寄り、とりあえずクツキーを食べて褒めてあげようと思った。

「それ、一個くれよ」

「ちよ…っ…それ、こなごな。それに…、あ、あの、あ…の…」

竜児は大河の持つていたクツキーの袋を頂戴した。

袋を結んでいたリボンをほどき、袋の中から一欠けらのクツキーを摘んで口にする。

竜児は僅かに難しそうな顔をしたかと思うと、袋の中の粉々になったクツキーを口の中へ一気に流し込み、ポリポリと音を立ててクツキーを頬張った。そして、ゴクンツと喉の奥へ飲み込んで、大河に微笑んでこういった。

「うまい！もう一袋！」

「え？」

「ちゃんと出来てるじゃねえかよ。残念だったな、また次の機会に頑張ろうぜ」

竜児の顔は少し無理をしているようにも見える。だが、しかし、大河はその竜児の顔に少なからずとも励まされていた。そして、今まで曇っていた大河の顔に少し晴れ間がのぞいた時だった。

「ガタツ　　タツタツタツタツ　　」

「ん？」

「ふえ？」

教室の入口の方から突然聞こえてきたこの音が、ある誤解を招く呼び水になるうとは知る由もなかった。

暫くの間、二人は狐につままれたようにキョトンとしていたが、竜児はふと我に帰り、暗くなってきた窓の外を見ると、泰子の顔が頭に浮かんできた。泰子とは竜児の母親の名前である。

「なあ、逢坂。暗くなってきたし、そろそろ……」

「……………」

大河は黙ったまま俯いてしまった。さっきまで泣きそうだった女の子にそんな態度をとられてしまったら、余計に何か声を掛けたくなくなってしまふ。

「なっ、今日はお前の好きな物作ってやるぞ。ハンバーグか？それともトンカツ、そうだデザートにプリンなんてどうだ？」

「いい……」

力ない大河の声。

「遠慮すんなって、お前、肉もプリンも好きだろ」

「いいから、帰って。それに今日いらさないから」

やさしく声を掛けてくれる竜児。その言葉に甘えてしまったら、熱いものが込上げてきそうだった。

「なんか食った方が元気ぞ」

大河はすくつと立ち上がり、腰に手をあて、子供に言いつけるように言った。

「ほんと……気の利かない駄犬ね。今日は一人になりたいの。それにあんた、こんなところでモタモタしてる暇なんてある？ やっちゃんのご飯作りに早く帰らなきゃいけないんじゃない？」

「それは……そうなんだが……」

「私なら平気。ほんと、少し一人になりたいだけなんだから。明日になればもう、いつもの元気な大河ちゃんにすっかり元通りなんだからっ」

大河は満面の笑みを浮かべて言った。

竜児はそんな大河の顔を見て、さつき食べたクッキーの味を思い出していた。

「ったく、わかったよ。けど、明日の朝食は用意しとくから食べるこいよ」

「はいはい……、わかったから、さっさと行った行った」

大河は竜児を追い払うかのように急す。

「わりい……、それじゃ先帰るな」

竜児は後ろ髪を引かれる思いもあったが、自分の鞆を机から取って教室の入口へ向かうと、一度振り返って大河を一瞬目にしてから教室を後にした。

「ったく、どこまでご主人さまに懐いてくるのかしら、あのバカ犬は……」

そう言いながらも、大河の口元には笑みが零れていた。

大河は一人になった教室で、窓から夕日を眺めた。

暫くして、誰もいない教室を振り返る。

大河は少し天井を見上げ、誰に言うわけでもない言葉を、いや、自分自身に向けたものかも知れない、そんな言葉を口にした。

「私なら平気、いつだって一人で立ち上げられる。去年のあの時だって、その前も、その前もずっと……そうしてこれたんだから」

視線を下ろすと、先ほど竜児が一気に食べ尽くしたクッキーの袋が目に入った。

「一気に全部食べちゃって、少しは味わいなさいよね……」

大河は空になったその袋を手にした。なぜかその袋からは温もりが伝わってくるような気がする。

なんとなしに袋の中を覗いてみると、まだ少しだけクッキーの欠片が残っていた。

「こなごな……やっぱり私って……」

大河は残ったクッキーの一欠けらを手にした。

大切な人の為に作ったクッキーをこんなにしてしまった。その自分の不甲斐なさを目の当りにしているようで、なんだか悔しくなってきた。クッキーを口に放り投げ、悔しさを噛み締めるように思いっきり噛み砕いてやった。

「何これ……しょっぱい。あいつ、こんなの全部食べたんだ。ほんと、ムリばっか……」

『うまい!』と言ったときの竜児の顔が浮かんできた。

「んふふっ」

落ち込んでいた顔が少し綻んだ。そこに流れる雫は、冬の終わりに氷柱からしたたる様に、自然と滲み出たものだった。

「逢坂、何やってんだ?こんなところで……」

(……つつつ……!?)

教室の外から不意に掛けられた男の声。

大河は少し気持ちが油断していて、相当ビツクリしたに違いない。教室の外には大河を訝しげに見る柚樹の姿がある。声の主は柚樹だった。

「あなた、みのりんの……」

「つつたく、どうせ俺の名前なんて覚えてないんだろ。それよりなんかあったのか?」

柚樹は言いながら教室に入って、大河に近寄る。

大河は慌てて柚樹に背を向け、袖で顔をこしこし拭いながら言った。

「べっ、別に、あなたには関係ないでしょ」

「一応クラスメイトだし、悩み事があるなら何でも相談に乗るけど」大河の後ろに立って、その背中を見つめる柚樹は心配そうな顔をしていた。

大河は振り向き、言い放つ。

「はあ？何であんたなんか。みのりんとは仲いいみたいだけど、馴れなれしくしないで、厚かましいのにもほどがあるわっ！」

「櫛枝は別に関係ない。俺はただ逢坂が……」

「そ・れ・に、あんたこそ何でここにいるのよ」

「それは……」

柚樹は帰ろうと学校の玄関を出たが、教室の窓から外を眺める、しよぼくれた大河の顔が見えて気になって戻ってきた。とは言えなかった。

「まあ、どうでもいいわ。それより私、帰るところだから、そこっ、どいて」

「わかったよ、じゃあな、逢坂」

大河は『フンツ！』といった表情で教室を出ていき。

「じゃあ、御機嫌よう、神田くん」

と言って、『ピシャッ』と教室の戸を閉めて帰っていった。

「あいつ……」

教室に取り残された柚樹は少し教室に残って、大河が帰る姿を教室の窓から見送っていた。

そして、翌日の朝。

学校へ登校してきたばかりの二年C組のクラスメイト達は、ある話題で盛り上がっていた。

「確かに見たツス。スーパーで二人が葱やら大根やら買い込んでるのを。もうほとんど夫婦？」

「あの二人、朝同じマンションから出てきて、すっげえ淫靡な香りするんですけど」

「しかもあいつら、手作りのクッキー一緒に食べてて、もう『あーん』ってなもんで」

「ええ〜？そうなのそうなの？うっそお〜？」

この話題の的は大河と竜児の二人だ。

話題の発端は昨日の物音の主である能登が、教室に二人つきりで居る大河と竜児を見かけ、竜児が大河の作ったクッキーを食べていたのを目撃したところから始まった。

能登が同じクラスメイトの春田浩次に「高須と手乗りタイガーって最近よく二人でいること多くね?」と言い出した事をきっかけに、他にも心当たりのあったクラスメイト達が寄ってきては、自分が目撃した二人の情報を次々に証言し出したのだった。

ちなみに春田くんは、ちゃらちゃらした感じのロングで、学ランの胸元をだらしなく開けて、女子のことばかり考えてそうな二年組の一員です。

同じくクラスメイトで、さらさらのロングヘア、クラスでは一番の巨乳を誇り、少しおっとりした感じの香椎奈々子が、大河の親友である櫛枝のところへ、更なる情報を求めてやってきていた。

「実乃梨。親友のタイガーちゃん。噂になってるけど、実際のところどうなの?」

「うん…。そういえば朝の待ち合わせに、大河と高須くんが二人一緒に来てたけど」

「ええ〜? やっぱりやっぱりい〜?」

親友からの証言も加わり、二年組のクラスメイト達は更に盛り上がっていた。

『ガラララッ』

竜児が教室の戸を開けた音が響いて、教室は途端に静まり返り沈黙が走った。

「ん、なんだ?」

竜児は教室の入り口で立ち止まり、突然変わった教室の空気に戸惑っている。

竜児が入口でまごついていると、その後ろから急かす声がした。

「ちよつと、さっさと入ってよ」

大河の声である。

「キヤッ」

クラスの女子と一緒に登校してきた二人を見て、恥じらいの声をあげた。

「キヤツ？」

その女子を、竜児は疑問符を顔に浮かべて見ている。そんな二人の様子をじつと見つめていた櫛枝が、すっと席を立った。

「二人とも、ちょっといいかな？」

櫛枝に呼び出されて屋上に立つ大河と竜児。

その櫛枝はジャージの上着を肩に掛け、何やら思い詰めた表情で、フエンス越しに屋上からの景色を眺めている。

天気は晴天。少し強い風が吹いていて、櫛枝のジャージをなびかせていた。

櫛枝は空を見上げ、呟いた。

「星たちが……泣いている……」

今は太陽が燦々と輝く真昼間で、もちろん星は一つも出ていない。櫛枝さん、星なんか出ていませんけど……」

プロのツツコミ芸人である竜児は、どんな状況でもツツコミは欠かさない。予想では竜児はきつと、何とかアンド何とかのトシ並みのツツコミの早さとキレを、将来身につけるにハズだ。

櫛枝は黙ったまま真剣な眼差しで、一つも星が出ていない星空を眺めていた。

「どうしちゃったんだ？櫛枝さん」

竜児はこの異様な空気に堪らず大河に訊ねた。

「わかんない」

大河も初めて見る親友の態度に困惑している。

黙って空を見上げていた櫛枝が、自らの沈黙を破る。

「高須くん」

「はいっ！え、おれ？」

竜児はまさか最初に自分の名前が呼ばれると思っておらず、意表

倒れる大河を支える竜児。且つ、ツツコミも忘れない！そして、目指せつ、トシを！

「高須くん、大河の事泣かせたら、絶対許さないからね……」

竜児は想い焦がれる櫛枝から完全に勘違いされ、大河を支える俺の方こそ倒れたいよ、と思いながら、なんだか意識が遠く気分であった。

その日の放課後、どちらから声を掛ける訳でもなく、二人は近所のファミレスに集まっていた。

「くし……えだ……」

櫛枝に誤解されたショックで、竜児はシヨボくれてテーブルにへたり込んでいる。

「悪かったわね。私があんたんに押し掛けたせいで、みのりに誤解されちゃった」

「いや、それは……」

手乗りタイガーと呼ばれ、恐れられている少女の姿はここには無かった。ひたすらに反省する可憐で素晴らしい少女がいるだけである。申し訳なさそうに謝る大河は、どこか痛ましく見えた。自分も北村に誤解されて辛いはずなのに……。

「居心地……良かったんだ、あんたんち」

「……………」

竜児は少し意外だった。大河がそんな風に思ってくれてたなんて。「私んちのマンションなんてさ、夜になって帰っても電気消えてて暗いままだし。『ただいま』って言っても、返事する人なんか居ない。テレビを見て笑っても、自分の笑い声しか響かないの。」

でも、あんたんち行くとさっ。あんたが居て、やっちゃんが居て、それにブサ鳥も居て……」

「ブサ鳥とか言うな、インコちゃんが可愛そうだよ」

「私さ、親と折り合い悪くて、こんな家出て行きたいって言ったら、あのマンション充てがわれちゃった。そういう親だって分かってい

たのに……。でも、言い出したらもう後に引けなくって。そしたらパパなんて勝手に引越しの準備済ませて、気がついた時にはもう私の荷物全部あのマンションの中。家に居場所が完全になくなちゃって、出るしかなかったの……」

「いくらなんでも、それは……」

「うちのマンション、この前あなたが掃除してくれるまで、床は埃だらけ、キッチンからは変な臭いがしてて、ゴミは散乱して服も脱ぎっぱなしだったわね。おかげで鼻水もくしゃみも止まらなかったよね……」

「あのキッチンは凄かったぞ」

「ありがとね」

「なっ、なんだよ急に……」

「覚えてる？あんたんちに殴り込みに行った日のこと」

「忘れるわけないだろ、マジであの時は殺されるかと思ったぞ」

「だよね……、ほんと、ごめんなさい」

「なんだよ、らしく……ないぞ」

「でもね、あの時、倒れちゃって炒飯ご馳走して貰ったでしょ。あれ……、本当に美味しかったんだ。それに温かくて、なんだかホツとできて……」

「あれくらいなら、いつでも作ってやるぞ」

「そういえば、鞆の奪い合いもしたっけ。私が間違えてあんたの鞆にラブレター入れちゃって、必死に取り替えそうとしたのに、くしゃみで手離しちゃって……。竜児が掃除してくれなかったら、まだくしゃみも止まっていなかったのかな？」

「さあな、止まってたかもしれないし、止まらなかったかもしれないし」

「なんだかもう、ずっと前の事だった気がする。ついこの間の事なのにね」

「そうだな」

しみみりと、そして、淡々と話す大河の言葉に、竜児は簡単な相

槌しか打てなかった。

竜児は大河がこんな過去の事を振り返って、語り掛けてくるのか不思議だった。

だけど、大河の気持ちは全然わからなかった。

二人の間に暫く沈黙が続いた。

そして、二人はファミレスを出る事にした。

ファミレスからの帰り道、辺りはすっかり真っ暗になっていた。歩き慣れた近所の夜道を二人はいつもの様に肩を並べて歩いている。だけど、二人の間に流れる空気はいつもと違う。

「つい二、三日前なんだよね」

「ん、何が？」

「さっきのファミレスで、北村さんの作戦を二人であれこれ練ったの」

「ああ、そうだな、三日前だ」

「いま思うとさ、たかがパス練習でペアを組むのに、ボールをぶつけるなんて大げさだよな」

「その作戦、お前が言い出したんだろ」

「そうだった？家庭科実習の前日に、あんたんちでクッキー作る練習もしたわね。わたし生地ヒックリ返して溢しちゃうし、シュガーとソルトも間違えそうになったし」

「でも、美味しく焼けてた。お前の居ない時に泰子も食べてたけど、美味いって言ってたぞ」

「あのクッキーしょっぱかったでしょ」

「えっ？」

「北村さんの。粉々になってるの見たたら悔しくって、ちょっと食べちゃったの。何あれ、最悪。なのにあんた全部食べちゃうし、嘘までつくし、駄犬のくせに気ばつか使って、ハゲるわよ」

「余計なお世話だ」

「私が全部やるって一生懸命作ってたつもりなのに、変な味のクッキー

「しか作れなかった……。あんと一緒に作った時は上手く出来たのにさ」

「あの味、俺は好きだぞ、なんていうか……。そう、ミルクティにとっても合いそうな味だった」

「ほんと、あんたって……。ねえ、竜児もみのりんの事、考えて悩んだりする？」

「ああ、するとも」

「そう…だよな」

「見せたる、あの恥ずかしい作品の数々を。コンサートのプレイリスト。お前に読まれた詩。運転できないのに作ったドライブ用のMD。ただだけ悩んで、あんなもん作ったと思ってんだ……」

「そうだったわね。あの詩、素敵だったわよ。んふふふっ」

「からかうなよ……。お前、なんかおかしいぞ」

大河の歩く足が止まった。たった今、明るく笑ったと思ったその顔は、いつの間にか暗く染まっていた。

「ん、逢坂？」

「なんで誰も分かってくれないんだろ。私達こんなにグジグジ悩んでいるのに、何で誰も知ってくれないんだろ。ほんと、皆んな、皆んな、皆んな皆んな皆んな……。むっっっっかつくんじゃ

い！！！

大河は腹の底から怒声をあげ、目の前にあつた電柱に渾身の力で蹴りを入れた。何度も、何度も、何度も、何度も……。

「むかつくんじゃ！むかつくんじゃ！むかつくんじゃ！むかつくんじゃ！誰が手乗りタイガーじゃ！全然平気なんかじゃないんじゃ！みのりんのバカ！北村くんのバカ！何で話を聞いてくれないのよ！パパだって、ママだって、誰も、誰も……。私の事わかってくれない……」

威勢よく蹴り出した大河が、まるでしぼんでいくように体が崩れていく。

「加勢してやるっ！」

「ばいばい、高須君」

「あつ……………、ああ」

竜児は大河に掛ける言葉が何も出てこなかった。

大河は何かを振り払うように走っていく。

竜児は立ち尽くしたまま大河の後ろ姿を見つめ、その姿は闇の中へ隠れていった。

次の日の朝、大河は目覚めた。それは、高須家に朝食を食べに行く余裕を持った時間だった。いつもの様に学校の準備をする。以前の様に朝食は食べない。全ての用意が整った時間は、学校へ向かうにはまだ早い時間だった。

それでも大河はマンションを出た。少しでも早く親友に会う為、待ち合わせ場所へ向かう。それにきつと、誰かと顔を合わせないようにする為でもあった。

大河は櫛枝との待ち合わせの場所についた。まだ櫛枝が来るような時間ではない。

少し俯き気味にどこを見るわけでもなく、思い込んだ様子で櫛枝を待つて立ち通した。

どれだけ待ったかは分からない、が、少し離れた所から親友の声が届いてきた。

「おーい、大河。今日は早いね」

「みのりん……………」

二人は、二人で学校へ向かう道を歩いた。

大河の様子はいつもと違う。

櫛枝はそんな空気を感じながらも、最初は大河に話し掛けていた。「ねえ、大河。高須くんは？今日は一緒じゃないの？」

「……………」

「あ、そうだ。昨日、部活でね」

「……………」

大河は何も喋ろうとしない。

沈んだ空気に、自然と櫛枝も言葉はなくなった。

二人は黙って歩いた。

そうして、会話が途切れたまま二人は教室へ着いた。

櫛枝は自分の席に座る。

大河は自分の席に行かない。

考え込んだ表情で、櫛枝の席の横に立っていた。

櫛枝はそんな大河の顔を下から覗き、おかしい様子の親友を心配して声を掛ける。

「大河、何かあった？」

「あのね、みのりん……」

沈黙を続けていた大河がようやく喋り出した。

「あの……その……昨日の事なんだけど……」

「昨日の事って？」

「昨日、屋上で話した事。私と高須君が付き合ってるって……」

「あ、うん」

「あれね、みのりんの誤解なの。私達は付き合っていないし、ほんとただのお隣さんだけなの」

「でも、大河。二人はいつも一緒に……」

「みのりん、ちゃんと聞いて、お願い、私の話……ちゃんと聞いて」

「けど、大河……」

「だから、違うの！私と竜児は絶対に付き合ったりしない！どうしても、みのりんだけにはわかって欲しいの……。みのりん……だけには……絶対に……」

「大河……？」

親友に自分の思いを必死に訴える大河。

その話の内容を耳にしたクラスメイト達が周りに集まってきた。

「なにになにー？どうしたの？タイガーと高須になんかあったの？」

「あれ、逢坂さん、今日は高須君と一緒にじゃないんだ。もしかして喧嘩？」

「えーっ、うっそー？」

「大丈夫？逢坂さん、もしかして高須君に酷いことされた？」

「え　　っ、どうしてえ？二人とってもお似合いだったのに」

クラスメイト達は大河の周り寄ってきては、自分達の想像である事ない事を、あれこれ噂し出した。

「……………つてな事いうな」

「えっ？」

「ん、何？」

クラスメイト達は大河の言葉を聞き取れず、キョトンとした顔をしていた。

「お前たち、勝手な事いうんじゃないよあああああ

い！

！」
大河は大声を張り上げ、クラスメイト達を怒鳴り立てる。

その突然の大河の怒鳴り声にクラスメイト達はうるたえた。

何人かの生徒が大河に言い訳をしようとする。

「でもね、逢坂さん……………」

「別に私達は……………」

「うるさいっ！黙れ！黙れ！黙れ！黙れえええ

え！

！」
大河はクラスメイトの言う事を耳にしようとしない。

クラスメイト達の口を封じるように、教室中の机や椅子を投げ飛ばし、蹴倒し、物凄まじく暴れた。だした。

クラスメイト達は危険を察知した小動物のように、クラスの隅に寄って固まっている。そして、只々嵐が過ぎ去るのを震えて見ている。

「お前たち、私達の知らない所で勝手に噂して……………私と高須君は本当に何でもないのっ！付き合ってたなんかいない！ただのお友達！嘘じゃないの！みんなどうして信じてくれないの？なんで？どうして？」

「わかったから、逢坂さん……………ねっ？ねっ？」

クラスメイトが大河をなだめようとするが、今の大河に通じるは

ずもない。

「それになんだ、お前ら。竜児の目が少し人と違うからって、勝手にヤンキー扱いして。竜児は…竜児は…お前らなんかよ
りずつと優しくくて、相談にも乗ってくれて、私の言う事もちゃんと
聞いてくれて、バカで、アホで、マヌケな顔してるけど、だけど、
本当に良いヤツなんだ、お前らよりずつと良いヤツなんだ！ヤン
キーなんかじゃないじゃ！ヤンキーなんかじゃ…違うんじゃ…
違うんじゃ……」

「逢坂、もうそのくらいに……」

大河を制止しようとする北村だったが、その北村の声も大河には届かない。北村の事さえ大河の目には映っていなかった。

「私は『手乗りタイガー』って言われたっていい、だけど、竜児は本当に良いヤツだから、ヤンキーだなんて言わないで！」

外に居た柚樹が教室の中へ入ってきた。始めから居たわけではなく、登校してきて教室にいたら既に、大河が机やら椅子やらを投げ飛ばして、教室に入ることが出来なかった。暴れる大河を止められないクラスメイト達にみかねて、大河を取り成しにやってきた。

「逢坂、もうみんな分かったと思う。もう誰も高須の事、ヤンキーなんて言わないから、もう大丈夫だから」

「うんうん、そうだよ逢坂さん、私達もう言わない、絶対に言わない！」

クラスの女子が柚樹の言葉に賛同する。

「嘘だ　　！！お前たちの言うことなんか信用できない！できるはずない！いつつも、いつつも、その場凌ぎの事ばかりだ！」

大河は既に散乱している机や椅子にも当たり散らした。

この様子では、もはや何を言っても通じない。

「大河！」

柚樹は正面から大河の両腕を掴み、机を蹴り飛ばそうとする大河の体を止めようとする。

「触るなっ！離せっ……このっ！」

大河は柚樹から手を振り解ほどこうとしたが出来なかった。しかし、自由になっっている足で柚樹の腹に手加減なしの蹴りを喰らわした。

その蹴りは完全に柚樹の腹に極まっていた。しかし、柚樹は一切たじろがなかった。一瞬顔を歪めたが、大河の腕を掴む腕の力は緩まない。

「このっ！このっ！このっ！」

大河は全身で腕を振り解こうとまた暴れ出したが、振り解どける気配がなかった。

「なんなら、もう一発くれてやろうか！」

そう言っただけで大河は、軸足に力を容れ、脚を蹴り出そうとしたが、不意に掴まれていた手を強く引かれ、バランスを崩してしまって蹴れなかった。

大河は強引に引き寄せられて、柚樹の胸元に顔を埋めるような格好になっていた。

柚樹はその格好のまま、大河のその小さな体を抱すくめた。

「ちよっ……なっ……」

大河は動揺した。なんだか知らない間に、男子に思いつきり抱かれている。

しかも、密着していて思うように体も動かせない。

「あの……い、痛い……よ……」

それに、抱きしめる力も強かった。

「ごめん、つい力が……」

柚樹は大河を抱きしめる力を少し緩めた。

「……離して」

大河にもう暴れる力は入っていなかった。

今までの怒りもどこかへ吹き飛んでしまって、恥いのある一人の少女になっていた。

「離してっば……、セクハラで訴えるわよ！」

柚樹は自分が大胆な事をしていることに気がついて、大河を抱いていた腕をパツと離れた。

「ごめん逢坂、でも、他に思いつかなくて」「フンッ！」

大河は柚樹を鼻であしらう様にして、そっぽを向きつんとした態度で教室を出ていった。

教室には居づらかったし、それになんだか恥ずかしかった。

「すまん北村、逢坂の事頼んでいいか？」

「ああ、わかった。俺に任せてくれ」

柚樹は大河の事を北村に任せた。それは、あのラブレターの件があつたからなのかもしれない。

北村は大河を追いかけて教室を出て行った。

教室ではあまりの出来事に、クラスメイト達はまだ体を硬直させていた。

「みんな、先生が来る前に机もとに戻そうぜ」

柚樹はクラスメイトに指示を送り、呆気にとられてたクラスメイト達も我に返った。

大河の姿もなくなり、教室に広がっていた緊張も解けてきた。

己の興奮を治めようとする本能だろうか。自分達の机を直しながら、たつた今起きた出来事を友達と話す声が、教室のあちこちから聞こえてくる。

「ほんと、マジで怖かったよね」

「でも高須くんってヤンキーじゃないんだ？」

「高須は怖くないって俺も言ってたろ」

「やっぱ手乗りタイガーは恐ろしいわ」

「あの逢坂さんを見たら、高須くんもなんだか普通の人に見えてくるよね。あ、でもヤンキーじゃないんだっけ」

「そうそう、でも逢坂さん、すごい迫力だったね」

一度は静まり返っていた教室も、あつという間に、いつも以上に騒がしくなっていた。

『ガラララッ』

誰かが教室の戸を開けた音。それに教室は一瞬静まり返ったが、教室に入ってきたのが竜児だったのを見るとその緊張は直ぐに解けた。

「これって……」

竜児はクラスメイト達がひっくり返った机や椅子、引き出しから飛びでた教科書やノートを直している光景に目を白黒させていた。

「た、た、高須。あの、悪かった。変な噂しちやってさ」

「逢坂さんに怒られちゃった」

「私と高須は何でもないって、高須はヤンキーじゃないって、大暴れして」

クラスメイト達は竜児に、たった今起きた出来事、自分達が大河と竜児のことを噂していたこと、諸々の事情の説明と謝罪をした。

未だ状況を飲み込めていない竜児に櫛枝が近寄っていった。そして、大河が自分に必死に訴えた言葉を竜児に話していた。

「お　い、逢坂　」

「きつ、きつ、きた…、む、ら…、むら…くん」

大河は学校から帰ろうとして、玄関の下駄箱から靴を取り出していたところに、北村から声を掛けられた。

「あつ、あつ、あの、あの…、どう…したの？」

大河は自分の好きな人の方から、声を掛けられたので動揺している。

「どうしたのって、お前。あれだけ大騒ぎして心配しない訳ないだろ」

「え…大騒ぎ？」

大河はさっきの時みたいに、大暴れしている時はほとんど何も考えてはいないし、覚えてもいない。むしろ、何も考えていないからこそ、嘘偽りなく自分の気持ちを表現できる。純粹な気持ちであるが故に、行動も素直。感情の赴くままに体は動き、ブレーキが掛か

大河は深く呼吸をした。
気を落ち着かせる。

そして、どうにか言葉を発した。
「北村くん！私、北村くんが、その……北村くんのこと……、あの、その……」

大河は威勢よく北村の名前を叫んだものの、その後がなかなか続かない。

それに、もじもじと恥ずかし気で、落ち着かない態度をしている。北村はてつきり教室での事に関する相談をされるものと思っていた。

だけど、目の前の大河はまるで様子が違う。

大河の話というのは相談ごとではなかった、北村は話の核心が見えてきた。

「ちよつと待った。なんとなくだが、話の流れが見える気がするぞ。しかし、その前に一つ確認させてくれ。否定はしたが、本当は高須と付き合ってるんじゃないのか？」

「それは誤解なの、高須君とは本当に何でもなくて」

「高須の事が好きじゃないのか？」

「そんなんじや！高須君とはただ家が近所なだけで、好きとか全然そんなんじやなくて」

「なら嫌いか？」

「……えっ……？」

風が吹いた。

大河の心の中に。

「嫌い……じゃ……ない」

気づけそうで気づけない。

形のハッキリしない何かが、大河の心の中で流れていた。

「でも違うの！そういうんじやなくて、あのね高須君は……、その、そう炒飯！竜児は私に美味しい炒飯を作ってくれたの。励ましてくれたの。嘘ついてまで元気づけてくれて、一緒に居てくれて、竜児

が居たから、竜児が居てくれたから、だから、今だってこうして勇気を出せる」

（そう、私は竜児からいっぱい勇気を貰った。これ以上一緒に居たら、みのりに誤解されて竜児に迷惑を掛けてしまう。だから、もう一緒に居られない。だけど、私の中に竜児はちゃんと居てくれている。傍でずっと応援してくれている。だから、ちゃんとと言える！）

「私は……北村くんが」

（言える！！）

「好きっ！！」

大河の凜々しい声が空に響く。空は青々と澄み渡っていた。清々しい風も吹いている。今の大河の心はきつと、同じように清々と澄み切っているだろう。

「そうか、大丈夫。お前の気持ちは多分、正しく伝わったと思う」

「北村くん……」

「覚えてるか逢坂、去年の事」

「うん……」

「お前はあの頃よりずっと、おもしろい顔をするようになった」

「おおっおもしろい顔!？」

「ああ、高須と居る時のお前は本当に面白い顔をしていた。お前の言う通り、高須はすごい良いヤツだ。そして、あいつをさっきみたいに想える逢坂は本当に素敵な女子だと思う」

「ん……？さっきみたいて？えっ？私なに言った？」

「とにかく、高須と仲良くなったのは本当に安心したぞ」

「ちちちちよっと待って、高須君の事なんか関係なくて、えっと、私の顔おもしろい？あ、ええ、じゃなくって……、安心して何が安心？嘘、何言った？私ちゃんと好きって言えた？」

大河は混乱してきた、北村が何を言っているのか全く分からない。自分の事も分からない。

「大丈夫だよ逢坂。大丈夫……」

「だだだだいじょうぶって何がっ！？私なに言ったか分かってないのにつ！」

「大丈夫！俺達これからきつと、すごくいい友達になれる」

「だから、友達じゃなくて告白！！ えっ？とも……だち……」

「そうだ、友達に」

友達……、その言葉に気づいた大河は全てを悟った。自分は振られたんだ……と。

清々しく感じていた風が寒く感じる。

風で揺れる木の葉の擦れる音が、やけに大きく聞こえた。

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』

「おっと、ホームルームに遅刻してしまう、逢坂も急げよ」

北村はそう言っつて、一番近い校舎の出入り口へと入っつていった。

この校舎裏には立ち尽くす大河ひとりが残った。

いや、姿は見えないが、実は他にも人がいた。大河が北村と二人つきりになる為に来たこの場所だったが、偶然居合わせた者が一人と、二人を追っつて探しにきた者が一人、校舎の影で二人の話を聞いていた。

その内の一人が、校舎の中で北村を待ち構えていた。

「神田か、どうした？もうすぐホームルームが始まるぞ」

柚樹はあの後、教室に残っつて片付けをしていたが、大河を北村に任せたものの、二人の事が気になっつて学校の中を探し回っつていた。

そして、外にいる二人を見つけた柚樹は、校舎の中から大河の告白を聞いていた。

「どうしてだ……、北村」

「何がだ？」

柚樹は真剣な眼差しで北村に話かけた。

その眼差しはむしろ、北村を睨みつけている。

北村は柚樹が何故そんな顔をしているのか、検討がつかなかった。「なんであの子の気持ちにんてあげない？あの子あんなに可愛いじゃないか。確かにさっきみたいに暴れたりする事もあるけど、本

当は素直でいい子だ。それにさつき暴れたのは自分の為じゃない、高須の為だ。人を想えるやさしい子なんだ」

「神田……」

北村は思わぬ神田の言葉に目を見張る。

「それに何だあの言い方……。まるであの子の気持ちを無視している様じゃないか。好きに成れないのなら、無理だつてちゃんと言ってやれよ！一方的に、大丈夫大丈夫だ友達になれるなんて言うて……。あれじゃあの子、どうしていいか分かんないに決まってる！可哀想じゃないか……。それとも、他に好きなヤツでもいるのか？居るなら居るつて言ってやれよ。その方が諦めもつくだろ……」

「お前、もしかして……」

柚樹の目に涙が溜まっていた。

「分かった、とにかく一度教室へ戻ろう。ホームルームがもう始まる。遅刻したら学級委員として示しがつかん。後でならいくらでも話しを聞く。とにかく今はよそう」

「絶対だな。ちゃんと正直に全部話せよ」

柚樹は北村の本意を探るように、鋭い眼光で北村の目を見つめる。

「絶対だ。約束する」

「分かった……」

柚樹は北村が嘘をついている様には見えなかった。

「早く、戻るぞ」

北村は柚樹が納得したのを見て、駆け足気味に教室へ向かった。

教室へ帰る前に柚樹は大河の事が気になって、校舎の外を少し覗いた。

そこには、大河と竜児の二人が並び立つ姿があった。

柚樹はその二人が気になったが、すぐに立ち去った。

大河の北村への告白を見るより、もしかしたら……。

柚樹が教室へ戻ると、既にゆりちゃん先生が来ていたが、出席はギリギリセーフにしてもらえた。でも、この場に居ない大河と竜児は欠席扱いになった。

二人の席は空いたまま。
それは放課後まで、ずっと変わらなかった。

虎の尾っぱ

「大河！」

「あつ……、た、大河つてあんだ……」

「虎と並び立つものは、昔から竜と決まっている。俺は竜になる。そんでもって、竜として大河の傍らに居続ける」

「……………」

大河の体がわなわなと、小刻みに震えだし。

「フンツッ！！」

左足を軸に右脚をしなやかに伸ばして、勢いよく体を回転させると、『ズパンツッ！』という爽快な音を響かせた。

「うおっ！」

「図々しいにも程があるわ。立場をわきまえるつての！」

「おまえなあ……」

竜児は体を仰け反らせて、自分の尻を痛そうに摩っている。

「早く！お腹空いてんだから」

「えっ」

「それと、次の作戦立てるわよ。まだ、あのくらいじゃ北村くんの事、諦めたりしないから」

「あ、それって」

「竜でも犬でもどつちでもいいわ。傍にいてるって言ったんだから、私の為にキリキリ働きなさいよね……、竜児」

「早まつたか……」

大河と竜児の二人は、大河が北村に告白した校舎裏に居た。

大河が北村に告白して、北村が立ち去った後の事である。

柚樹が北村に喰って掛かっていた時と同じ頃、偶然近くに居合わせていた竜児が、北村に振られた大河のところに来て、先ほどのやり取りをしていたのだ。

この日の大河と竜児の席が、放課後まで空いたままだったのは、このまま二人が家路に足を傾けたからだだった。

大河と竜児はその帰り掛けに、竜児御用達のスーパー狩野屋に立ち寄っていた。朝食をとっていなかった大河に、竜児が朝食を作る事になったからである。

「さつさと帰ろうよお。お腹空いてんのに、何でこんなところ寄んなきゃいけないの？」

「しょうがないだろ、お前が肉食いたいって駄々こねるから。昨日は買出し行かなかったから、鯖缶とかしか残ってないんだよ」

大河は母トラが捕らえてきた獲物の肉を、待ちわびていた子トラのように目を輝かせて、食肉コーナーの棚に並ぶ商品を眺めていた。竜児の話をちゃんと最後まで聞いていたのかどうか、怪しいところである。

「ねえねえ、竜児。このお肉おいしそうじゃない？これにしようよ」
大河が竜児の腕をポンポンと叩き、お肉を指を刺していた。

「げっ！バカ言うなよ、それワンパックで二千円以上するじゃないか」

竜児の驚きの表情は、リアクション芸人並みである。

「え〜、けちつ。じゃあじゃあ、これは？」

大河は別のお肉を持って竜児に見せた。

「つて、おいっ！それは超高級『松坂びっちゃん牛』じゃねえか。

そんなの余計に無理だ」

値段を見るまでもなく、竜児はツッコミを入れた。

「随分と甲斐性のない駄犬だこと」

大河はつまらなさそうな顔をしている。

「その『駄犬』に飯を集ってるお前はなんなんだ…」

それに対して竜児は呆れた感じだ。

「ん、何か言った？」

大河はとぼけた様に言った後、口元に少し笑みを浮かべ、流し目で竜児を見た。

「いや、何でも」

竜児は「はあ……」とため息を漏らしていた。

とまあ、こんな風には大河は値段など気にせず、目に付いた自分が食べたい物を竜児に強請っている。大抵それは、竜児が普段口にする事のない食材である事が多く、竜児は即座にそれを棄却していた。

こうした二人の光景は、最近では日常になっていた。それ故に、クラスメイトに目撃されて、誤解を生む原因にもなった訳である。

「このアイス食べたい」

「お前また、これから食べるつてのに」

「いいでしょ別に、ちよつとした腹ごしらえじゃない。それに、ご飯食べる前に餓死したら、どう責任とってくれるわけ？」

「朝食抜いただけで、餓死するやつがどこにいる……。それに、それだけ元気あれば二・三日は大丈夫だ」

「もう少しご主人さまを気遣いなさいよね、バカ犬」

「へいへい、買ってやるから、もう黙つててくれ……」

「始めから素直に言うつて言えばいいのよ」

こんな調子で買い物を買わせ、二人は狩野屋を出た。

大河は竜児に買わせたアイスを、早速食べながら帰り。

竜児は買った商品を入れたエコバックを持って、先に歩く大河の後ろを歩いて帰った。

竜児は家に戻ると早速、大河の為に料理を始めた。

大河は居間でテーブルに片肘を突き、その手に顎を乗せて退屈そうな顔をして料理ができるのを待っている。目の前にはインコちゃんのカゴが置かれ、空いたもう片手でインコちゃんにちよつかいを出していた。

大河がカゴの中に指を突っ込むと、インコちゃんが寄つて来ては、指を咥えようとす。しかし、いざクチバシを閉じようとすると大河は指を引っこ抜き、インコちゃんのクチバシは虚しく空を切つて

いた。

大河はそうやってインコちゃんを指で遊んでいたが、出すのは手だけではなかった。

「ねえ、ブサ鳥。今日のアなたは一段とブサイクねえ」

『ぶっ……ぶさっ……くつくあ……、ぶっ……ぶさ……？』

今度は口を出してきた大河の言葉が、インコちゃんのシルキーハートに直撃したのか、羽が数枚抜け落ちてしまった……。

その様子をフライパンを振りながら見ていた竜司。

「おい大河、あんまりインコちゃんを苛めんなよ」

「だって、暇なんだもん」

ヤツを退屈にさせたら駄目だ。暇を持って余すと厄介な展開になって、世界が創り変えられ……、じゃなくて、インコちゃんがピンチになっってしまう。

「だからってな……。暇なら、その辺に転がってるゲームでもしてろよ」

「はいはい、いいから、喋ってないであなたは手を動かしなさい」

竜司の意見なんてどうでもいいらしい。

「手は止めてねえ、話ながらちゃんと作ってるよ」

「口の減らない駄犬だこと。ねー、ブサ鳥」

『あっ……うっ……ぶさっ……、くっ……くっ……くああっ……』

インコちゃんはショックを受け過ぎて気を失いそうである。しかし、我慢だインコちゃん。大河が奇妙な同好会を作り、有無を言わず付き合わされる竜司が、気の休まる暇がない高校生活を送る羽目にならない為の、やもえない犠牲として……。

「んん……。あれ……、なんでこんな時間に大河ちゃんが居るの？それに竜ちゃんも」

インコちゃんへの天の助けか。居間と隣の部屋を隔てる襖がスーッと開いて、昼寝をしていた竜児の母である泰子が目を覚ましてきた。まだ寝ぼけた顔をして、仰向けに寝たままの格好で襖の間から顔を覗かせている。

「あつ、泰子、起きたのか。これは、えーつとだな…、そう、今日は早上がりの日だったんだ」

泰子自身は高校一年生で高校を中退していて、褒められるような素行ではなかったが、今は一端の母親である。特に竜児が真面目であるだけに期待も大きい。それだけ余計に保護者として、学校をサボるといふような事はして欲しくない立場である。

「早上がりい〜？でもお、昨日はそんな事、竜ちゃん言ってなかったよお？」

「ええーつと、最近、新型ウィルスが流行ってるだろ。それでだな、その対策を教職員で話し合いするから、午後から緊急職員会議することになったんだ。だから、生徒は早めに帰ることになって……」

「そ、そうなのやつちゃん。新型ウィルスなの」

大河は何でもいいから竜児に話を合わせた。

「へえ〜、そうなんだ。でも何でお昼の準備してるの？まだ早くない？」

「大河が今日は朝飯を食べてなかったから、ちょっと早めに……な」

「そっかあ、今日は大河ちゃん来なかったもんね」

「うん、今朝はちよつと用事があつて……」

大河は適当に誤魔化した。

そんな二人を不思議そうに見つめる泰子だが、今朝は竜児に徒ならぬ空気を感じていた。竜児が用意した朝食からして、いつもより質素だったし、竜児の顔もあまり元気がない様子だった。その上、大河が朝食を食べに来なかったものであるから、大河と竜児の事を心配していたのだった。

泰子は竜児の顔を、少し安心したような目で見上げた。

「ねえ、竜ちゃん」

「なつ…なんだよ？」

「大河ちゃんと仲直り出来て、良かったね」

「別に喧嘩してないつて、今朝も言っただろ」

「そつだよつちゃん、別に何でもないの……」

泰子の言葉を否定する二人だったが、泰子にとってそれはどつちでも良かったのかも知れない。大河がまたご飯を食べにやって来た、その事実が目の前にあるから。

「そっかそっかあ……。う〜ん、まだ眠うい。もう少し寝る」

「ああ、そうしろ」

「お休み、やっちゃん」

泰子は隣の部屋に頭を引っ込めて、襖を閉じようとしたが、閉める前に再び顔を出して竜児に声を掛けた。

「そうだ、竜ちゃん。二人だけでこっそり食べちゃーよ。やっちゃんも大河ちゃんと一緒にご飯食べるんだから」

「わかったわかった、出来上がったら起こしてやるから、もう少し寝てろって」

「は〜〜い」

泰子は今度こそ頭を引っ込め、襖を閉じると、ごろんと転がって布団の中に戻り、再び惰眠を貪り始めた。

もしかしたら本当は、学校をサボった事はバレているのかもしれない。けど、ともあれ何とか誤魔化した。竜児と大河は胸を撫で下ろして、二人とも軽いため息を零していた。

存在を忘れかけていた泰子の突然の登場に、ビツクリした大河はインコちゃんの事などもうほったらかしだ。むしろ、インコちゃんにとっては救いだらう。

すっかりしろ、インコちゃん！負けるな、インコちゃん！

「くあつ……」

インコちゃんが誰に返事をしたのかは定かではないが、そのインコちゃんを横に、大河は高須家の庶民的なテーブルにへたって、竜児が料理している後ろ姿を、ぼけーっと眺めてその出来上がりを待っていた。

竜児が手際よく料理を作り上げ、テーブルに皿や茶碗を並べる。食べる準備が出来たので泰子を起こすと、まだ眠そうにしている泰子が奥の部屋から這いずって出てきた。

午前十時五十分過ぎ、早めの昼食を囲む三人。でも、もしかすると、これはちよつと遅い朝食で、大河が高須家に殴り込みを掛けて以来、日常になりつつあった、いつも通りの高須家の食卓だったのかもしれない。

平穏な生活が取り戻されたようにも見えた。

翌朝。

『ダンツ！ダンツ！ダンツ！ダンツ！ダンツ』
大河の住む高級マンション。その寝室の窓を叩く音が鳴り響く。
『……………ろー……………たい……………おきろー……………』

その物音と一緒に人の声も聞こえる、窓が閉まっっていてよく聞こえないが、竜児の声のようだ。

「んん、なにに…、なんなのお？」

大河は寝ぼけ眼を擦りながらベッドから起きて、叩く音と竜児の声がる窓へと近寄った。

そして、半分目を閉じたまま、窓を開けると。

「んぎゅっ!？」

なにやら固い物が大河の頭に直撃。

それは、竜児が大河を起こす為に、ベランダから少し距離のある大河の寝室の窓を、先ほどから叩いていた柄の付いたブラシが、今までであった障壁を失い、大河の脳天に直撃したのだった。

「あ…、悪い…」

「痛い……………、あ、あれ、何？」

「って言うか寝坊だ！とにかく大急ぎで仕度しろ！」

「朝ごはんなあに？なんで今日は、こんな起こし方すんのお？」

「朝飯も弁当もねえ！五分で出ないと遅刻だ！」

大河は昨日、あの後ずっと高須家に入り浸っていた。北村の作戦を立てるといふ名目だったのだが、結局はゲームで遊んだり、お菓子を食べながら雑誌を読んでゴロゴロしてたりと、そんな調子だったので作戦が立つどころか、練ってすらいなかった。

竜児は憂さ晴らしに付き合うつもりで、ずっと大河の相手をしてきたのだが、対戦ゲームで竜児に負けたまくった大河が、勝つまで止めないと熱り立って、深夜遅くまでずっとゲームをし続けていた。竜児は竜児で手加減すれば良かったものの、なかなかどうして不器用な性格なのか、全く手を抜かず本気でプレイしていた。男子がゲームで女子に負けるわけにはいかない。そんなプライドの様な物も有ったのかもしれない。結局、午前の二時・三時まで大河の気は治まらなかった。このくらいの時間帯は、街で唯一のスナックバー『毘沙門天国』で雇われママをしている泰子は、まだ仕事中心なので居ない。保護者の目もなく、二人とも夜更かしをってしまったのだった。

大河と竜児は、ざっと身支度を済ませると、駆け足で学校へ向かった。

昼ご飯を確保する為、学校へ行く途中にあるコンビニに立ち寄り、いちいち選んでいる暇もないので、適当に目についたパンやおにぎりを取って、さっさとレジに持っていった。コンビニを出た後も駆け足で学校に向かった二人は、なんとか遅刻ギリギリで校門を通り抜ける事が出来た。

二人が教室に着くと、その様子はいつもと違った。クラスの顔触れに変わりはないのだが、どうもいつもと何かが違うような気がする。それに、この間まで大河が座っていた席に、別の女子生徒が座っていた。竜児のいた席も同じく別のクラスメイトが座っている。

大河は今まで自分の席だった所の横に立ち、そこに座っている女子生徒を睨みつけるように見下ろした。

「何、あんた。なんで私の席に座ってんの？もしかして、私に対する挑戦？」

「え？いえ、そんな……。ここ、私の席です……。けど……」

あからさまに不機嫌な顔している大河に、女子生徒は怯えた表情をしている。

「はあ？あんた何言って」

「逢坂、お前の席こつちだぞ」

目の前の女子生徒を取って食べそうな大河に、声を掛けたのは柚樹だった。

柚樹は大河の席だと言つて、自分の後ろの席を指差している。その柚樹の席も、何か違和感があった。

「大河、おつはよー」

櫛枝が現状を把握できていない親友のところへやってきた。

「あ、みのりん、おはよ。ねえこれ、どうなってるの?」

「そつかあー、大河、昨日ずっと居なかつたもんね。昨日の帰りのホームルームでね、席替えがあつたのだよー」

「席替え?」

「おう、ざつつ、らいとうっ」

櫛枝は親指を立てた拳を、大河にビシッと突き出した。

「みのりん…」

「あははっ、んでね、ほんとに予定無かつたんだけど、ゆりちゃん先生にどうしても席替えをして欲しいって、頼み込んだ子が居ただよ。それで席替えをすることになったのさ」

「ふーん、そうなんだ」

「そんでもって、大河は神田くんの後ろの席。それから高須くんは、ほらっ、あそこの席いま空いているでしょ。そこが高須くんの席なんだぜー、ベイバー」

櫛枝は席を指差しながら教えてくれた。

「そ、そうなのか。櫛枝、その…、ありがとな、教えてくれて…」

竜児は櫛枝に照れくさそうに礼を言った。何てことの無い言葉だが、好きな女子に話し掛けるので緊張していた。

「はっはっは、気にするな若人よ!」

「若人って…、同級生なんですけど…」

遅刻ぎりぎりでも、相変わらずツッコミは怠らない竜児である。

ツッコミの時だけは、滑舌が良かった。

櫛枝の言う通り、昨日二年C組では席替えが行われていた。教師

の立場で言えば、新しいクラスになってから、まだ一ヶ月も経っていない時期に席替えをするのは、顔と名前が一致しない生徒がまだいるので、なるべくやりたくはなかった。しかし、数名の生徒が必死に訴えた事と、その他クラスメイトも、気になる異性の隣の席や、窓際で一番後ろの席など、今より良い席を期待してその意見に同調したのだ。

クラス全体で席替えという雰囲気になってしまい、ゆりちゃん先生では抑えきれなくなって、なされるがままに席替えが行われた。ちなみに、必死に訴えかけた生徒というのは、大河の席に隣接していた席のクラスメイト達だ。昨日の暴れ狂う大河を見て、恐怖を感じたその生徒たちが、なるべく大河の席から遠ざかろうと、必死になって席替えを持ち掛けたのだった。

「人が居ない間に勝手に決めてくれちゃって。全く、このクラスの連中は……」

大河は知らなかったとは言え、席を間違えてしまった恥ずかしさを、怒りに転化して、不機嫌オーラを放出しながら、クラスメイト達を冷たい視線で見渡していた。

北村はそんな大河を目にして、すかさず大河に声を掛けてきた。

「すまん逢坂」

「ききき…北村…くん」

(どどどどうしよう。昨日あの後、帰っちゃったけど、変に思われでないかな……。それに、北村くんやさしいし、責任感じてたら……迷惑だよな)

「俺が学級委員として、みんなを上手くまとめられていれば、こんな事にはならなかったんだが……。先生には悪い事をしてしまった(やっぱり北村くん、責任感強いんだ。そんな所も、私……。せめて少しでも迷惑を掛けないようにしないと)」

「あ、あのあの…、そんな…、北村くんの…せいじゃ…。それに私、別にどこでも……」

「流石、逢坂、心が広いっ!」

北村は人を言い包めるのが、なかなか上手かった。それ故に、生徒会で副会長も務まっていたのかもしれない。

「そんなこと……くしゅうっ」

大河は北村に褒められて、嬉しいような恥ずかしいような。今さつき怒りを露にしたと思いきや、今度は顔を赤くして俯いてしまった。

「遅れてすいませーん。みなさん、席についてくださーい」

大河と竜児が教室に着く頃には、とつくに始業の鐘は鳴っていた。少し遅れ気味の時間で、ゆりちゃん先生は教室に到着した。教職員の朝礼で教頭先生が長話でもしたのかもしれない。

「お、先生が来てしまった。早く席に戻らないと、逢坂も早く」

「うん…、北村くん…」

(朝から、こんなに北村くと喋っちゃった。き、北村ふえすていはる……えへへっ)

大河は心を寄せる北村に促されて、もじもじとした調子のまま、自分の新しい席に行つて大人しく座った。

大河が座ると直ぐに、柚樹が後ろを振り向いて大河に声を掛けてきた。

「よう、タイガー、おはよ」

「タイガー？」

大河は柚樹の自分に対する呼び方が少し引つ掛かる。今までそんなに意識した事が無かったので、良く覚えて無いがこんな呼び方はしていなかったはずだ。

「タイガー、昨日は居なかつたみたいだけど、どうしたんだ？」

「はんっ！あんたには関係無いでしょ」

他の生徒も自分の事を『タイガー』と呼んでるのは、今までも耳にできていたが、ここまで面と向かつて『タイガー』と呼ぶ生徒は、ほとんどいなかった。自分の好まない呼ばれ方をしている上、プライベートに踏み入るような質問をする柚樹に、大河は機嫌を悪くしていた。

「へえ、ラブレターの事もか？」

『ガタンッ』

大河は柚樹の意外な一言に驚き、音を荒げて席を立った。頬は赤みを帯びていて、少し興奮している。竜児しか知らないはずの、ラブレターの存在が何故か知られている事に、うろたえずにはいられなかった。

「なっ！？ちよっ……あんだ、なに言っ……なに……」

「あ、逢坂さっくん？出席取りますので、ちよっと、座ってくれるかなっ？」

ゆりちゃん先生は出席を取る時に、いきなり立ち上がった大河を注意するが、大河の耳には届いていない。

「逢坂、どうかしたのか？」

北村は大河に声を掛け、ゆりちゃん先生のフオローに出る。

場の空気を読むときは読む、委員長キャラは伊達ではない。

「きつ、北村……くん。別に……何も……」

大河は急に大人しくなって、すんと座って机に俯いた。しかし、内心は穏やかではなかった。怒りと動揺と羞恥が大河の中で渦巻いていた。

「神田くんも、前向いて座ってくださいね」

「はいはい」

柚樹は気のない返事をして前を向いた。

「柚くん？大河？」

榊枝は柚樹と大河の席の方を訝しげに見ている。

「ん、どうしたんだ……」

竜児は不思議そうな顔をしていた。状況が飲み込めてないようだ。「宜しいですか？それでは、出席取りまーす。逢坂さん…は居ますよね。はい、出席……っと。次は、青木さん？」

「はい」

「上田くん」

「はい」

ゆりちゃん先生は気を取り直して、出席番号順に生徒たちの名前を、逐次読み上げて出席を確認している。

（なに、何なの……？ラブレターって、あれの事よね……。まさか、竜児がこいつに喋ったの……？もしもそうなら……、覚悟しなさいよ、竜児！！）

大河は竜児のいる席の方をキツと睨んだ。しかし、竜児は大河よりも前の席で、出席確認するゆりちゃん先生に視線をやっているの、大河には背中を向けている状態だ。大河が後ろから殺気を向けてるとは思いもよらず、竜児は惚けた顔をしていた。

今日は特に連絡事項も無かったようで、出席を取り終えたゆりちゃん先生は、自分の行く授業の準備をする為、すぐに職員室へと戻っていった。

ゆりちゃん先生が教室を出て行くと、大河は真っ先に竜児の席に詰め寄った。そして、内緒話をするように、大河はささめく声で竜児に話し掛ける。

「ねえ、あんた。あれの事、誰かに話したりしてないでしょうね？」

「な、何だよいきなり。あれって、何の事だ？」

「もう少し小さい声で喋りなさいよっ！」

大河は小さいながらも、ドスを効かせた声で言った。

竜児は従順に大河のトーンに合わせる。

「あ、ああ……、それで何だった？」

「あれよあれ、分からないの？」

「いや、全く……」

「だから、その……、ラララ、ラブ……レター……の事に決まってるでしょ。恥ずかしいじゃない、いちいち言わせないでよっ！」

大河の顔が少し赤くなった。

「ああ、あれの事が。んな事言ったって、ちゃんと言わなきゃ分からないって……」

「いいから、あんた、あいつに喋ったの？」

「だから、あいつって誰だよ。お前、さっきから主語があやふやだ

ぞ

「あいつよあいつ、私の前に座ってる奴の事よ」

「ああ、神田か……」

「喋ったの？」

「いや、別に喋ったりは……」

「嘘言わないで！あいつがさつき言ってたのよ」

「いや、まあ、確かに神田は……」

竜児は事情を説明するのを少し躊躇したが、大河がそれを許さないのは分かりきっていた。

「何よ、さつさと言いなさいってば」

竜児はすぐに諦めて続きを話す。

「それなんだが…、神田もあれの事は知ってたんだ、前から……」

「はあ？何でよっ！」

「一応、お前に気を使ったつもりで言わなかったんだが、この前、教室で鞆の取り合いしただろ。お前が諦めて教室を出て、その後すぐに神田が来たんだ。二人で一緒に教室を直したんだが、その時になんでお前が鞆取るうとしたんだろ、って話になって。鞆の中を探したら、お前のラブレターが出てきた、って訳だ……」

「何よそれっ、じゃあずつと前からあいつも知ってたって事？」

「まあ、そういう事だ……」

「何で黙ってたのよ！」

「知らない方がいいと思っただな」

（それじゃあ何よ。私の北村くんへの気持ち、あいつも知ってるって事じゃない……）

大河は竜児をうらめしそうに睨んで、唸り声を上げる。

「う~~~~~」

「唸るなって、しょうがないだろ、まさかラブレターが出てくるとは、思わなかったんだから」

唸る大河に焦った竜児は、うっかり普通のトーンで喋ってしまった。よりによって『ラブレター』という単語を含んでいる時に限っ

てである。このドジっ子めっ。

「しっ！声が大きいっ！」

「どうした高須に逢坂、早く着替えに行かないのか？一限目は体育だぞ」

「はっつ！北村くんっ……！？」

竜児が『ラブレター』という単語を、普通のトーンで口にしたらばかりのタイミングで、北村に声を掛けられたので、大河は心臓が飛び出るくらいビックリした。

その北村はあっけらかんとした顔をしている。恐らく『ラブレター』という言葉は聞こえていない。北村は真面目で勉強も出来て、しっかりしている様に見えるが、結構な天然が入っている。たまにどこか見落としがちな性格だった。

「ああ、わかってる。すぐ行く、先行つててくれ」

竜児は竜児で、大河が横で死ぬほど驚いているのを、事ともせず北村と話していた。

「それじゃ、先行つてるぞ」

北村はそう返して、更衣室に向かった。

「大河、もういいだろ？俺も先行くぞ」

「ちよつと、竜児……」

竜児は半ば大河を振り切るように、北村を追いかけて行った。というか、逃げた。

立ち代りに櫛枝が大河のところによつてくる。

「大河、何やつてるの？早く移動して着替えないと遅れるよ」

「あ、うん」

「さあ行くぜ大河、夕日に向かつてレッツゴー兄弟！」

櫛枝が大河の手を掴んで駆け出した。もちろん、夕日に向かつてではなく、更衣室に向かつてである。

「ちよつと、みのりん。そんなにひっぱらないで……」

ジャージの体操服に着替えた二年C組の生徒が、体育館に集合し

ている。

そこに大河と櫛枝が遅れ気味にやってきた。

「どうした、逢坂に櫛枝。授業はもう始まっている。歩いてないで走ってこい！」

そう二人を急かすのは、二年C組の体育教師である黒間先生。通称『黒マツスル』と呼ばれている。真つ黒に日焼けしたムキムキの筋肉がご自慢のマツチヨ教師だ。

黒田先生は大河と櫛枝が集合場所に着くのを待って授業を開始した。

「では、今日は前に決めた班でミニゲームを行う。その前にまず軽く体を動かす。二人一組でパスボールだ」

「え〜、またパス練かよ、さつさとゲームしようぜ、ゲーム」
パス練習は初めてでは無かったので、文句を言う生徒もいる。

いきなり全力で体を動かすのは、危険ですので我慢してください。
『ピッ』

「さあ、練習開始ッ！」

生徒たちは黒田先生の笛を合図に、パス練習の相手を探し始めた。柚樹が始めから相手を決めていたように、すぐさま練習相手候補に声を掛ける。

「おい、みのりん、俺とペア組もうぜ」

「え、私？おう、やるーやるー」

その様子を竜児と大河は見ていた。

「なっ、あいつ櫛枝と……」

「みのりん、何で……。しかたない、竜児、組むわよ！」

「お、おおう」

大河と竜児、柚樹と櫛枝がそれぞれペアを組んだ。

柚樹は横目で大河と竜児が組んだのを見ると、櫛枝に話しを持ちかけた。

「みのりん、逢坂と高須の隣で練習しよぜ」

「あ、うん、おっけ〜。じゃあ私、大河の隣行くね」

「それじゃ、俺は高須の隣か」

竜児は櫛枝が自分達の所に来るといっているので、大河にその驚きを漏らした。

「なっ、おい、大河。く、櫛枝がこっちくるって、なあ」

「ああん、うるさいっ、分かってるわよ」

大河は面倒くさそうに答えた。

竜児は少し緊張してきた。少し俯き加減に頭を下げて、前髪を気にして弄っている。

そうしてる内に、柚樹は櫛枝と一緒に、大河と竜児の隣へ移動してきた。

「やあやあ、お二人さん、お隣失礼するよ」

「みのりん、いらっしやい。でも、何であいつと一緒になの…?」

大河は親友を快く受け入れるが、その相手には不満があった。

「え、神田くんがどうかした？」

「……うっん、何も」

大河と櫛枝、柚樹と竜児が横に並ぶ形でパス練習が始まった。

櫛枝が元気な声を張り上げて練習を始める。

「よっしやああ！ 柚くん、いっくよ」

「おう！ しまっていこ」

「この日の為に開発した、大NBAボール。行くぜっ、とりゃああ

あ！」

「おおっ！ 消えたっ!?!」

『テンツ……テンツ……テンツ……テンツ……テンツテンツ』

「直線上の目線からは……」

櫛枝の投げたボールは、床を軽くバウンドして転がっていた。

柚樹は櫛枝に付き合っけてリアクションをしているが、少し呆れた顔をしていた。

「あははっ、ごめんごめん、まだ開発中なのだよ」

竜児は櫛枝が隣で練習を始めたので、気を取られ気味だ。ほんの少し視線をずらすだけで、明るく爽やかにパス練習をする憧れの女

子が見える。その姿に見惚れている竜児の顔は、少しだしらない面をしていた。

「櫛枝……」

「おりゃあああー!!」

そのだしらない顔を目がけて、勢いのあるボールが投げられた。

「つうああー!!危ねーじゃねえか、大河!!」

正面に飛んできたボールだったので、竜児は間一髪受け止める事ができた。しかし、手がジンジンとする。大河が思いっきり投げたボールは、ちゃんと受け止められても痛かった。

「はんっ!余所見してるあんたが悪いのよ……っつて、うわあっ!?!」
竜児を嘲る大河のところにも、速いボールが不意をついて飛んできた。

「ごめんごめん、タイガー、手が滑った。あ、でも余所見してる方が悪いんだっけ?」

柚樹は謝っている、が、悪びれた顔は全然していない。

「てんめえ、まさか、わざと……」

柚樹が投げたボールは、大河の反射神経があつてこそ、受け止める事ができたが

「ぶぎゃっ!」

竜児が大河に投げ返した球が、顔面に直撃した。

「すまん、大河……」

「くくく……くおんのおおおおお!!」

大河の体が震える。

怒りの矛先はボールを当てた竜児ではなく、柚樹の方に向けられていた。

「大丈夫、大河?」

櫛枝は顔にボールをぶつけた親友を、その横で心配している。

「あはははっ、ドジだなあタイガー。もしかして、高須も狙ってるのか?これでタイガーの顔にぶつけるの二回目じゃないか」

柚樹は笑いながら言っている。

「いや、わざとじゃ……」

「黙れ、このっ！うおりゃあああー！」

大河はさっき受け止めたボールを、笑っている柚樹に全力で投げ返した。

大河の投げたボールは、竜児に投げた球よりも速いスピードが出ているが、柚樹はそれを片手で受け流し、ボールを床について跳ねて、軽くドリブルをしてから手に持った。

ボールを手で受けた瞬間の音が『バシィィンツツ』と、なかなかの快音を響かせていたので、音からして手が痛そうであるが、柚樹は表情を変えていない。余裕の表情を浮かべて大河の方を見ている。

「いやー、タイガーはやさしいな。こんなへな猪口球で、やさしく返してくれて」

「ちよつと、柚くん？」

大河に対して挑発的な態度の柚樹に、櫛枝は戸惑いを感じていた。「ごめんごめん、みのりん、今度はちゃんと投げるから」

「フッ。何なのよっ、あいつー！」

大河の怒りは全く治まっていなかった。むしろ、煮えくり返している。「ピッッッ」

黒田先生がホイッスルを鳴らし、生徒たちを集合させた。

「……後で、殺すっ！」

この笛の音が鳴り響かなければ、この後どうなっていた事か。笛の音がリング上でラウンド終了を告げるゴングとなった。

「では、ミニゲームに移る。ボードにコートと、そこでプレイする班の番号と順番が書いてある。このボードを確認して始めてくれ」
『はい』

黒田先生の指示に、生徒たちは声を合わせて返事をした。

各々がホワイトボードの周りに集まって、対戦の組み合わせなどを確認している。

体育館にはバスケットコートが二面ある。男女は別々でゲームを

行うため、それぞれ一面ずつ使用する。ステージ側は男子が、もう一方のコートを女子がプレイするといった具合だ。同時に全ての生徒がプレイできる訳ではない。五人で一班。そして、男女それぞれ三班に分かれている。試合をしない班が一つ余るが、その生徒たちは適当な場所に座って、観戦をすることになる。

一つのゲームが終われば、一つの班が入れ替わって次のゲームを行う。A班とB班、B班とC班、C班とA班といった組み合わせだ。プレイ時間は1ゲーム毎に十分間。ゲームの勝敗は特に成績に関係ないので、楽しくお遊びする程度の感覚だ。

竜児と北村は男子B班で、最初にステージ側のコートでゲームを行う。柚樹は男子C班でとりあえずは観戦組だ。大河と櫛枝は女子A班で、二人も最初にゲームを行うことになった。ステージとは反対側のコートだ。

普通なら余った男子C班は男子の試合を観戦、女子C班は女子の試合を観戦するのが自然だが、柚樹は迷わず女子側のコートに行って観戦を始めた。

それを見た、同じく男子C班の春田と能登も柚樹のところへ行った。彼らは純粹に男子の試合よりも女子を見たかったので、先に行った柚樹に便乗することにしたのだ。残ったC班二人も自分達だけ男子側のコートにいてもつまらないので、結局みんな女子側のコートに集まってしまった。得点板は点を入れた班が、自分たちで点数をめくるので、誰も残っていなくても問題はない。

「なんだよあいつら、みんな女子の方に行きやがって」

竜児は文句を垂れてはいるが、内心は期待感が膨らんでいた。自分達が観戦する側になった時も、同じような状況になれば、自分も櫛枝のバスケットをプレイする姿を、堂々と見れるかもしれない。という感じの事を想像していた。男ってヤツだから。

「まあまあ、高須。いいじゃないか、自由なんだし。それより始まるぞ」

「おう、頑張ろうな北村」

一方、女子側のコート。

「おー、柚くん、こっち見に来てくれたのー？おいら頑張るから応援してね〜」

櫛枝は元気に手を柚樹に振っている。

柚樹もそれに声援で返す。

「みのりん、頑張れ〜、負けんなよー」

「まっかせなっさーい、ふはははっ、ふはははっ」

大河はさつき柚樹のせいで、顔面にボールをぶつけたのでご機嫌ナナメだ。

「チツ。なんであいつがこっちに…、目障りなっ」

『ピッ』

「では、始めっ！」

黒田先生がホイッスルを鳴らし、ゲームが開始された。

櫛枝はバスケットは得意種目というわけではないが、運動神経は良い方なので、なかなかキレのある動きをしている。ホワイトカラーの女子バスケット部員になら、引けを取らないであろう。

大河も動きは俊敏だ。運動神経…というより、身体能力は櫛枝よりもかなり高い。機敏な動きや圧倒的な威圧感で、相手のプレイヤーを翻弄している。しかし、所詮は身長145センチ（公称）だった。

相手のプレイヤーは大河にプレッシャーを掛けられると、怖いというのもあって、直ぐパスを出していた。大河はそのパスをカットしようとするものの、身長差があるので頭の上を余裕で通り抜けていった。大河は機敏にボールを追いかけるものの、ボールに追いつく度に頭の上からパスが飛んで、あちこち走りまわされていた。

柚樹は少し滑稽とも言えるその姿をおちよくり出した。

「あはははっ、流石は『手乗りタイガー』さつきから手の上で踊らされてんな」

「うるさいっ、黙れっ！」

大河は横から茶々を入れる柚樹に向かって怒鳴っていた。その隙

に、大河がマークしていた相手が、大河を抜いていき、そのままシュートしてゴールを極めた。

「やったあ〜」

「ナイツシュ！」

相手チームの女子たちは、ゴールを極めて喜んでいる。

「ちよっ……あんたのせいよっ！」

大河は走りながら、柚樹に文句を言っっていた。

柚樹はまだ物足りないのか、大河を逆撫でるように返した。

「ドジだなー、タイガー」

「柚くん……？」

櫛枝は心配そうな顔をしている。

柚樹の隣と一緒に観戦していた能登が、柚樹に自然と浮かんだ疑問を聞いた。

「神田、なんかお前って、手乗りタイガーを妙に怒らせてないか？」

「ん、そうか？」

「教室でもなんか変だったし、さっきのパス練の時も揉めてたっしょ」

柚樹は少しおどけた感じで答える。

「そうでもないけど？一緒に楽しく練習してただけだって」

「あれのどこが……」

能登は呆れた顔をしていた。

その能登の隣に座っている春田も話に参加してきた。

「俺も見てたけどー、柚っち、さっきタイガー狙ってボール投げたっしょ？」

「んまあ、あれは逢坂に狙われた、高須の仇を討とうとしてな……」

「そっかなあ、でもさあ、柚っち、手乗りタイガー怖くないの？」

「春田、あのちっこいのが怖いのか？」

「柚っちも昨日のタイガー見たっしょ。教室中のあらゆる物を蹴散らしては、投げ飛ばし、暴れ狂ってたタイガー」

「まあ、途中からだっただけ」

「それでよくタイガーに、茶々入れられるよねー」

「俺はみんなが無駄に怖がり過ぎてるように見えるけどな」

柚樹が真面目そうな顔して答えたので、能登は呆気に取られている。

「怖がるのが普通だって…」

「だよー」

春田も頷いている。

「んなことより、折角こっちで女子のゲーム見てんのに、余所見してると勿体無いぞ」

柚樹が話題をそらすと、春田がそれに乗っかってきた。

「それもそうだなー。俺さー、女子の走る姿って、結構エロいと思うんだよねー。奈々子さまなんて、もうサイコー。やっぱ揺れは重要だよ」

「やっぱ、そう思う？俺も俺も」

能登も春田もすっかり目の前の女子に夢中だ。今さっき抱いていた疑問も、どこへやら。

コートの中では、大河と櫛枝のいる女子A班が反撃に出ていた。パスを繋いで相手陣地に進み、ボールを受け取った大河が、勢い任せで突破口を開こうとする。相手チームはなんとか止めようと、大河を数人で取り囲んだ。その分、他のメンバーが手薄になる。大河はマークが甘くなった櫛枝に鋭いパスを出してつなぐ。櫛枝の前には相手チームの女子が一人いるだけ。櫛枝はフェイントを入れてかわすと、一気にゴールに攻め入った。

「決めるぜっ、庶民シュート！！ヒザをやわらかく、高く飛んで、置いてくるっ」

櫛枝のレイアップシュートは見事極まり、パサッとゴールのネットを潜った。

「やっほ　　、柚くん、今の見てくれた　　？」

櫛枝は柚樹に、笑顔を向けて大きく手を振っている。

柚樹はそれに応えて、手を振り返していた。

大河はそんな親友に言う。

「みのりん、あんなのに手なんか振らなくていいよ」

「そ、そっかな？あははっ……」

相手チームには、女子バスケット部員がいる。総合的な実力と経験で言えば、相手チームの方が有利のはずだった。しかし、櫛枝の決定力と大河の突破力で喰らいついていく。

両チームとも体育の授業の試合とは思えないほど、キレのある動きをしていた。その中でも櫛枝のプレイは特に際立っていた。色んな意味で…。

今は相手チームがゴール下まで攻め入って、ボールを持ちシュートを打とうとしていた。その前に構えるディフェンダーは櫛枝しかない。

「こうなったら、コース全て塞ぐまでっ！フン」

櫛枝はまるで何人もいるかのように、残像が見えるほど高速でディフェンスをしている。相手選手はその迫力に一瞬怯んでしまった。「そこだあつ！」

相手選手の体が止まった隙を、櫛枝は見逃さなかった。

櫛枝の手が相手選手の持つボールを弾いて、ボールは誰も居ないところへ転がっていった。

すかさず大河が駆け込んでそれを拾い、そのまま速攻をかけてゴールを極めた。

今度は相手チームが反撃にでる。女子バスケット部員がドリブルで突破し、すぐに大河たちの陣地まで攻め入った。

ボールをドリブルしてキープしている女子バスケット部員に、櫛枝がマークについた。

「ふっふっふっ…、実力の差が、戦力の決定的な差ではないって事を教えてやる」

櫛枝は相手チームの女子バスケット部員に揺さぶりを掛ける。精神的

に。

「残り三十秒、ラスト気合を入れろっ！」

黒田先生がゲームの残り時間を告げた。

今は18対20で、大河たちのチームは負けている。

ボールは未だ相手チームがキープしている。なかなか隙を見せない。しかし、櫛枝も簡単には抜かせない。このまま試合が終了すると思われたが、大河が小さい体を活かし、死角について忍び寄った。「後ろっ!!！」

相手チームの仲間が後ろから近づく大河に気づき、声を掛けたがもう遅かった。

「うりゃあっ！」

大河の瞬発力でボールに跳びつき、ドリブルしているボールを並外れた動体視力で捕らえてカットした。ボールは手を離れ転がっていった。

「ナイスカット、大河」

転がっていったボールを櫛枝が拾う。しかし、まだ相手陣地のコートにすら入っていない。相手のディフェンスも戻るのが速い。残り時間もあと僅か。

「ゼロに近い成功率を、ガッツで百パーセントにするオレが勇者だ、とりゃあああっ！」

櫛枝はコート半分以上離れた場所から、相手ゴール目掛けてボールを思いっきり投げた。ボールは相手ゴールに向かって、真っ直ぐ飛んでいく。

ゴール板に跳ね返えり、そして

『パサッ』

「はいっ………た、いやっほ　い、やったやったあ〜〜。決まったぜ、いえい！」

櫛枝は飛び跳ねたり、ピースサインを出したりして、大喜びしている。

「みのりん、すっごいすっごい」

「やったね、櫛枝」

櫛枝の周りに大河とチームの女子たちが集まり、ハイタッチなどして喜びを分かち合った。

『ピッ』

「終了、それまでっ！」

相手チームが反撃に出る前に試合は終了した。

結果は21対20で、大河と櫛枝のいる女子A班の勝利。

櫛枝の独創的なプレイに柚樹は見惚れていたのか、大河にちよっかいを出してばかりいた柚樹は、いつのまにかゲームを観戦していた。

確かに櫛枝は普段から、拳動も発言も人とは違った空気をかもし出してはいたが、今日の櫛枝はいつもよりも、動きも言動も大げさに見えた。それに、ゴールを極める度に手を振ったり、飛び跳ねたり、柚樹に向けるアクションが多かった。

「ったく、実乃梨のやつ……」

柚樹は少し複雑そうな顔をしていた。

男子の方も、12対28で竜児と北村のいる男子B班が勝利した。試合の展開は大体こうだった。昨日、大河が竜児の誤解を解いた（？）ものの、ドリブルをして突っ込んでくる竜児の顔は怖かった。竜児は怖くないと頭で理解していても、ディフェンダーの体は言う事を聞かなかった。

竜児が切り込んだ後、北村にパスをすれば後は北村が何とかしてくれた。外からでも内からでも、得点を極める北村を止める事が出来なかった。

即席チームである上、試合時間も短く、竜児と北村のコンビネーションに、対応する前には勝負が決まっていた。

次は対戦する班が入れ替わって、B班とC班の対戦だ。

女子A班の大河と櫛枝は観戦組にまわる。

観戦組だった柚樹と能登や春田を含む男子C班は、竜児と北村の男子B班と対戦だ。

「今度は私の番ね……」

大河は試合中に柚樹に邪魔されたので、今度は自分が仕返しをしようと思んでいるようだ。

大河はステージ側の男子のゲームを見に行つた。

試合前に柚樹が北村と竜児に声を掛けている。

「よっ、手柔らかに頼むぜ」

「おう、よろしくな」

「神田、手加減せんからな」

榊枝も大河の隣に座り、男子のゲームを応援する。

「柚くんガンバって〜」。北村くんが高須くんもファイト

「く、榊枝…、こつち見に来たのか……」

竜児は自分が観戦側にまわる時に、榊枝のプレイを観れば良いなど思つてはいたが、まさか、自分が榊枝に見られる立場になるとは思つてもみなかった。

「どうした、高須？少し緊張してるようだが」

竜児の表情は普通の人には少し分かりにくかったが、北村は別だった。北村は竜児のちよつとした表情の違いをしつかりと捉えていた。

「い、いやあ…別に……」

竜児は適当に誤魔化す。しかし、内心は榊枝に見られてる事を意識し過ぎて、ちよつとどころではなく、かなり緊張していた。こんな調子でゲームに集中できるのだろうか。

『ピッ』

「では、始めっ！」

黒田先生がホイッスルを鳴らし、ゲームが開始された。

たかが体育のミニゲームであるにも関わらず、みんな本気のプレイだ。

大河は柚樹の邪魔をする目的で来ていたにも関わらず。結局、真剣にプレイしている北村の姿に見とれて、柚樹の事はそっこのけになつていた。

しかし、そんな大河のところにごぼれ球が転がってきた。柚樹と同じチームの春田が、大河にボールを投げ返すように頼んでいる。大河は何か閃いたような顔を見ると、ボールを春田に投げ返すフリをして、大河に背を向けている柚樹に目がけて、ボールを思いつきり投げつけた。

「あ、靴紐……」

たぶん偶然だとは思うが、柚樹は急にしゃがんで靴紐を結び始めた。大河がボールを投げるとき、殺気の籠った声を上げてたからでは決っつしてない。

ボールは柚樹の頭の上を通り過ぎていった。

「危ない高須！」

北村が危険を叫んだが

「へっ……？おわたあっつ」

大河の投げたボールは、竜児の後頭部に命中した。

「あ……………」

大河は自分で投げておいて、啞然としていた。

竜児は打ち所が良かったらしく、結構平気そうな顔をしている。

しかし、北村は竜児に端で休んでおくようにと促した。

竜児は体育館の片隅で、痛そうに頭を撫でている。北村は暫く竜児を心配していたが、とりあえずは大丈夫だと判断してゲームに戻っていった。

北村はコートに戻る前に大河のところに行つて、危ないからと注意すると、それ以降の大河はすっかり沈んで大人しくなっていた。

（何で私がこんな目に……。これも、あいつの所為よ……）

竜児が抜けた代わりに、休憩中の男子A班から一人入ってもらった事になった。

その後のゲームは、つつがなく行われた。

一限目の体育の授業が終わり、休み時間は着替えと移動で直ぐに終わった。

今は、二限目の現国の授業中である。

大河は目の前に座る、神田柚樹という男の事で頭いっぱいだった。良くない意味で……。

(なんなのよ一体、朝から……。おかげで顔面にボールを喰らうわ、北村くんは怒られるわ、散々じゃない。それに、ラブレターの事も知られてたなんて……。この恨み、晴らさんでかつ)

大河の席は柚樹の後ろ。つまり、常に背後を取っている状態だ。いくらでも悪戯しようと思えばできる有利な陣形だ。

柚樹くん、もっと後先考えた方が良かったのではっ!?

(どう料理してくれようかしら……。このシャーペンを思いつきり背中に突き刺す……。くらいじゃ詰まんないわよね。じゃあ、このハサミでこいつの髪をばっさり……。切ったらこっちに落ちて、私の席がこいつの毛で汚れちゃうじゃない……)

怒りの治まらない大河は、柚樹に何か仕返ししてやろうと、何か使えるものはないか、机の中を探してみたり、ペンケースの中身を確認して出し入れしたりと、ごそごそとしていた。

(もう古典的なヤツでいいわ。背中にこいつを辱める張り紙をばっ。なんて書いてくれよう……。そう言えば、こいつの名前なんだっけ、神田……ゆ……。？みのりんは『柚くん』とかいつも言ってたわよね。ゆず……。き、確かそんなだった。何が柚樹よっ、クズ木で十分だわっ!)

柚樹は背中であてする大河の気配を察知したのか、おもむろに大河の方を振り向いた。

「な、何よ……」

大河はノートを一枚破り、そこにマジックで柚樹の悪口を書いてたところに、柚樹が急に振り返ってきたので焦っていた。

柚樹はそんな大河の耳元に、顔を近づけて呟いた。

「北村祐作様へ、逢坂大河より。括弧、迷惑だったら読まずに捨てて下さい、括弧閉じ」

柚樹はそう言うのと直ぐに正面を向いて、授業を聞く体勢に戻った。

大河はラブレターの事を言われ、顔赤くして机に伏せてしまった。しかし、その大河の肩は、恥ずかしさと怒りで震えている。

(何か悪戯したら、手紙のことをバラす……って言いたいわけ?)

大河は授業の間ずっと、威圧的なオーラを柚樹に向けていた。悪戯して晴らすうとしていた鬱憤が、行き場を失ってそのオーラに変わっていたのだ。

大河は時々、余る怒りを唸り声に変えていた。柚樹はそれに気づいていたはずだが、全く知らぬフリをしていた。

大河が唸る度にビビっていたのは、むしろ授業をしている教師であった。教師はビビりながらも、大河にどうかしたのかと訊ねてみるが、大河の反応は無かった。

殺伐とした雰囲気だけが教室中に広がっていた。

大河は午前中の授業の間、ずっとそんな感じの空気を出していた。

昼休みになると、大河は今朝コンビニで買った袋を持って、さつさと竜児の席に行った。忌々しい柚樹の傍から、直ぐに離れたかったのである。

その先にいる竜児は甲斐甲斐しくも、大河と北村の仲を取り持ちうとしていた。

「北村、昼飯、一緒に食わないか？」

「ちよっ…竜児、勝手に、何言つて……、このっ、うらうらうら」

「

丁度そこに来た大河は、恥ずかしがって竜児を小突き回した。

「うわっ、やめろって、大河」

「ったく、相変わらず仲がいいな。しかし、悪いが生徒会の仕事があるんだ。昼食は生徒会室で食べるよ」

北村は申し訳なさそうに誘いを断った。

「ああ、そうか。じゃあ、また別の機会にな」

「せっかく誘ってくれたのに、すまん」

「いや、全然」

北村は『それじゃあ、行ってくる』と言って、生徒会へ行った。

北村の姿がなくなると、大河は竜児に文句を言い始めた。

「なに勝手にしてくれちゃってるのよ」

「なんだよ、お前の為にやってるのに」

「誰がいつ頼んだのよ。犬はご主人さまの言われた通りにだけすればいいの」

「でも、コンビニ飯だった今日はチャンスだったんだぞ。いつもだと俺たち同じおかずの弁当だろ。そんなの北村に見られてもいいのか？」

「それは……いや……だけど……」

「まあ、どの道、北村には用事があったんだ。それより、さっさと食べようぜ」

そう言っただけで、自分の机を反転させて、後ろの机と合わせた。そして、自分の席に座り、コンビニで買って来た昼飯を広げた。大河も竜児と向かい合う席に座って、二人は昼飯を食べ始めた。

同じく、柚樹も弁当を持って昼飯を食べようとしていた。しかし、その前に一緒に食べる相手を探して、櫛枝のところに来ていた。

「みのりん、一緒に食べないか」

「おやおや、今日は随分とお誘いに来られますなあ」

櫛枝はバスケットの練習相手に次いで、お昼のお誘いをしてきた柚樹を、少しからかう様な口ぶりだ。

「まあ、偶には……な。それより、あそこで食べないか？」

柚樹がそう指差したのは、大河と竜児のいる席だった。

「え……、いいけど。でも、今日の柚くん……」

柚樹は櫛枝の話半ばで、大河と竜児のいる席の方へ行っただけだ。

「ちよつとこの席、借りるな」

大河と竜児の隣の席を動かして、大河と竜児の席に合わせて、四つの机を一つに合わせた。そして、柚樹は竜児の隣の席に座って弁当を広げた。

「ちよつと……、誰に断ってそこに座ってるのよ」

勝手に一緒に昼食をとろうとする柚樹を、大河は煙たがって文句を言うが、柚樹はそれを介さない。

「みのりんも、そこ座って、早く食べようぜ」

「じゃあ大河…、一緒に食べようか」

大河は疎ましい男と一緒に来た親友に不満を漏らす。

「みのりん、よりによってあいつなんかと一緒に…」

「あはは…」

櫛枝は笑って誤魔化した。

そんな櫛枝を余所に、柚樹はまた大河にちよっかいを出し始めた。「あれ、タイガー。最近、弁当じゃなかったか？もしかして、親に見放されて弁当作って貰えなくなったのか？」

「はあ？黙れっ、クズ木！」

「何だよクズ木って、柚樹だつての。そっか、体と一緒に脳みそもちっこくて、名前もろくに覚えられないんだ、可哀想に…」

「うっさい、クズ故障！」

「柚樹だつての」

櫛枝が二人の間に割って入る。

「まあまあ、お二人さん。それより、ほら、お弁当食べようか。見てよ私のお弁当。デカく見えても、超低カロリーなんだぜえ」

「おおっ、すごいな櫛枝の弁当！」

竜児は見た目も品数も、しっかりした櫛枝のお弁当に驚いた。いや、感動したっ！！

「おっ、高須くん、一つ食べてみる？ほら、昆布をやるっ」

「えっ、いや、俺は……その……」

櫛枝が自分の弁当の昆布を箸で掴んで、竜児に差し出したが、竜児は櫛枝から顔を背けて、前髪を弄りだした。

「何だ、要らないっか」

「あっ……」

ただ恥ずかしくって顔を背けただけなのだが、折角差し出した昆布を引っ込められてしまった。

「じゃあ、タイガー唐揚げ食べるか？肉食系だから肉好きだろ肉！」
今度はそれを真似して、柚樹が自分の弁当の唐揚げを箸でとって、大河に突きつけている。

「いるかっ！」

大河は唐揚げから顔を背けて、自分で買ってきたパンをかじっている。

「ほれほれ、好物の肉だぞ〜、がお〜」

柚樹は腰を浮かせて、机に身を乗り出し、大河の頬のあたりに、唐揚げをぐいぐい押し当てた。

「……しつこいっての！」

大河は押し当てられる唐揚げから顔を避ける。

そんな事されて大河が食べるはずない。

大河の怒りのボルテージは、どんどん上がっていた。

「つたく、しょうがないなあ、流石に野生のトラは警戒心が強い。

毒なんか入ってないのに、ほら……、はぐっ、ん、もぐもぐ……」

柚樹は大河に食べさせるのを諦めて椅子に座ると、突き出していた唐揚げを自分の口に放り込んで頬張った。

その様子を見ていたクラスメイト達は、今朝からごたごたの絶えない大河と柚樹を、噂せずにはいられなかった。

「なあ、神田のやつ。虎の尾を踏みにいってないか？」

「だよなー、バスケの時もやたらタイガー挑発してたしー」

「昨日、逢坂さんあんなに大暴れしてたのに、神田くん怖くないのかしら……」

「聞いた？さっきの体育の授業、高須くんと共謀して、タイガーにボールぶつけてたらしいよ」

「マジで？勇氣あるなー、あいつ」

教室は大河と柚樹の話題で騒然としていた。だが次の瞬間、大河の怒鳴り声がひとしお響いて、教室はがらりと静まり返る。柚樹がまだ飽き足らず、大河にちよっかいを出していたようだ。

「黙れっ、クズ故障！ぶつつつ殺す！！」

これまでの大河とは明らかに声の質が違った。
声の大きさも、声の中に込められる感情の強さも、これまでには無かったものだ。

大河は口が早いか、手が早いか、怒鳴ると同時に体も動いた。向かい合わせた四つの机越しに身を乗り出して、斜めに対面する柚樹の顔を目がけて、強烈なパンチを繰り出していた。

しかし、間に障害物を挟んで距離があつた事と、大河の体の小ささが災いして、柚樹が上体を少し後ろに反らすだけで、大河の拳は空を切った。

柚樹はそれを嘲笑する。

「ちつこいから、全然手が届かないでやんの」

「なっ…、なんですって!」

怒りが込み上げる大河は歯をきしませ、空を切った拳を胸の前でより強く握り締めた。

「ってか、トラに手なんてないし、前足のキック?チビで短足の手乗りタイガー、これは大橋高校専属の『ゆるキャラ』マスコットに申し分ない。早速、美術部にキャラクタのデザインを依頼しなくてはなあ」

「こっこ、こんの　っ!許さん、表へ出るっつ!」

「おうよ、望むところだっ!」

熱り立つ大河は、憤然と教室から廊下へ出た。柚樹もそれについていく。

二人の様子を見ていたクラスメイト達も、野次馬となつて二人の周りに集まってくる。

心配そうに二人を見つめる、竜児と櫛枝も廊下に来ていた。

見物客に取り囲まれ、柚樹は大河に場所の移動を持ちかけた。

「ちよつと人が多くて邪魔だな、大河、場所を変えないか?」

「フンツ!死に場所くらい選ばせて上げるわ」

「なら、屋上にしよう」

「あら、もう殺られる気まんまんのようね。天国に近い場所を選ぶ

なんて。そうだ、少し用があるから、先行つて貰えるかしら？」

大河はそう言つて、周りを囲む野次馬を掻き分けて、どこかへ向かった。

「おい、大河、もう止めろつて」

竜児は大河について行つて、もう止めるようにと説得しているようだ。

残つた柚樹のところへ、櫛枝がやってきた。

「ねえ、柚くん、やめてよ…、どうしてそんなに大河を怒らせるよ
うな事するの？」

「ごめんな、迷惑かけてばかりで、でも好きにさせてくれないか」

「うん、迷惑とか別にいいけど……。でも、今日の柚くん何か変だ
よ」

「んな事ないつて、俺はいつも通り、至つて普通だつて。それに、
別に本気で逢坂と喧嘩するつもりも無い。頼む、今日だけ許してく
れないか」

柚樹は真剣な眼差しで、櫛枝の目を見つめて言つた。確かにその
顔は、怒りや何かの恨みで、大河と喧嘩しようとしている風には見え
なかつた。

「柚くん…、よしわかつた！信じてあげよう。ほんと今日だけだ
からね」

「ありがと、実乃梨。それと、迷惑ついでお願ひしていいか？多
分、高須の奴も大河を心配して、止めに来ると思うから、引き止め
てくれないか。こんな事、実乃梨にしか頼めないんだ」

「……そういう言い方、ズルいと思います」

櫛枝は少し切なそうな顔をして、ほんの小さな声で呟いた。

「え？」

「ううん、何でも。ホント勝手な奴つて言つただけ」

「ごめんな、実乃梨」

そう言つて柚樹は、櫛枝の頭をやさしく撫でだした。

「ちよつと、柚くん、やめつてば……」

櫛枝は口では止めてとは言っているが、嫌がってる素振りはない。少し恥ずかしげに視線を斜め下の方へやっている。

「もう、しょうがないな……。わっはっは。こっちの事はおいらかに任せてくれたまえ」

少しおどけた感じで言った櫛枝だったが、すぐに真剣な顔に戻って言った。

「けど、大河に怪我でもさせたら許さないからね」

そう言う櫛枝の瞳に、疑いの色はなかった。

「そんな事するかって……。この借りは必ず返すから。今度、何でも言ってくれ」

「わかった、わかった。ほら、もう行きなつて」

「実乃梨、ほんと悪い」

そう櫛枝に謝って、柚樹は屋上へ行った。

さっきどこかに足を運んでいた大河は、廊下に並んでいるクラスのロッカーの前にいた。

ロッカーと壁との隙間から何かを取り出して、大河はそれを背中に忍ばせる。

「今朝からの借り、返してあげるわ……」

そう呟いて、大河は屋上へ向った。

「おい、また物騒な物を……。って、大河、待てよ」

竜児が大河を追い掛け、喧嘩を止めに行こうとした。

その竜児を遮るように、櫛枝が竜児の前に現れた。

「竜児くん、『R』を取ったらミステスです」

「お、おおう、櫛枝。え、ミステスって？」

「まあまあ、気にするでない高須くんや。それより、教室に戻ろうでわなにかー」

「いや、でも大河が」

「案ずるでない！神は全てを見ておる」

「神……？悪い、櫛枝。俺ちよつと行ってく……」

櫛枝は竜児の袖を掴んで止めた。

「高須くん、大丈夫だから。教室に戻る」

「でも神田の奴、今日なんか様子がおかしいし、それに…大河が心配だ！」

「柚くんなら大丈夫だから…、大河に怪我させるような真似、絶対にしないから」

櫛枝は竜児の袖をぐつと強く掴んで離さない。

「櫛枝…、俺はお前ほど神田の事は知らない。だから、お前みたいにあいつを信用もできない」

「大丈夫だから、だって神田くんは…」

櫛枝は竜児に柚樹の事を『大丈夫だ』と言う、自分の根拠を竜児に話した。

それを聞いた竜児は、櫛枝に少し驚き気味に言う。

「はあ？何だよそれ…。それじゃ余計に大河が…」

「高須くん、『だから』大丈夫なんだよ。だから、神田くんは、大河の事が嫌いとかそういうことで、暴力を振ったりしない。それに柚くんは大河が…」

櫛枝は真剣な表情で竜児に訴え掛けている。

「櫛枝？わかった、けど、もしも大河に何かあったら、俺、絶対許せねえから」

「うん、わかってる、それは私も同じ…。ね、高須くん。みんなを教室に戻すの手伝ってくれるかな？」

「あ、ん、おおう、わかった」

櫛枝と竜児は、クラスメイトを教室へ戻るように促す。

「さあさあ、皆の衆。教室へ戻ろうではないか！。直ぐに午後の授業が始まってしまふぞよ。早く席に着いて授業の準備を始めないとお仕置きだべえ〜〜〜」

「おい、みんな、櫛枝の言う通り教室に戻るぞ」

それでも数名の生徒は、面白がって大河と柚樹の後を追って、屋上へ行ってしまった。

風が吹きつける屋上で、柚樹はフェンスの向こうの景色を眺めて、大河を待っていた。

遅れて大河がやってた。猛々しい顔つきで柚樹の前まで歩き、立ち止まった。

二人の喧嘩を見物にきた野次馬が、屋上の入口の扉に隠れるようにして見ている。

大河と柚樹は向かい合い、二人の間に緊迫した空気が流れていた。「よく、逃げなかったわね。てつきり怖くなって、お家に帰ったんじゃないか心配したわ」

「屋上で楽しいデートがあるのに、家に帰るわけないだろ」

「ええ…、楽しくデートしましょう。いいところに連れて行ってあげるわ」

大河は艶かしい声でそう言いながら、先ほどロッカーの前で、背中に忍ばせたものを抜き出していた。それは、高須家に殴り込みを掛けた夜に持っていた木刀だった。その木刀を背中から完全に抜き出し掲げた。

「地獄になっ！！」

大河は啖呵を切ると同時に、木刀を柚樹に突きつけるように、力強く振り下ろした。そして、木刀を両手で握り前に構えた。

「どうした大河、そんな物持ち出してきて。ああ、なるほど、短い手足じゃ届かないからか」

柚樹は木刀を構える大河を、更に挑発している。

「うつつっさい！クズ木を処分するのに、素手で触ってトゲでも刺さったりしたら、嫌でしょっ！」

大河は柚樹の挑発を返しながら、木刀振り上げた。

「そろそろ…死にさらせクズ野郎がつ、うつりゃあああっ！！」

大河は柚樹に飛び掛って、今朝からの恨みを晴らすように、木刀を思いつきり振り下ろす。しかし、力が入り過ぎて大振りになり当たらない。

柚樹はフットワークを使い、間合いを取って木刀をかわしていた。

「へっ、木刀持ってもまだリーチが足りないか？」

大河は挑発を繰り返す柚樹に向かって、何度も木刀を振り回す。しかし、大河の大振りの木刀は空を斬ってばかりいた。

屋上は広く、高須家の居間のように狭くはない。追い詰める場所もなく、大振りで振るう大河の木刀は、間合いを見切ってかわす柚樹を捕らえられずにいた。

「このっ、ちょこまかと……、うりゃああっ！」

かわされれば、かわされるほど、大河の木刀を振る動きが大きくなる。何度も何度も木刀を振り回し、柚樹を攻め続ける。しかし、柚樹はそれをかわし続けた。

「やっぱり……、とらのっ……手じゃうまつ……く、木刀振れないかつ」

柚樹は喋りながらも間合いを計って、軽妙なフットワークで大河の木刀をかわした。

「トラとか、タイガーとか、うっせ　　んだよっ！」

大河は挑発に乗って、怒号を上げ襲い掛かる。しかし、冷静さを欠いて、余計に直線的な動きになり、動きが読まれ一層当たりそうもない。

大河がもつと深いところまで踏み込めば、間合いを詰められて柚樹は木刀をかわせなくなるはずだ。しかし、大河が踏み込もうとすると、柚樹は後ろへ退こうとするとどこるか、飛ぶ込む大河を向い討つような体勢になる。恐らく下手に踏み入れば、木刀を振り抜く前に捕まってしまうだろう。

そう思わせる柚樹の気配が、大河の足を踏みとどまらせる。

「くっ……、こいつ……」

このままでは埒があかない。多少のリスクを覚悟しなければ、この男に木刀をお見舞いすることが出来ないようだ。

大河は一度距離をとって、木刀を突き構えた。

「なめんなああああああああああ！！」

大河は声を張り上げ、全力で柚樹に突進して木刀で突く……かと思っただが、その突きはフェイントだった。柚樹の間合いに入る直前

で、大河はぴたつと止まり、横に木刀を構えた。

柚樹は突き刺すように飛び込んでくる、大河の木刀の先端に集中していた。大河の体全体を見ていなかった、というよりは、大河の動きの速さにそこまでの余裕が無かった。視界が狭かった為、大河のフェイントにはまってしまい、大河の切り替えしの動きに反応が遅れ、体が一瞬間固まってしまった。

「そこだあああ　っ！！」

大河は横から水平に斬るように、思いっきり木刀を振った。

柚樹がとつさに右手を伸ばす。なるべく勢いのない木刀の根元を掴もうとした……が、少し浅かった。

「くっつ……あつ……」

柚樹の表情が少し痛みに歪む。

しかし、柚樹の出した右手は、大河の木刀を掴んでいた。

「チツ。殺りそこなつたか……」

大河は木刀を引き戻そうとしたが、柚樹は離さない。

これは、高須家で暗闇の中、竜児に振り下ろした木刀を掴まれて、木刀を挟んでせめぎ合った時の再現か。あの時は大河がハウスタスト症候群で、止まらなかつたたくしゃみの所為で状況が動いたが、竜児が大河の部屋を綺麗に掃除して以来、大河のくしゃみは止まった。今は前のような展開になりそうもない。力の押し合いが続くと思われたが……。

「うっ、うわああっ……ああ……」

柚樹は大河の体ごと掴んだ木刀を振り回し、その勢いのまま大河の体は振り飛ばされた。

「たあっつ……あう……」

大河は振り飛ばされ、屋上のコンクリートの上に横たわっている。木刀も手放してしまった。

『カランッッ』

柚樹は取り上げた木刀を足元に捨てて、大河に近づいた。

柚樹は起き上がるようにする大河を押し倒し、その上に跨ってマウ

ントポジションの体勢をとった。そして、大河の両腕を抑えつけ、身動きを封じた。

柚樹は身動きのとれない大河に顔を近づけて言った。

「これで終わりか？所詮、ただのチビ虎か？」

「ふっ……んぬうう……くっ……、くそっ……」

大河はもがいて、押さえ付ける柚樹から逃れようとするが、柚樹の抑え付ける力に敵わない。

「ふんっ！ちよっと抑え付けたくらいで、何も出来ないなんてな。

手乗りタイガーとして、俺のペットになるって言うなら、もう終わりにしてやつてもいいぞ」

「誰がっ！クズ野郎の……ペットになるかっ……ての」

「身動きも取れないのに、何言ってるんだか。何なら……このまま

」

『プツッ！』

大河は近づけていた柚樹の顔に、ツバを吐いた。

「へっ、どうよ？それでも何もできないって？」

「こっ……、この」

大河を押さえつけ、余裕の表情を浮かべていた柚樹の顔の色が変わった。

柚樹は右手を大きく振り被る。

「調子に乗んじやっ」

その振り被った手を、大河の顔を目がけ、柚樹は思いっきり叩き込む。

「くっ……」

その力強く振り下ろされる柚樹の平手に、大河は思わず目を瞑った。

「……っ……っ……」

大河の頬を平手で『バシッ』と響かせるはずの叩く音はしなかった。だが、何かを叩く音はなかった。柚樹の振り下ろした手は、大河の顔の横のコンクリートの地面を叩いていた。

虎穴に入らずんば

大河の絶叫が大空に轟くこの大橋高校の屋上に、大河が北村に告白した昨日も二人の男がここに居た。柚樹と北村の二人である。

北村が大河の告白を受けた後に、校舎へ戻ったところを待ち構えていた柚樹は、北村に喰って掛かった。しかし、始業のベルが鳴っていた為、その場では最後まで話しができなかった。

北村は後で話しを聞くという約束を守る為、昼休みに、やる予定だった生徒会の仕事を他の人に引き継いだら、屋上に行くという話になっていた。そして、先に屋上で待っていた柚樹のもとに、北村は約束通りやってきた。

「すまん、待たせたな」

「いや」

挨拶を済ませた後、二人は少し無言だった。大河の告白を聞いた直後に、北村に喰って掛かった時は、柚樹は感情が高ぶっていた。

しかし、午前中の授業を受け、頭を冷やす時間があった今は、冷静さを取り戻していた。

これから話さんとする事は、色恋沙汰の事で男子が普段みだりにする話ではない。柚樹は北村を待つ間も、何をどう北村に聞くか考えてはいた。それに、別にこれからする話を、そんなに恥ずかしい事だとも思っていない。

柚樹も北村も目だけで話す間が、少し欲しかったのである。

そして、柚樹がタイミングを掴むようにして口を開く。

「なあ、北村。逢坂のどこがダメなんだ？」

北村は少し答え難そうな顔をした。ちよつと考え、それから喋り出した。

「別に俺は、逢坂がダメとか嫌いとか…、むしろ、素敵な女性だと思っている。それに、今朝の様に自分以外の誰かの事で、みんなに自分の気持ちの本気でぶつけられる、そんな女の子は滅多にいない」

「なら、付き合えばいいだろ。あんな可愛い子が、自分から勇気を出して告白してきてくれたんだ、断る理由なんてどこにも無いと思うが」

「それとこれは違う話だ……。だが、もしも半年前なら、きっと逢坂の気持ちを受け取っていた……と思う。けど、もう出来ないんだ、今は……」

「理由があるのか？無理にとは言えないが、教えてくれないか」

始めは落ち着いた表情だった柚樹の顔が、今朝、北村に喰って掛かった時の顔に少し戻っていた。

北村は小さくため息をついて、フェンスへ歩いた。

フェンスの網を掴んで、その先の景色を眺めた。

柚樹はその背中を真剣な眼差しで見ている。

北村は屋上からの街の風景を、遠い目で眺めながら昔話をするように話を始めた。

「この屋上だったか……。俺は半年前、この屋上で……逢坂に告白をした」

「えっ？」

「ものの見事、一瞬にして振られたかな」

「それは……」

「俺も、好きだったんだ、逢坂が」

「……………」

「その時は、振られて落ち込んだなんてもんじゃ無かったさ」

「一度振られたから……だから付き合えないって言うのか？」

「そうじゃない、でも、現れたんだ、あの人が……」

北村は言葉を溜めた、そして、溜めた言葉を吐き出すように喋り始めた。

「その日も今日みたいに晴れていて、陽気の良い日だった。その人は屋上の入口の上で、昼寝をしながら日向ぼっこをしてたらしい。

それを俺が逢坂に告白して、起こしてしまったんだ。その人は逢坂に振られて落ち込んでいた俺に、声を掛けてくれた。まさに、俺に

とってはヒーロー登場の瞬間だった。その人は俺を無理やり生徒会に引っ張って行った。そして、これでもかかってくらい俺に仕事をくれた。毎日が忙しくて、他に何かを考える暇なんて無かった。逢坂に振られた事も忘れて、地味な事務仕事に忙殺していた。けど、毎日が楽しかった。気づいた時には、逢坂に振られて落ち込んでいた俺はどこにも居なかった」

「北村……」

「俺は感謝してるんだ、その人に……。今、俺の中にはその人が居る、だから逢坂の気持ちには答えられない。それだけの事だ」

「そっか……。ありがとな、話してくれて」

「あーあ、言ってしまった。みんなには内緒にしてくれな」

「でも、もう少し聞かせてくれないか。今後、逢坂の事を好きになる可能性はないのか？」

「この先も無いだろう」

「お前の言う『その人』が、もしも、お前の中から居なくなるような事があったとしたら、逢坂と付き合うか？」

「それもない。そんな気持ちじゃ、誰に対しても失礼だ」

「そっか……」

「神田、お前は本当に逢坂の事が……」

柚樹は北村の言葉を遮るようにして話し出した。

「北村。逢坂がお前の事を好きなのは前から知っていた。もしも、お前があの子の気持ちを受け入れて、それであの子が笑顔になれるんなら、自分の気持ちなんてどうでも良いと思っただ」

「……………」

「それに、今あいつの傍に居るのは高須だ。もしかしたら、あいつが本当に頼りにしているのは、高須かもしれない。けど、俺は決めた。逢坂の前には俺が立つ。他の誰も見えなくなるくらい近くに。」

北村の前に現れた人の様に……成れるかは分からないけど」

「……………」

「でも、もう他の誰にも大河を譲るつもりも無くなった。お前にも、」

高須にも。例え、大河が本当に望むのは別の誰かであっても、俺は俺の気持ちを入れてぶつける。そしていつか、大河にとって一番大きな存在になって、大河に少しでも多くの笑顔を与えられる男なる。そう決めた」

「……………全く、お前って奴は。俺はお前がそこまで熱い奴だとは思わなかったぞ」

「太陽の輝きが強ければ強いほど、照らされる方も熱くなって当然だろ？」

「ったく……………。流石に俺でもそんな事、口に出して言えんな……………」

「そうか？」

「高須はいい奴だ。あいつなら逢坂を任せても安心だ。そして、お前も高須と同じくらい信じられる。俺は二人とも信頼してる。だから、中立の立場でお前達の事を見守ることにするよ」

「北村、ありがとな、色々」

「いや、俺も安心したよ。逢坂の事を真剣に考えてくれる奴が結構居たんだなって」

「その、今朝は悪かったな……………」

「いいさ、俺もお前に言われて少し反省した。逢坂を傷つけてしまったんじゃないかって。女の子に告白される経験なんて滅多にないしな、俺なりに気を使っただつもりだったんだが、どうも上手く出来なかったらしい」

「そっか……………、そうだよな」

「もう昼休みも終わる、教室に戻るぞ」

「ああ」

こうした二人のやり取りがあつてから約二十四時間後の今、この屋上には大河と柚樹の二人がいる。そして、思いもよらぬ出来事に大河は悲鳴を上げていた。

屋上の扉に隠れてその様子を見ていた能登や春田などの野次馬たちが、先ほどまでとまるで様子が変わった二人を見て、疑問を口にしてお互いの意見を求め合った。

「ねえねえ、あれ、どうなってるの？」

「こつちに背を向けてて良く見えなかったけど、神田がタイガーを殴ってるっぽくなかった？」

「えー、でも、なんか変っぽくない？」

「確かに人を叩いたって音じゃなかったっぽいよな」

「でもでも、逢坂さんすごい悲鳴あげるよ？」

「なんかさー、柚っちタイガーに顔近づけてなかった？」

「えー、それって、それって、もしかしてえー、キスしちゃったみたいなの……キヤツ」

「まっさかー、なんか悪口でも言ってたんじゃない？チビとか、手乗りタイガーとか、今日散々言ってたし」

野次馬たちはあれこれ話すが、柚樹が大河に馬乗りになった時は、野次馬たちに背を向ける格好だった。柚樹が手を振り上げ、大河に振り下ろすところや、柚樹の頭が下がったのは見えたが、具体的に何が起きたのかはハッキリ見えていなかった。

野次馬たちが見ている大河と柚樹に動きがあった。

柚樹は今まで大河に跨り、腕を抑えていたが、むくつと立ち上がって数歩下がり、大河と少し距離をとった。そのまま棒立ちになって、大河の姿をただ見つめていた。

柚樹から解放された大河も、ゆっくりと立ち上がった。

大河は顔を耳まで真っ赤にして、怒りと恥ずかしさで震えている。

「ああ……あなた、なっ……なに……なに……してくれちゃって……るによ……るの。私の……ふあふあふあふあ……」

柚樹は謝る。

「あ……逢坂、ごめん……」

「ふあふあ……フア　スト……キス……、どおおおしてくれるのよっ！ー！」

「ごめん……」

「ごめんで済むわけじゃないでしょっ！ー！」

「ごめん……」

大河の目に涙が滲んできた。

「返して……、私の……返してえええ!!」

「ごめん……」

「詫びる……、死んで……詫びる、うわあああああっ!!」

大河は悲鳴に近い叫び声を上げ、柚樹を攻め立てる。

恥ずかしくて、上を向いて柚樹の顔を見ることができない。

顔を俯け正面も見ずに、ひたすら柚樹を殴った。

「このっ!このっ!私の……私の……私の……大事な……、何て事してくてんのよ……許さない!許さない!ぜっっっっっっっっっったいに許さないんだからああああ!!」

大河は涙がぼろぼろ出て止まらない。

柚樹はただじっと、大河の成すがままを受けている。

ひたすらに殴る大河を、申し訳なさそうに見ていた。

柚樹は時々、大河の打撃にうめいていた。

大河の強烈な殴打は、無表情で我慢できるほど易しいものじゃ無かった。

「死ぬっ!死ぬっ!死んでしまえええええ!!」

大河は柚樹を乱打する。自分の拳が痛くなるほど殴りまくった。

明日の為の其の昔、やや内角を狙いえぐり込むように、打つべし

っ!打つべしっ!打つべしっ!!

「うっ……うっ……ぐすっ……、このクズがあ……こんなゴミ屑に……」

私の……!!」

大河は前が見なくなるほど涙で溢れた。

溢れてくる涙を両手で拭っている。

柚樹は大河に滅多打ちにされて、体がよろめいていた。

大河は右手を後ろに引いて、力を込める。

「うりいいいいいやあっ!!」

大河はその溜めた力を、柚樹の脇腹に全て叩き込んだ。

「……っ……ぐうっ……」

柚樹は大河の痛打を浴びて、苦悶の表情を浮かべ膝を落とした。

殴られた脇腹を手で押さえている。

「つつだああー!!」

膝を落とし体勢の低くなった、柚樹の胸元を目がけ、大河は痛烈な蹴りをかました。

柚樹は蹴り飛ばされて、仰向けに倒れこんだ。

大河は倒れた柚樹を跨ぎ、馬乗りになった。

「さつきと逆ね……、でもキスなんかしないわよ、あんたの顔が変わるくらい殴つてあげる……」

「キスじゃなくて残念だ、でもそれは、後が面倒なんじゃねえ…っ!」

柚樹は大河の肩に近い辺りの腕をぎゅっと掴んだ。

「えっ?」

柚樹は掴んだ腕を思いつきり引つ張り、力任せに大河を振り払う。

「ちよっ……あっ……」

小さな大河の体は、軽々と振り飛ばされた。

「くっ……っあ……っ、はあ……はあ……はあ……」

柚樹を渾身の力で殴り続けていた大河は、相当体力を消耗していた。

堪えていた息も切れて止まらない。

振り飛ばされ、倒れて疲労を感じたら直ぐに動けなかった。

柚樹はゆらりと起き上がって、大河に言った。

「逢坂……その、本当にごめん……。でも、少しは気が済んだろ。

ちよっ……俺、先に戻らせてもらうわ……」

柚樹は大河の本気のパンチを何発も喰らって、相当ダメージが溜まっている。流石に歩くだけでも苦しく、柚樹は腹を抱えながら、よろよろと屋上の入口へ歩いていった。

入口の扉に隠れて見ていた野次馬たちは、柚樹が自分達の方へ来るのを見て、慌ててその場から立ち去った。

そして、柚樹は屋上の入口の扉を開け、校舎の中へ入っていった。屋上には誰も居なくなり、大河ひとりになった。

「ううっ……うっあああああああああん」
もう大河を見ている者は誰も居ない。涙を堪える必要が無くなって、大河は思いつきり泣きだした。
大河は仰向けに倒れたまま、目を右腕で覆って、そのままずっと泣けるだけ泣いた。

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』
学校のチャイムが鳴り響いた。

大河が柚樹に木刀で殴りつけている時には、既に昼休みが終わって、午後の授業が始まっていた。

このチャイムは、午後の最初の授業が終わった事を告げるものだった。

大河の涙はとくに止まっていた。

泣き止んだ後も、倒れたままずっと空を見上げていた。

何も考えてはいなかった、ただ喪失感だけを感じ、流れる雲をずっと見ていた。

大河はチャイムを聞いて暫くすると、よろよろと立ち上がった。

立って少しぼーっとしてから、フラフラと歩き出し、校舎に入って教室へ向かった。

大河は教室に帰って、鞆だけ持ってさっさと帰ろうと思っていた。柚樹と同じ教室に居たくなかった。

無理矢理キスをした奴の後ろの席で、授業なんて受けられる訳がない。

しかし、大河が教室について着いてみると、柚樹の姿は無かった。今は休み時間だ、トイレかどこかに行ったかもしれない。それが大河に合わす顔もないから帰ったかもしれない。けど、柚樹の机に鞆が残ったままだった。

教室に戻ってきた大河の姿を、竜児と櫛枝は見つけて、大河の所へ駆け寄った。

櫛枝が親友を心配して声を掛ける。

「大河、大丈夫？怪我とかしてない？」

「みのりん、大丈夫、ちよつと擦り剥いたくらい。全然平気……だけど、全然平気じゃ……ない……」

大河の目頭がちよつとだけ熱くなった。思い出したくない事を、少し思い出してしまったようだ。

「大河……？でも良かった、怪我はないんだよね」

「うん……、でも……でも……」

少し様子のおかしい大河を心配して、竜児も声を掛ける。

「おい大河、ほんとに大丈夫か？あいつに何か変なことされなかったか？」

「変なこと……うっ……っつ……」

大河の顔が真っ赤になった、さっきより鮮明に『あの瞬間』を思い出したらしい。

黙っているとまた泣きそうなので、大河は竜児にあたる。

『ガスッ！』

「うおっ」

竜児の腹に大河の肘鉄が入った。

「いいから放っておいてっ、このエロ犬っ！！」

「くうっ……、なっ、何だよ人が心配してやってんのに」

「うっさい！いいから黙れっ、にぶ犬」

「わ、わかったよ……、だけど、なんとも無いんだな？」

「……別に」

櫛枝は姿の見えない、もう一人の存在を大河に聞いた。

「ねえ、大河。それで袖くんは？」

「とっくにどっか行ったけど……」

「そうなの？教室来てないよ、どこ行ったんだろ袖くん。帰っちゃったのかな……」

「あいつの事なんてどーでも……。むしろ、このままこの世から消え去って欲しいくらいよっ」

「ん、どして？何があったの大河？」

「……………何も……………」

そういつて大河は、竜児と櫛枝のもとを離れ自分の席に行った。キスされた事は誰にも知られたく無かった、それよりも自分自身が忘れたかった。これ以上、詮索されて聞かれる前に、竜児や櫛枝のもとを離れたのだ。

自分の席に座った大河は、机の上に組んだ腕に顔を伏せた。

竜児も櫛枝も机に伏せた大河が気になったが、今はそつとしておく事にした。

その後の午後の授業は教科書も出さず、机に伏せてずっと眠るようになっていた。

大河は柚樹が戻ってきたら、直ぐに帰ろうと思っていた。しかし、柚樹は放課後までずっと帰って来なかった。

放課後になると、大河は鞆を持って直ぐに教室を出て行った。

竜児も急いで仕度を済ませ、大河を追いかけて行った。

櫛枝は大河に付いてやりたかったが、先に竜児が大河を追いかけて行ったので、竜児に任せる事にした。それに、部活があるので出なくてはならない。ソフトボールの部長を任せられているので、軽率に休む訳にもいかない。

櫛枝が部活に向かう準備をしていると、教室に柚樹が戻ってきた。

「あつ、柚くん、君は今までどうしてたのさ？」

「さつきまで保健室で寝てて、いま起きたとこ」

「保健室に？」

「授業の途中で戻り難かったから、休み時間になるまで保健室で時間潰そうとして、少し横になったら、いつの間にか寝てたんだ」

「そうだったんだ、大河しか戻ってこなかったから、少し心配してたんだよ」

「そっか、ごめんな。それより、大河は？」

「もう帰ったよ」

「まあそうだよな……………、その、どんな感じだった？」

「大河？なんか様子が変わったけど……。柚くん、大河と何があったの？」

「えっ、あ、いや……。別に……………」

キスしました、とは言えません。

「あれっ、どうしたの？その手……………もしかして、大河が？」

柚樹の右手には湿布が張られ、テーピングで巻かれていた。

大河の木刀を右手で止めた時に痛め、手が腫れてしまっていたのだ。

柚樹は右手を隠すように左手でおさえた。

「いや違う……………これは保健室のベッドで寝てたら落ちそうになって、それで手を突いてこうなったんだ」

「……………そっか」

櫛枝はそれが嘘という事は分かっていた。しかし、追求しても無駄だという事も分かっていた。

「大河に今日の事、ちゃんと謝りたいと思ってただけ……………、どうすっかな」

「そんなの簡単、大河ん家に行って謝ってくればいいよ」

「みのりん、大河の家知ってるか？」

「そりゃあ知ってるよー、親友だもん。教えて上げてもいいけど、お高いですぜえ〜」

「ほんと今日は世話になってばかりだな……。俺に出来る事があったら今度、何でもするから」

「うそっそ、いいって。おいら〜達の仲じゃあ〜ないかあ〜、わっはっはっは」

櫛枝は豪快に笑って、柚樹の背中をバンバンと叩いた。

「うっ……………」

柚樹は櫛枝に叩かれうめいてしまった。

手以外にも大河から喰らったダメージは全身に残っていた。

「えっ……………そんなに強く叩いちゃった？」

「あ、いや。それより、大河の家教えてくれないか？」

「うん、ちょっと待っててね」

櫛枝は鞆からノートを取り出して一枚千切り、そこに簡単な地図を描いて柚樹に渡した。

「その辺で一番おっきいマンションだから、たぶん行けばわかると思うよ」

「わかった、ホントありがとな」

柚樹は櫛枝に礼を言つと、鞆をもってさっさと教室を出ていった。「ほんと大河の事ばかり……。おっと、部活へ部活へ。今日も部活がおいらを待ってるぜ」。張り切つて行こ」

櫛枝は仕度の続きを済ませて部活へ向かった。

この日の櫛枝はいつも以上に部活で燃えていた。

学校からの帰り道、大河とその後ろを歩く竜児の姿があった。

「お前、やつぱ、なんか変だぞ。神田と何があつたんだ？」

「しつっこいわね、何でも無いって言ってるでしょっ！」

竜児は大河に心配して声を掛けるが、大河はそれを切つて捨てていた。

大河はとにかく忘れてかった。屋上であつた出来事を。

「つたく、どこまで付いてくるのよ、バカ犬」

「家が隣なんだから、帰る方向も一緒だろ……。そうだ、今日の夕飯なんかリクエストないか？」

「いらない……」

「またお前……。この間も飯抜いてたじゃねえか。ちゃんと食べないと体に悪いぞ、それにお腹いっぱい食べた方が元気出るし」

「いいって……」

「まあ、でも良かったよ、今日は本気で心配したぞ」

「はあ？なんでよ。なんであなたに心配されなくちゃいけないのよ。あんな奴わたしに掛かったら、けっちゃんけっちゃんに決まってるでしょっ」

大河さん……。押さえ付けられてキスされてましたが……。

「うつつさい！」

「えっ、何が…？」

「ちよつと、八工がいたの、八工が」

「まあ、それでだ。お前が屋上に行つてた時に、櫛枝が教えてくれたんだけど、神田のやつ空手の有段者で黒帯持つてるらしいぞ」

「なによそれ……」

竜児は櫛枝に聞かして貰つた柚樹の話をお前さんに言う。

「なんでも、親の知り合いに空手を教えてる人が居て、それで小さい頃から習いに行つてたんだと。それに、中学の部活では剣道部に入つていて、団体戦の大將に選ばれるくらいで、県大会でもそこそこの成績だつたそうさ。個人はもう少しで全国に行けそうだったとかなんとか。まあ後、これはあんまり関係ないかもしれないけど、剣道部の顧問の先生の紹介で弓道もやり始めたとか……」

「ばっかじゃない……何よその設定、アホみたい……」

「はあ、言い返す言葉も……」

「だろっ？だから俺もお前が殴られて、怪我とかしないか心配だつたんだ。けど、櫛枝は武士道精神というかなんとか、そんだけ武道の心得のある奴が、女の子や弱い者に暴力を振るつたりしないとか言つててな、櫛枝があんまり真剣な顔をしてたんで、心配だつたけど教室で待つことにしたんだ」

「そんなのどうでもいいわ、とにかくクズ野郎の話はもう止めて」

「俺は犬扱いで、あいつクズ扱いかよ……。お前にとって北村以外にまともな人間はいないのか？」

「今は北村くんの名前も出さないで！」

「えっ、何で？」

「いいから黙れっ！そして、灰になれっ！」

「つたく、訳分からんやつ……」

「……ふんッ！……」

それ以降の自宅のマンションに着くまで、大河は何も喋らなかつた。

自宅のマンション着いて中に入って行く大河に、竜児は『腹減ったらいつでも食べにこいよ』と声を掛けた。

大河は自宅に戻ると直ぐに寝室へ向かった。寝室に入ると制服をその辺に脱ぎ散らかして、部屋着に着替えベツドに潜り込んだ。

また、布団を被って膝を抱え丸くなっている。これが大河の『落ち込みスタイル』らしい。

（あいつ、信じられない……あんな事するなんて……、私の初めてのキキキッ……キスが……あんな変態に……どうして……なんで私がこんな目に……）

一人で部屋に居て落ち込んでいると、余計に色々考え込んでしま

う。

（北村くん……ごめんなさい……わたし……わたし……）
大河は罪悪感を感じていた、もしも北村と付き合えたら、初めてのキスはいずれ北村に捧げるはずだった。それが、訳も分からない間にクズ野郎に奪われて、自分は汚れてしまった。真っ白なままの自分をもう北村に捧げられない。北村に申し訳ないと思っていた。

（北村くん……わたし汚されちゃった……こんな汚れた私なんか……北村くん……いけないよね……）

「うっ……うっ……うえ……ん……え……ん……うっ……」

大河は泣き出してしまった、もう北村と付き合える資格が自分がないと思うと、涙が止まらなかった。学校の屋上でも涙が枯れるほど泣いたが、それでも涙は溢れ続けた。

どんなに泣き続けようとも、いつかは涙も止まる。

どのくらい経ったのだろうか、大河の目から零れる涙は無くなっていた。

涙は止まっても目は腫れていた。

落ち込んだ気分は全く晴れそうもない。

『カンコーン』

大河の自宅のインターフォンが鳴った。

(誰よ……竜児? たく、しつこいんだから、放っておいて言ったのに……)

『カンコーンカンコーン』
また鳴った。

(うるさいわね……人が落ち込んでるんだから、さっさと帰りなさいよ……)

『カンコーンカンコーンカンコーン』
うるさいくらいに鳴った。

(……)
『カンコーンカンコーンカンコーンカンコーンカンコーンカンコーン』
ンコーン』

(……))
「うつうつつるさああああああああ い! !」

大河の怒りのインターホンが鳴りました。

大河はベッドから飛び出て、ドタドタと走って玄関に行った。

「うるさいったら、竜児」

竜児に文句を言うつもりで玄関のドアを開けた。

「なっ…… なによあんた……なんで……居るのよ……」

玄関を開けた先に居たのは柚樹だった。

「いやっ……何のつもり……? もしかして……私を襲いに来たのっ! ?」

「えっ、襲う? 俺は」

柚樹は玄関に一步踏み入れ、今日一日の事を謝りに来た事を大河に言おうとした。

「いやあああ あ! !」

大河の目の前にいる男は、自分の唇を勝手に奪った男だ。

それに、屋上で死ぬほど殴ってやったとはいえ、力勝負になれば敵わない事は分かっていた。そして、ここは少女が一人暮らしをしているマンション。他に誰も居ない。その上、自分は着ている服は

部屋着で、男に見せるような格好をしていない。

因って、大河は貞操の危機を感じた。

「ちよつと……逢坂……」

柚樹は大河に近寄って話をしようとするが…。

「来ないでっ！」

「何をそんなに……」

柚樹は大河の肩に手を掛け、落ち着かせようと手を伸ばした。

「変態！ いやあああっ！！」

自分の体に触れようとする変質者に怯え、大河は伸ばしてきた手を払い、叫んで部屋の奥へ逃げていった。

「ちよつと、待ってくれよ」

柚樹は靴を脱ぎ、玄関を上がって大河を追い掛け部屋に入った。

勝手に上がりこんでくる変質者に、大河はさらに強い恐怖を覚える。

とにかく逃げるしかない、大河はもつと奥へと寝室に逃げ込んだ。大河は寝室に入る時に、自分が脱ぎ散らかした服に滑って転んでしまった。

「あっ… たあっ……」

柚樹が追いついて寝室へ来た。そして、大河の傍へ寄ろうと寝室に入り掛けた。

大河は転んで床に横たわっている。柚樹から逃げようと立ち上がったが、恐怖のあまりか、いつの間にか腰が抜けていて立てなかった。

大河は体を捻って柚樹の方を向き、尻と手を突いた状態で後ずさったが、直ぐベッドに背中が突き当たってしまった。

大河は今の状況に気がついた。

今、自分がいるのはベッドのある寝室。目の前にはキスを奪った変質者が立っている。そして、一人暮らしで他に誰もいない。ここは高級マンションで防音も他よりしっかりしている。しかも角部屋だ。叫んでもよほどの事が無ければ人に声は届かない。それにオー

トロックで玄関の鍵も閉まっているはずだ。

変質者がその欲望を満たす為の条件は揃っていた。

大河には貞操の危機を危ぶむ恐怖しか無かった。

「いやあああつ！！来るなつ！！寄るなつ！！近づくなああつ！！」

大河はぺたりと座りこんだまま、近くに脱ぎ捨ててあった服を柚樹に投げ出した。

制服のジャケットにスカート、ブラウスにソックス。とにかく、手元にあるものは何でも投げた。

「ちよつと、そんなもん投げるなよ……」

投げられた服は、柚樹の顔に被さったり、体に当たったりした。

柚樹は自分に被さった服を取って、それを手に持っていた。

「変態！！あんた何で私の制服持つてるのよ……、それで一体、何する気つ！？」

いえ、大河さん、あなたが自分で投げたんですが……。

「聞いてくれ、逢坂……」

柚樹が話しをしようと部屋の中へ入ろうとした。

「来るなああああつ！！それ以上、近寄らないでええええええつ！！」

これ以上近づくと余計にややこしくなりそうだ。

柚樹は大河にこれ以上近づくのは無理と諦め、その場から大河に話し掛けることにした。

「大河！聞いてくれ」

「いやいやいや、いやっ！」

大河は目を瞑り、耳を両手で塞いで首を振った。

「俺は」

「聞かないっ！知らないっ！早く出て行って！」

大河は下を向いて、柚樹の方を見ていない。

「お前が」

「あんだなんか、嫌いよおおおおお」

「好きなんだあああああああ」

「お！！！」

「あ！！！」

二人が同時に叫んだ。声が重なって互いの言葉が少し聞き取り辛かった。

「……………えっ?」

大河は自分の耳を疑った。何か柚樹から変な言葉が聞こえた気がする。

大河は顔上げて、柚樹を見た。

柚樹は顔を真っ赤にしていた。けど、その視線は真っ直ぐ大河を見つめていた。

「な……………に?」

大河は今自分が今なにを言われたのか、理解できないでいた。

「だから、好きなんだよ」

柚樹が自分の気持ちを再度伝えた。

大河はそれでも柚樹が何を言っているのか分からなかった。

今日、散々自分に悪態をつけていた奴が、変な事を言っている。

それくらいしか分からないほど、大河は混乱していた。

「ス……………キ……………?」

「好きだ」

「誰を?」

「大河を」

「誰が?」

「俺が」

「何で?」

「理由なんて…、とにかく好きなんだ」

「だから襲おうとしてるの?」

「襲おうとなんかしてない…」

「だって、ここのベッドでいやらしい事しようと思って、私をここに連れてきたんでしょ……………」

「俺はここにベッドが有る事も知らなかったし、大河を連れてきてもない、大河がここに自分で逃げてきたんだ」

「何で私は逃げたの?」

「それは知らない……」

「何で私はチビなの？」

「俺は小さい方が好きだ」

「何で私は変な名前なの？」

「変じゃない、良い名前だ」

「私は誰？」

「逢坂大河」

「ここはどこ？」

「お前のマンション……って、ボケはもういいから、俺の話聞いてくれ」

「……………」

大河は未だ混乱していた。

「その……、さっきは本当に悪かった。ワザとじゃないって言うか、気がついたらキスしてたっていうか……」

（ワザじゃないからって、何だって言うのよ……）

「目を瞑って無防備になった大河の顔を見たら、つい……、なんていうか吸い込まれたというか……」

（そんなの言い訳にすら……）

「でも、これだけは知って欲しくてここに来たんだ。俺、大河の事が好きだ。好きだからキスしたくなった。軽い気持ちじゃない、本気なんだ」

（知らないわよ……そんなの……）

大河の頬は少しピンクに染まっていた。

「一年の頃、俺が実乃梨に会いに、お前達のクラスに行ってたの覚えてるか？」

（なんとなく、覚えてるけど……）

大河は口に出さないで、ずっと頭の中で答えていた。

大河は黙っていたが、柚樹は構わず話を続けていた。

「あれ、本当は実乃梨じゃなくて、大河に会いたくて行ってたんだ」
「えっ？」

「櫛枝とは中学も同じだったし、高校に入って部活も同じになった。中学の頃よりも確かに話すようになったし、仲良くもなったと思うけど、だからって違うクラスまで遊びに行くって感じじゃなかった」

「見たんだ俺、櫛枝が部活に来るときに一緒にいるお前を。最初はただ可愛い子が、実乃梨と良く一緒に居るなって思ってただけだった。色んな所で櫛枝と一緒にいる大河が目につくようになって、したら段々気になって。櫛枝に聞いたらクラスが同じで席も隣だつて言うからさ、櫛枝に会いに行けば、お前に会えるんじゃないかって……」

「……………」

「ずっと前から好きだったんだ、お前の事」

「嘘よつ、今日ずっと私の事バカにしてたじゃない！」

「それも悪かったと思ってる。ただ、俺の事を見て欲しかったんだ。そして、俺の事だけを考えて欲しかった。北村の事も、高須の事も忘れて、俺の事だけを意識して欲しかったんだ。色々変な事言っでごめんな」

「なつ…何…言ってるのよ。そ、それに、バスケの時だってボールぶつけてきたじゃないっ」

「大河なら取れると思ってた。同じタイミングで高須が投げ返したのは、計算外だったけど…。あれも俺の責任だよな、ほんとごめん」

「嘘よ……、そうやってまた私の事バカにする気でしょ。それとも、油断させてやつぱり私を襲う気ね!？」

「大河が俺の事をどう思うかは大河に任せる。ただ、これだけは言っておく、今日は本当に悪かった。学校での事は忘れてくれとは…」

「言えない。けど、今ここで言った事、気持ちに嘘偽りは無い。俺は本当に大河の事が好きだ！」

「なつ、何、勝手に言ってるのよ!」

大河の顔が赤くなった。

「俺の気持ちは伝えた。今言った事をどう解釈するかは任せる」

「任せるって何よ……」

「言いたい事は言った。これ以上、変態扱いされるのも嫌だから直ぐ帰るよ。じゃあな、大河。また、明日」

「柚樹は大河に軽く手を振って、さっさと大河のマンションを出て行った。」

「……………」

大河のマンションには、啞然とする大河が一人残った。

（なんなのよ……一体……）

今日一日なんだったのか、大河は全く理解出来ないうでいた。

『ぐう~~~~ぎゆる~~~~』

大河の腹の虫が鳴った。怒り過ぎて腹が減るって奴だろうか？

（お腹、空いた……………）

大河はぼけーっしながら、外出用の服に着替えた。

ほとんど無意識のまま、自宅のマンションを出て、隣の貧乏くさいアパートに足を向けていた。そして、その貧乏くさいアパートの階段を登って二階に行き、大河は玄関の扉を開けた。

玄関を入って正面は、そのままキッチンになっている。竜児がキッチンで夕食の準備をしている最中で、大河の目の前にいた。

「竜児……………、お腹空いた……………」

「よう、大河。結局、腹減って食べにきたのか。来なかったら持つて行ってやるうと思っ、ちゃんとお前の分も作ってるぞ」

「そう……………、ありがと……………」

大河は気のない返事をした。心ここに在らずという感じだ。

「おう、ん、どうした？ぼけーっとして」

「そう……………、ありがと……………」

「ありがとって……………、お前さっきよりもおかしくなっていないか……………」

「そう……………、ありがと……………」

「お前……………」

大河は靴を適当に脱いで部屋に上がった。

キッチンをフラフラと通って居間へ行くと、どさっと座ってテー

ブルに手を突き、どこを見るでもなくぼけーっとしていた。

『ピツ……くあつ……』

テーブルの上にはインコちゃんのカゴが置いてある。しかし、今日の大河はインコちゃんを完全無視だ。

『くあつ……くえつ……ピツ……くあつ……ほつ……ほつほつ……ハウシン?』

インコちゃんは、隣でぼけーっとしている大河を心配しているのか?

インコちゃん以上に竜児は大河を心配していた。

「大河。今日はごま風味の豚スペアリブと、じゃがいもとパスタのグラタン、それに野菜たっぷりのミネストローネだぞ。バランスが大事だから野菜もとらないとな。どうだ、口に合いそうか?」

竜児は大河に話しかけるが返事は返ってこなかった。

竜児は料理をしながら、時々振り返って大河の姿を見ていた。

大河の様子はおかしいが、ご飯を食べに来るくらいだし、元気が無い訳でもなさそうだ。竜児はそんな大河を気にしつつも料理を仕上げに掛かった。

出来上がった料理を皿に盛り付け、テーブルに並べている頃に、仕事に出かける仕度を済ませ、ご飯を食べに隣の部屋から泰子が出てきた。

泰子は目の前に居た大河に声を掛ける。

「大河ちゃん、おっはよー」

「おはによ……やつちゃん……」

「ん〜?大河ちゃんどうかしたの?」

大河は返事をしたものの、ぼけーっとしていて、泰子の方を振り向く時も、鈍いを動きをしていた大河を泰子は心配した。

「泰子、それが大河のやつ、今日なんかおかしいんだよ。まあ、学校でちょっとあった事はあったんだが……。さっきマンションに帰ってから、余計おかしくなったみたいで……」

「そうなの?大河ちゃん大丈夫?」

「うん……おはによ……」

それが大丈夫だという返事なのか？

泰子はどうもおかしい様子の大河の顔を、訝しげに覗きこんでいた。

「そいつ、さつきつからそんな感じなんだよ。それより遅刻するぞ泰子」

「そうだった、急いで食べないと遅刻しちゃう。それじゃあ竜ちゃん、いったただきま〜す」

泰子は大河が心配だったが、これから仕事があるので、急いで夕食を食べる事にした。

「はい、戴きます」

「ただクマ……」

竜児と、大河も一応ご飯の挨拶をして、高須家の夕食が始まった。

「うん、これ美味しい〜い。今日なんかいつもより豪華っぽくない？」

「そんなことは無いぞ。スペアリブは今日、狩野屋に行って買ってきたんだが、野菜は残りを全部使い切って作ったんだ」

「へ〜、さつすが竜ちゃん、どれも美味しい〜」

「おう、まかせろ。大河はどうだ……って、お前……もうそんなに食ったのか」

一見、動作が鈍く、のろのろとご飯を食べているように見える大河だったが、一口一口が大きく、飲み込むまでの時間も早かった。

仕事に遅刻しないように急いで食べている泰子よりも、大河の皿の上の料理は少なくなっていた。

「ぶは〜っ。ご馳走さま、竜ちゃん。それじゃあ、大河ちゃん竜ちゃん行ってま〜す」

泰子は夕食を食べ終え、仕事先であるスナックバー『毘沙門天国』へ出かけた。

大河も泰子より早く食事を食べ終えていて、何もせず少しぼーっとしていた。

竜児が一番食べるのが遅く、まだ食べている最中だ。

「わたし……帰る……」

先に食事も終え一息ついたし、泰子も仕事に出掛けたので、大河は帰る事にした。相変わらず、うわの空のようだ。

「ったく、食うだけくつたら、もう帰るのかよ。まだ人が食べてるのに……」

竜児の文句も馬耳東風、大河はすつと立ち上がって、とぼとぼと玄關に歩いていき。

「じゃあ……」

と、一言残して大河は高須家を後にした。

竜児は居間から倒れて上半身だけをキッチンに出し、夕食を集るだけ集ってさっさと帰る少女を、目をぱちくりさせて見送っていた。「なんなんだよ……あいつ……。でも、何があっただら」

竜児は色々疑問が残ったものの、残りのご飯を食べて、一人残ったアパートで三人分の食事の後片付けをした。

大河は自宅マンションへ戻ると、ぼけーっとしたまま、まるでオート機能を搭載したマシンのように、就寝前の所用を実行し始めた。

お風呂はシャワーで済ませた。それから、歯を磨いて、髪の手入れなどをした。

ドライヤーで髪の毛が乾いたら、大河はベッドに潜った。まだ、就寝するには早い時間だったが、部屋の電気も全て消して、ベッドに寝て頭の上まで布団を被った。

高須家に夕食を食べに行った時は、竜児も居たし泰子も居て、それに一応インコちゃんも居たので、少し気が紛れてあんまり色々考えなくても良かった。

帰ってきたからも、ほとんど無意識だったとはいえ、髪を洗っている時などは何も考えたりはしない。やることある時は何も考えずに坦々とできた。

布団に潜って寝るだけの体勢になったら、色々な事が頭を巡り始めた。

寝るにはまだ早い時間なので眠気もまだ無かった。

大河は今日一日の事を思い返していた。

昨日、北村に告白をして振られ、憂さ晴らしに竜児と夜更かしをしたら、朝は寝坊して遅刻しそうになった。朝食も食べずに走って学校へ行ったら、居ない間に席替えがあつて、自分の席を間違えてしまった。

新しい席に座ると、柚樹が振り返って声を掛けてきた。『タイガー』と言つて、人をトラ呼ばわりしてきた。体育の時間にパス練習をした時も、柚樹はわざわざ自分の近くへ寄つてきて練習を始めた。だらしのない顔で櫛枝を見ている竜児に、自分がボールを投げたら、その不意に柚樹がボールをぶつけてきた。危うくボールを喰らう所だった。だが、結局は竜児が投げ返したボールを顔面に喰らつた。もしも、柚樹がボールを投げつけてこなければ、そんな事にはならなかつたはずだった。

その後の午前の授業中に、目の前に座る柚樹に悪戯をしようとしたが、ラブレターの事を口にされて悪戯を諦めた。昼休みになつて竜児の所でコンビニ食を食べ始めたが、櫛枝を連れてそこにまで柚樹がやってきた。食べている最中も悪口を言われるわ、唐揚げを顔に押し付けられるわで散々だった。

いい加減キレた大河は、屋上で柚樹と決闘して木刀を振り回したが、ろくに当てられず、木刀ごと振り飛ばされて倒れたところを、柚樹が体を抑え付けてきて動けなくなった。目の前でまた悪態をつかれ、ツバを吐いて反撃したら今度はキスマでされた。

その後の事はあんまり覚えてないが、とにかく柚樹をぼこぼこにしてやった。蹴り飛ばして倒れた柚樹に馬乗りになつて、顔面を殴つてやるうとしたが、腕を掴まれて力づくで払い飛ばされてしまった。屋上の上で倒れている間に柚樹はどこかへ行つてしまった。誰も居ない屋上で、暫く倒れたまま空を見上げていた。

その後、教室に帰ったら、先に帰ったはずの柚樹は居なかった。竜児と櫛枝が心配して寄ってきた。心配する二人を振り払って自分の席で塞ぎ込んでいた。放課後になって学校から帰ると、竜児が心配してくっついて来た。煙たがったが、結局マンションの前まで一緒に帰った。

自宅に入りベッドに潜り込んで泣いていたら、インターフォンがうるさいくらいに鳴ったので、竜児が心配してきたのかと思って出たら柚樹がいた。キス魔から逃げて気がつく、ベッドのある部屋に追い込まれた。泣き叫んで服やらなんやら投げつけて必死に抵抗をしていると、柚樹がおかしな事を叫んだ。

あれは告白だった……のか。思いもよらぬ言葉を叫ばれてキョトンとしていると、柚樹が自分の気持ちを語りだした。呆然として柚樹の話聞いていた。そしたら、柚樹は自分の言いたい事を言っさつさと帰っていった。

一体なんだったんだろう。

(ほんと……、わけわかんない……)

大河は今日の事を思い返していたが、やはり事の事態を飲み込めないでいた。

(あいつ……私の事が……好き……なんだよね……。今日ずっと人の事、散々バカにしてたくせに……。何なのよ……。それに……。キッ……キッ……キス……。勝手に……。もう、わかんないっ!)

人間、嫌な事ほど思い出してしまうものだ。散々ひとをバカにした奴に、キスされた事も嫌なのに思い出してしまっ。

(北村くん……。私どうしたら……。?こんな私の事……。北村くんはどう思っんだろう……)

大河は布団の中でギョツと丸くなった。

好きな人の事を考えたら、今日起きた出来事は余計に切なく感じた。

しかし、今日一日いろいろありすぎた所為なのか、竜児の料理をお腹いっぱい食べたからなのか、段々まどろんできて、知らぬ間に

大河は寝てしまった。

いつもよりちょっと短く、とても長い大河の一日が幕を閉じた。

「おかわりっつー!!」

夜が明け、朝が訪れた高須家の食卓に、元気に茶碗を差し出す少女が居た。

竜児は差し出された茶碗を受け取り、炊飯機の蓋を開けながら元気な少女に言う。

「何でお前、そんなに元気になってんだよ」

「いいから、よそいなさいよ」

竜児が言われて炊飯機の蓋を覗くと、中身は空っぽだった。

「三合炊いたのに……、つたく、お前どんだけ食べるんだよ」

「うっさいわね、いいでしょ別に」

「そうだよ竜ちゃん。大河ちゃん元気になったんだから」

泰子が言った。

「まあ、いいけどよ。それで昨日は何があったんだよ」

「あんたもしつこいわね。何でもないって言ってるでしょ」

「つたく、何も言わない気がよ……。まあ、元気になったんだから、良いん……。だよな」

大河は寝て起きたら気分がスッキリしていた。寝て昨日の事を忘れたのか、それとも、これ以上よくよしても、しょうがないからなのか。大河自身わからなかったが、寝て起きたら気分が変わっていた。

大河と竜児は朝食を済ませると、泰子に見送られて学校へ向かった。

そして、親友である櫛枝との待ち合わせ場所へ向かった。

櫛枝は部活の朝練で一緒に行けない日もあるが、それ以外の日は先に待ち合わせの場所で待っていて、大河と一緒に登校していた。待ち合わせの場所までは竜児と二人で歩いて行くが、櫛枝が居ると大河と櫛枝の二人が並んで歩き、その数歩後ろを竜児がくっついて

行くのが定番だった。

大河と竜児が待ち合わせの場所に着くと、櫛枝がもう待っていた。櫛枝は待ち合わせ場所に来た大河たちを見つけ、少し離れたところから挨拶をする。

「おっはよ〜、大河」

大河は待っていてくれた親友に、駆け寄って行って挨拶をする。

「みつのり〜ん、おっは……………よう……………」

大河が親友の近くに来ると、その後ろに居た人物に気がついた。

「おはよう、大河」

櫛枝の後ろに居た柚樹が大河に挨拶をした。

「くあつ……………神田……………くん」

大河はその意外な人物に驚いていた。

竜児も大河に送られて、三人のもとについた。

「櫛枝…、おはよう……………。ん、神田？なんでお前がここに……………」

櫛枝が竜児に事の説明をする。

「高須くん、おはよう。柚くんとはさつき来る途中で会ってね。こ

こまで一緒に来たんだよ。家の方向は大体一緒だからね」

「そっぴゃ、北村が櫛枝と同じ中学だって言ってたっけ」

「おうよ、おいら達バリバリの地金同士さっ」

柚樹が大河に続いて来た竜児に挨拶をする。

「よっ、高須もおはよう。何だお前ら、毎日二人で一緒に登校してるのか？」

「いつ……………いや、これはだな……………」

また大河との関係を誤解されそうになっている。竜児は焦った。

「高須くん、大河とお隣さんなんだって」

そんな竜児の代わりに櫛枝が説明した。

「へえ〜、そうなのか。なっ、大河、俺と一緒に行くっぜ」

柚樹が大河を誘いだした。

「えっ……………私はみのりんと……………」

「みのりん、この間、高須が偶にはみのりんと一緒に行きたいって

言ってたぞ」

大河は親友と一緒に登校するつもりだったが、柚樹が余計な事を言い出してきた。

「えっ、そうなの？じゃあ高須くん、偶には二人で行こっか」

「ちよつと、みのりん」

大河は助けを求めるように親友を見つめていたが。

「えっ、いや……、俺そんな事は言ってな……」

「ほらほら、早くしないと遅刻しちゃうよ。いこーいこー」

「あつ…… 櫛枝……」

その親友は竜児の袖を掴んで学校へ歩き出してしまった。しかも、柚樹の言った事は嘘っぱい。

「みのりん……」

「じゃあ、大河。俺たちも行こっぜ」

「はっつ……」

親友に取り残された大河は、柚樹と一緒に登校する羽目になってしまった。こうして櫛枝と竜児、柚樹と大河が並んで歩き始めた。

櫛枝は隣で歩く竜児と喋っている。袖を掴んだ手はとっくに離れていた。

「ねえねえ、高須くんって、カレーとハヤシライスどっちが好き？」

「えっ……あ、どっちかって言うと、カレー……かな」

「じゃあさ、モダン焼きと広島風はどっち派？」

「それは……違いがようわからん……」

「私はやっぱりモダン焼きかな。ヤキソバを先に敷いて、『じゅうとうツ』って焼くのがいいのだよ〜」

「そ、そうなのか」

櫛枝は竜児に気さくに話し掛けているが、竜児は緊張して、何とか受け答えするので精一杯だった。しかし、憧れの女子と歩ける事だけは何とか避けたいと、頭をフル回転させていたが、緊張して上手く考えられなかった。ほとんど櫛枝の方から話しを振

っていた。

一方、柚樹と並んで歩く大河は、ギクシヤクとした動きで歩いていた。

隣に歩く男は自分の事を好きだという、しかし、勝手にキスした事を許せるわけでもない。でも、初めてのキスをした相手に恥ずかしくもある。それに自分は北村の事が好きだ。大河は柚樹の事をどういう風に考えていいのか、どう接していいのか分からないでいた。大河は柚樹の顔を見れなかった。俯き加減で歩いている。

変に柚樹の顔を見たら、昨日の事を思い出してしまいそうだったから。

柚樹の方は横に歩く大河の方をずっと見て話し掛けていた。

「なあ、大河」

「なっ、何よ？」

「お前つてやつぱり、可愛いよな」

「ちよっ…、いつ…いきなり何言ってるによよ…のよ。ど、どうせ、またからかってるんでしょ……」

「昨日、俺が言った事、信じて貰えてないのか？それなら信じて貰えるまで、何回でも言っぞ」

「えっ？」

「俺は、大河が」

「あ　！！あ　！！わ、わかったから…やめてよ……、恥ずかしい…じゃない……」

大河は焦った。恐らく、柚樹は『好きだ』とでも言おうとしていたのだろう。そんな事を言われているのを、前を歩く二人に聞かれては恥ずかしい。大河は柚樹の前で手をバタバタ振って柚樹の言葉を遮った。そして、柚樹が口を止めた後は、恥ずかしくてまた俯いてしまった。

「そっか、ごめんな。でも、信じてくれるか？」

「し、信じるから……こんな所でそんな事、言わないで……くしゅっ」

「良かった。でも、昨日はごめんな。その……色々……」

「べつ、別にもう忘れたわ……。けど、思い出したくないから、昨日の事はもう言わないで」

「許して貰えるのか？」

「許せる訳ないでしょっ！で、でも……怒ってないから神田くんも、もう忘れて」

「分かった。昨日の事はもう言わない」

昨日は悪態をつきまくっていた神田だったが、大河のマンションで告白して一夜明けた今日は、一変して大河の事を褒めたり機嫌を取ったりしている。こんな態度を普段は男子からは受けない。慣れない扱いに、大河は恥ずかしくて更に顔赤くしていた。

「ちょっと、高須くん聞いてる？」

「ん、おお。えっと……何だっけ？」

「もう、君は。カレイとヒラメのお腹をピタッて付けたら、普通の魚に見えるかどうかって話ししてた所じゃない……。ねえ、もしかして、私の話し詰まらない？」

「い、いや……そんな事は。すごく面白いし……、楽しい」

「そっか、良かった。それでね」

竜児は憧れの女子と肩を並べ、会話をしながら登校していた。しかし、その後ろで歩く二人の事が妙に気になっていた。時折、櫛枝の会話が聞こえないほど、後ろの二人の話に集中して耳を傾けていたのだった。

そして、大橋高校二年C組の教室。

この教室の朝は、いつも話題が絶えない。始業式の日は大河と竜児の対決で話しが持ちつきりだった。つい数日前も大河と竜児の関係で話がいっぱいだった。そして、今日は、昨日の屋上での大河と柚樹の決闘の話で盛り上がっている。

「マジ、昨日すごかったよね」

「手乗りタイガーやっぱつえ。柚っちフルボッコで超痛そうだったな」

「逢坂さんすつごい怒ってたよねえ」

「やっぱさー、タイガー完全にぶちギレる前、少しおかしく無かった？」

「うん、何があったのかなあ」

「さあ、タイガーを逆撫でするよーなことでもしてたんしょ」

「そっかなー？」

「けど、あれつてどっちが勝ったの？」

「手乗りタイガーじゃね？神田の奴、かなりボコボコにされてたし」「でも最後に逢坂さん投げ飛ばされて、ずっと倒れたままじゃなかった？」

『ガラララッ』

教室の戸が開けられた。

そこに居たのは櫛枝と竜児だった。

いつもなら、大河と櫛枝が、大河と竜児が一緒のはずなのに、今日はいつもと違う二人だ。クラスメイト達は多少の違和感を覚えたが、大して気には止めていなかった。

「高須くん、それじゃね」

「そ、それじゃあ…」

櫛枝と竜児は教室の入口で別れて、それぞれの席に着いた。

続いて大河と柚樹が教室に入ってきた。

クラス中の生徒が注目した。何せ本話題の二人である。しかし、昨日殴り合いをしていたはずの二人が一緒に登校してきた。これはどういった状況なのか。まさか、まだやり合っているのか。二人に静かで熱い視線が集まっていた。

注目の大河と柚樹は席が前後に並んでいる。教室に入ってもそのまま一緒に歩いて席についた。

柚樹は机に鞆を掛けると、後ろを向いて大河に話し掛けた。ここに来るまでしていた話の続きらしかった。

「じゃあさ、お詫びも兼ねてって事で、俺の奢りで今度どこか行かないか？食べたいものとか、見たい映画とかない？」

「えっ……いいよ、そんなの……」

「遠慮するなつて。そういえば、クラスの女子が話してたのを聞いたんだけど、駅前のカフェの新メニューのオレンジタルトが超美味かったんだつて。食べてみたくないか？」

「ちよつと興味あるけど、行かない……。今度、みのりんと一緒に行く事にする……」

「ああ、みのりんと一緒なら行つてくれるか」

「ちよつ……そういうことじゃ……。わっ、私ちよつと高須くんとこ行つてくる」

大河はダツと席を立って、竜児の所へ行つた。

注目の二人をじつと見ていたクラスメイト達は驚いていた。正直、少し怖かったが昨日の様な展開を期待していた。それが、肩を並べて教室に入ってきたどころか、柚樹が大河をデートに誘っているようだった。

二人の間に一体何が起きたのか。『昨日の敵は今日の友』だといふのか。拳を交え、友情ないし愛情が生まれたとでもいふのか？

一夜にして一変した二人の態度に、クラスメイト達は話題に事欠かなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4200p/>

幸せの天使タイガー伝説

2010年12月14日20時55分発行